甲佐町の文化財

〔第三集〕

ごあいさつ

現在の甲佐町は、昭和30年１月１日に、旧宮内村、旧甲佐町、旧龍野村、旧乙女村、旧白旗村の五ヵ町村が合併して成立し、令和７年はこの合併から70年を迎えます。

この70年の間に人口減少、少子・高齢化社会の進行、グローバル化と高度情報化の更なる進展、環境問題への認識の高まり、価値観やライフスタイルの多様化、平成28年熊本地震や豪雨をはじめとした頻発する自然災害や新型コロナウイルスの世界的な流行による安全・安心への意識の高まりなど、本町を取り巻く社会・経済情勢は大きく変化してきました。

そうした昭和から平成、そして令和へと移り変わる時代の中で、歴史と伝統を守り紡いできた先人、そして町民の皆様のご協力により、この節目の年を迎えることができました。

甲佐町では、令和３年に策定した「第７次総合計画」（計画期間：令和３年度～令和12年度）において「人と自然が共生し、にぎわいを育む安全・安心・快適を実感できるまち」を基本理念として掲げ、その実現に向け、「地域資源を生かし、活力にあふれ、にぎわうまち」、「自然と共生し、安全・安心快適にくらせるまち」、「人を育み、交流するまち」、「協働してつくるまち」の４本の将来像を柱として、各種施策を推進しております。

甲佐町には、長い歴史の中で生まれ、育まれ、今日まで守り伝えられてきた貴重な財産である文化財が多数所在しており、令和４年度から町内文化財の調査を進め、本冊子の刊行にいたりました。

この冊子をとおして、これまで培われてきた歴史や文化の継承とともに、文化財の保存や活用などを推進する契機となれば幸いです。

最後になりましたが、本書刊行にあたり日頃から町内文化財の保存管理に尽力されております文化財所有者の皆様、甲佐町文化財保護委員の皆様ほか多数の方にご協力をいただきました。関係者全ての方に心より御礼申し上げます。

令和７年３月
甲佐町
町長　甲斐　高士

はじめに

甲佐町は細川藩の行政区画である手永の一つであった甲佐手永とその町域が重なり、その後現在の名称と行政区画が同じである県内でも大変珍しい地域です。

また、歴史的には中世から現代に至るまで緑川舟運の出発地点として重要視された水陸交通の要衝であり、緑川舟運の起点に建立された、肥後国二宮である甲佐神社には鎌倉時代に肥後国の御家人竹崎季長が「蒙古襲来絵詞」（令和３年国宝）を奉納したとされるなど、古くから海と山を結ぶ水陸交通の結節点として栄えてきた歴史的文化資源にあふれた地域です。

甲佐町内には、昭和９年に国天然記念物に指定された「麻生原のキンモクセイ」や令和３年に国史跡に指定された「陣ノ内城跡」をはじめ、町指定文化財 16 件の他に 200 件を超える未指定文化財が所在しています。

これら文化財については、平成 28 年（2016）熊本地震により被災したものも多くありましたが、その多くは町民の皆様によって復旧される等、文化財は住民共有の財産であり、地域文化の象徴として大切にされて来ています。

そこで、甲佐町合併から 70 年を記念して、『甲佐町の文化財 第一集』（平成２年刊）と『甲佐町の文化財 第二集』（平成５年刊）を基に、町内の指定・未指定文化財について『甲佐町の文化財 第三集』としてまとめました。

この冊子が町民をはじめ多くの方々の目に触れることで、地域文化が再確認され、町内には多種多様な文化財が所在することをあらためて知っていただく機会となるとともに、住民共有の財産である文化財の保存と活用が図られ、次世代に継承される契機となれば幸いです。

最後になりましたが、本書編纂にあたり、日頃から町内文化財の保存管理に尽力されております文化財所有者の皆様、甲佐町文化財保護委員の皆様ほか多数の方にご協力をいただきました。関係者全ての方に心より御礼申し上げます。

令和７年３月
甲佐町教育委員会
教育長　蔵田　勇治

凡　　例

1．本書は、令和７年３月末現在の甲佐町所在の指定・未指定文化財の内、有形文化財及び記念物を紹介する冊子です。郷土芸能は今回未調査のため『甲佐町の文化財 第一集』及び『甲佐町の文化財 第二集』を参照ください。

2．本書では、文化財保護法上の定義に基づく指定文化財だけではなく、先人達が守り伝え、地域の人々の文化活動により作り出されてきた歴史的・文化的価値のある未指定文化財を掲載しています。

3．未指定文化財は下記の資料を基にし、併せてその後の調査で確認されたものについて、近代（幕末開国頃から第二次世界大戦終結頃まで）以前の甲佐町の歴史に関するものを、甲佐町文化財保護委員会において検討を重ねて掲載しました。そのため、下記資料中の文化財においては滅失したものや今回未確認のもの等については掲載を割愛しています。また、掲載する文化財の中にはその後の調査の結果、当時の名称と異なるものも確認されており、それらについては新たな名称を記載し、その後方に（旧：　）と記載しています。

なお、町内には数多くの未指定文化財が所在しているため、全てのものが網羅できているわけではありません。

・『甲佐町の文化財 第一集』（平成２年刊）

・『甲佐町の文化財 第二集』（平成５年刊）

4．掲載順は宮内地区、甲佐地区、竜野地区、乙女地区、白旗地区とし、各地区内は行政区番号順に掲載しています。

なお、掲載行政区は、甲佐町行政区設置規則（令和２年４月１日施行）によっています。

5．文中で参考とした主な文献の概要は次のとおりです。

・『国郡一統志』

寛文７年（1667）細川藩の儒学者、北島雪山によって編纂された肥後で最も古い地誌。

藩内の寺社古城址名称が調査され、当時の村落で祀られていた寺社・祠堂の様子が分かる。

・『肥後国誌』

明和９年（1772）森本一瑞が著した社寺縁起や古城の由来などを増補した地誌。

明治 14 年（1881）～ 17 年（1884）に水島貫之・佐々豊水、大正５年（1916）に後藤是山が改定増補している。

・『肥後国上益城郡神社明細帳』

明治 12 年（1879）明治政府が行った神社統制の記録。

全国統一の様式で、鎮座地・社名・祭神・由緒などが記載されている。

6．本書では、石堂や石祠等の石造で本尊を保護する空間を持ち、屋根を持つものについて、神仏混淆の時代のものもあり、厳密に分離できないものもあることから「石室」と記載しています。

7．掲載した図版の内、「町指定文化財 05. 鵜ノ瀬堰」で掲載した「緑川絵図」は熊本県立図書館の許可を得ています。

8．掲載した写真の内、「167. 中山錦川遺跡」で掲載した写真は熊本県教育庁教育総務局文化課の許可を得、その他の写真や図版は甲佐町教育委員会社会教育課に著作権があり、保管しています。
9．各文化財の解説は、甲佐町文化財保護委員会と甲佐町教育委員会が執筆し、甲佐町教育委員会が編集しました。

◆刊行に向けた組織

【甲佐町教育委員会】

教　育　長　田上　浩輝（～令和６年８月）
　　蔵田　勇治（令和６年 12 月～）
社会教育課長　内田　健司
文化財係長　上髙原　聡
文化財係参事　奥村　伸二
文化財係　松本　みどり（会計年度任用職員）

【甲佐町文化財保護委員会】

委　員　長　赤星　眞照
委　　員　石坂　　妙
　　北里　義友
　　成松　和夫

【協力者】

清村　一男（前甲佐町文化財保護委員長）
本田　荘一（前甲佐町文化財保護委員）
前川　清一（熊本県文化財保護審議会委員）
青木　勝士（くまもと文学・歴史館友の会 世話人）
石原　　浩（八代市立博物館未来の森ミュージアム 学芸員）
市原　靖隆（熊本県阿蘇郡高森町立高森中学校 教諭）
有木　芳隆（公益財団法人永青文庫 副館長）
佐藤　征子（くまもと文学・歴史館協議会委員）
熊本県教育庁教育総務局文化課
熊本県立図書館
文化財保有者及び各行政区長

（順不同、敬称略）

目　次

【国指定文化財】

1．天然記念物
麻生原のキンモクセイ…… 2
2．史跡 陣ノ内城跡
（旧：陣内館跡）…… 4

【町指定文化財】

1．陣ノ内城跡
（旧：陣内館跡）…… 9
2．船津東前横穴群…… 9
3．早川城跡……10
4．早川六地蔵……11
5．鵜ノ瀬堰……12
6．円福寺跡阿弥陀如来坐像……13
7．目野薬師如来及び十二神将像
（旧：目野薬師堂）……14
8．松尾城跡……15
9．木造如来形坐像……16
10．緒方家文書……17
11．簗の樋門……18
12．緑川上流通漕碑……19
13．下豊内の逆修碑
（旧：供養塔（逆修碑））……20
14．薬王寺の宝篋印塔……21
15．津志田の逆修碑
（旧：津志田板碑）……22
16．豪淳の碑……23

【宮内地区】

1．広瀬旧道眼鏡橋……27
2．トロッコ林道の鉄橋……27
3．広瀬阿弥陀堂……27
4．谷内阿弥陀如来像……28
5．本坂谷天満宮……28
6．金山……28
7．堂ノ原観音堂……29
8．ミグマタイト……29
9．西原薬師堂……29
10．西原の宝塔……30
11．西原荒神……30
12．小鹿の堤……30
13．大王神社……31
14．井戸江の猿田彦大神……31
15．井戸江地蔵堂……31
16．安平阿弥陀堂……32
17．甲佐大明神降坐之碑……32
18．石の間臥（旧：石ノ間伏）……32
19．御手洗橋……33
20．御手洗神社……33
21．安平の猿田彦大神……33
22．甲佐神社……34
23．上揚弁財天……36
24．上揚の板碑……36
25．上揚仁王堂……36
26．日枝神社（山の神）……37
27．上揚の猿田彦大神……37
28．上揚観音堂
（旧：上揚阿弥陀堂）……37
29．神宮寺住職の板碑……38

【甲佐地区】

30．尾北の猿田彦大神……41
31．尾北眼鏡橋……41
32．白象山 永明寺
（旧：永明寺）……41
33．永明寺阿弥陀堂……42
34．東寒野地蔵尊……42
35．白石板碑……42
36．堂迫眼鏡橋……43
37．大祇神社……43
38．大祇眼鏡橋……43
39．宮園地蔵尊……44
40．千才丸の猿田彦大神……44
41．西の観音菩薩……44
42．西の猿田彦大神……45
43．小川島六地蔵……45
44．小川島の猿田彦大神……45
45．鵜ノ瀬堰観音菩薩……46

46. 上豊内の猿田彦大神……46
47. やな場（旧：上豊内やな）……46
48. 緑川製糸場跡記念碑……47
49. 四方仏（旧：上豊内四方仏）……47
50. 玉造神社
（旧：西宮八幡宮）……47
51. 上豊内阿弥陀堂……48
52. 法念寺跡の板碑……48
53. 稲荷大明神……48
54. 下豊内薬師堂……49
55. 下豊内釈迦堂……49
56. 下豊内阿弥陀堂……49
57. 下豊内横穴群……50
58. 下豊内新井手隧道……50
59. とくどうさん……50
60. 甲南橋地蔵
（旧：岩下地蔵尊）……51
61. 恵比寿神社……51
62. 井芹経平先生生誕の地
記念碑……51
63. 天理教熊明分教会……52
64. 光縁山 教栄寺 ……52
65. 岩下地蔵堂……52
66. 甲佐井手（大井手）……53
67. 仁田子地蔵尊……53
68. 仁田子の猿田彦大神……53
69. 仁田子菅原神社……54
70. 大町の板碑……54
71. 立岩神社……54
72. 田上氏里の碑……55
73. 岩鼻神社……55
74. 八角塔（旧：清正公供養塔）……55
75. 新井手（上井手）と
清正公山地蔵尊……56
76. 横田観世音堂……56
77. 長楽山 正宗寺 ……56
78. 横田の猿田彦大神……57
79. 横田地蔵堂……57
80. 有安の猿田彦大神……57
81. 有水山 正法寺 ……58

【竜野地区】

82. 目野の石造物……61
83. カワベニマダラ……61
84. 宮野観音堂……61
85. 中尾釈迦堂……62
86. 若一王神社……62
87. 木原寿八郎の碑
（旧：木原寿八郎碑）……62
88. 中横田阿弥陀堂……63
89. 下横田天神社……63
90. 清涼山 寿専寺
（旧：清涼山寿専寺）……63
91. 宇佐園の猿田彦大神と
明治 45 年洪水記念碑 ……64
92. 下横田の石造物……64
93. 御崎大明神……64
94. 祇園社……65
95. 九折阿弥陀堂……65
96. 下横田六地蔵……65
97. 浅井観音堂……66
98. 若宮神社……66
99. 日吉神社（将軍堂）……66
100. 浅井猿王権現堂 ……67
101. 田代歳神 ……67
102. 田代阿弥陀堂 ……67
103. 田代の猿田彦大神 ……68
104. 田代地蔵 ……68
105. 大谷歳神 ……68
106. 大谷観音堂 ……69
107. 光明山 皓月寺……69
108. 大峯遺跡 ……69
109. 大峯菅原神社
（旧：大峰菅原神社）……70
110. 大峯地蔵尊 ……70
111. 大峯馬頭観音
（旧：大峰馬頭観音）……70
112. 下大峯の観音堂（四方仏）……71
113. 城平板碑 ……71
114. 上知行の天神社 ……71
115. 上知行薬師堂 ……72

116. 下知行の猿田彦大神 ……72
117. 幸野の地蔵堂 ……72
118. 海陸大明神 ……73
119. 清水の遊水池 ……73
120. 小原山ノ神 ……73
121. 小原観音堂 ……74
122. 伝承阿蘇惟前墓 ……74
123. 大原地蔵堂 ……74
124. 山口観音堂 ……75
125. 六谷地蔵尊 ……75

【乙女地区】

126. 船津磨崖五輪塔と
磨崖板碑 ……79
127. 谷の観音堂 ……79
128. 船津地蔵堂 ……79
129. 船津観音堂 ……80
130. 迫の大乗妙典一部石塔 ……80
131. 船津六地蔵 ……80
132. 船津支石墓（ドルメン）……81
133. 山口薬師堂 ……81
134. 山口の猿田彦大神 ……81
135. 山上神社 ……82
136. 船津の猿田彦大神 ……82
137. 船津阿蘇神社 ……82
138. 船津仏像堂 ……83
139. 桜地蔵 ……83
140. 麻生原菅原神社 ……83
141. 麻生原観音堂 ……84
142. 麻生原の猿田彦大神 ……84
143. 光明山 青蓮寺 ……84
144. 麻生原伊勢堂 ……85
145. 麻生原天神社 ……85
146. 麻生原金八（水神）……85
147. 塔の木さん古墳
（旧：麻生原塔ノ木古墳）……86
148. 世持・石佛遺跡と
世持・道免遺跡 ……86
149. 世持沢水池 ……86
150. 世持地蔵堂 ……87
151. 世持妙見社 ……87
152. 虚空蔵菩薩
（こくんぞさん）……87
153. 世持天神社 ……88
154. 世持地蔵尊 ……88
155. 荒人神社（旧：三賀神社）……88
156. 南三箇水天宮 ……89
157. 南三箇観音堂 ……89
158. 南三箇阿弥陀堂 ……89
159. 南三箇六地蔵 ……90
160. 明神堂 ……90
161. 南三箇大平観音、水神 ……90
162. 中山の板碑 ……91
163. 中山菅原神社 ……91
164. 中山むさしさん ……91
165. 中山地蔵堂 ……92
166. 中山横穴群 ……92
167. 中山錦川遺跡 ……92
168. 津志田菅原神社 ……93
169. 津志田地蔵尊 ……93
170. 乙女山 光現寺 ……93
171. 津志田八幡宮 ……94
172. 津志田地蔵尊（宮坂地蔵）……94
173. 長興寺薬師堂と
熊野座神社 ……94
174. 長興寺跡の宝塔群 ……95
175. 津志田のなまず塚 ……95
176. 田口彌城天神 ……95
177. 上田口不動尊堂 ……96
178. 田口菅原神社 ……96
179. 上田口薬師堂 ……96
180. 法性山 聞得寺
（旧：法陛山聞得寺）……97
181. 下田口地蔵堂 ……97
182. 田口小一領神社 ……97
183. 下田口観音堂 ……98
184. 下田口六地蔵 ……98
185. 田原板碑 ……98
186. 田原観音堂 ……99
187. 和田内天神社 ……99

188. 和田内阿弥陀堂 ……99
189. 山伏塚 …… 100
190. 府領観音堂
（旧：府領毘沙門堂）…… 100
191. 府領若宮社 …… 100
192. 府領首塚 …… 101

【白旗地区】
193. 辛崎神社 …… 105
194. 照月山 浄林寺 …… 105
195. 養寿院 …… 105
196. 養寿院跡の石造物群 …… 106
197. 玉堂山 玉祥寺 …… 106
198. 承陽山 西福寺
（旧：浄陽山西福寺）…… 106
199. 宮地獄神社 …… 107
200. 早川菅原神社（早川三社）
（旧：菅原神社）と早川天神像…… 107
201. 早川熊野座神社（早川三社）
（旧：熊野座神社）…… 107
202. 早川の宝篋印塔
（旧：早川宝篋印塔）…… 108
203. 長石山 薬王寺（虚鐸山薬王寺）
（旧：薬王寺長石山）…… 108
204. 早川厳島神社（早川三社）…… 109
205. 早川の猿田彦大神 …… 109
206. 北早川菅原神社 …… 109
207. 北早川の猿田彦大神 …… 110
208. 四堂崎阿弥陀堂 …… 110
209. 四堂崎庚申塔 …… 110
210. 四堂崎の経塚 …… 111
211. 四堂崎の三尊板碑 …… 111
212. 四堂崎逆修碑
（旧：四堂崎経塚）…… 111
213. 植木阿蘇神社 …… 112
214. 観音堂 …… 112
215. 糸田の板碑 …… 112
216. 糸田の猿田彦大神 …… 113
217. 糸田水神 …… 113
218. 垣原水神（柿原水神）…… 113
219. 辺場阿弥陀堂 …… 114
220. 金戸水神（火の神）…… 114
221. 古閑菅原神社 …… 114
222. 古閑の墓碑 …… 115
223. 宝珠山 光西寺 …… 115
224. 八丁神社 …… 115
225. 八丁十一面観音堂
（旧：八丁観音堂）…… 116
226. 八丁十一面観音堂の
石造物群 …… 116
227. 八丁の板碑 …… 116
228. 山出六地蔵 …… 117
229. 山出神社（大武宮）…… 117
230. 山出板碑 …… 117
231. 魚住源次兵衛碑 …… 118
232. 園田神社（古神社）…… 118
233. 山出薬師堂 …… 118
234. 芝原厳島神社 …… 119
235. 芝原のキリーク種子板碑 …… 119
236. 芝原のウン種子板碑 …… 119
237. 吉田神社 …… 120

種類別指定文化財一覧表…… 121
指定文化財一覧表…… 121
テーマ別索引…… 122
甲佐町　文化財所在地図…… 129
宮内地区　文化財所在地図…… 131
甲佐地区　文化財所在地図…… 133
竜野地区　文化財所在地図…… 135
乙女地区　文化財所在地図…… 137
白旗地区　文化財所在地図…… 139
主な引用・参考文献…… 141

国指定文化財

※本町の国指定文化財は、２件ともに文化財の類型「記念物」にあたります。文化財保護法第２条第１項第４号では、記念物について次のとおり定義されています。
「貝づか、古墳、都城跡、城跡、旧宅その他の遺跡で我が国にとつて歴史上又は学術上価値の高いもの、庭園、橋梁、峡谷、海浜、山岳その他の名勝地で我が国にとつて芸術上又は観賞上価値の高いもの並びに動物（生息地、繁殖地及び渡来地を含む。）、植物（自生地を含む。）及び地質鉱物（特異な自然の現象の生じている土地を含む。）で我が国にとつて学術上価値の高いもの（以下「記念物」という。）」

国１．天然記念物　麻生原のキンモクセイ（所在　麻生原区）

【指　　定】昭和 9 年（1934）12 月 28 日
【追加指定】昭和 53 年（1978）12 月 27 日

熊本バス麻生原バス停から約 500㍍北東の大字麻生原字居屋敷の観音堂の境内にある推定樹齢 750 年を超える大樹です。

当時の指定に際しては、

「目通幹圍約二. 七五メートル地上約三. 五メートルノ高サニ於テ三支幹ニ分レ枝篠四方ニ擴リ樹勢盛ナリ　金木犀ノ巨樹トシテ有數ノモノナリ」

とあり、その大きさが評価されています。

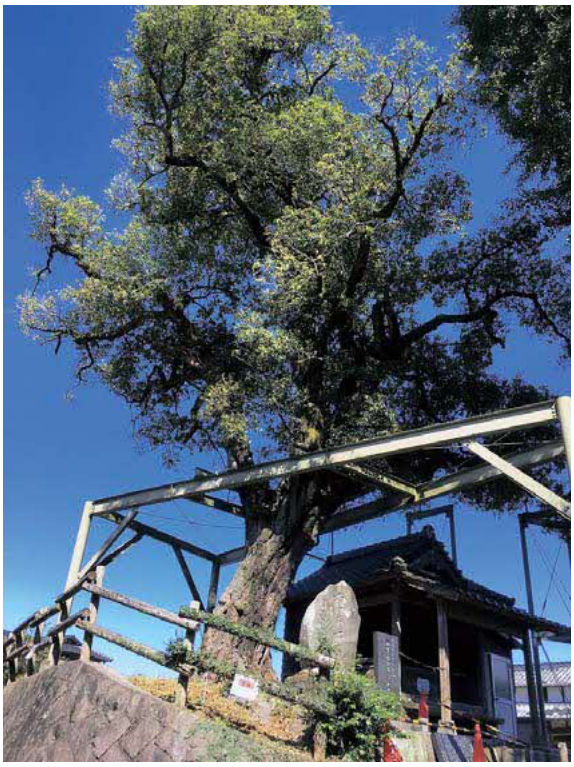
麻生原のキンモクセイは、樹高 18㍍、目通りの幹周り約３㍍、枝張りは東北に９㍍、西方と南方に８㍍、北方は 11㍍に達しており、全国の国指定天然記念物のキンモクセイ６本のうち、麻生原のキンモクセイが指定当時の大きさでは最も巨大なものでした。

しかし、平成以降の数度の台風により何本もの大枝が折れ、樹勢が減退してしまいました。傷んだキンモクセイを守ろうと地元麻生原区民や町関係者の熱意と努力により、徐々に樹勢が回復し、今では毎年９月後半から 10 月の半ばぐらいまで２回にわたり、枝いっぱいに花を咲かせます。

指定名称は「麻生原のキンモクセイ」ですが、樹種は「キンモクセイ」ではなく「ウスギモクセイ」です。黄赤色の花を咲かせるキンモクセイとは異なり、東アジアの温帯に分布するギンモクセイの変種で、淡い薄黄色の花を咲かせる九州南部に多い種です。

開花時期には、毎年町内外からたくさんの見学客でにぎわいます。

なお、敷地内と甲佐町役場には「麻生原のキンモクセイ」と同じ遺伝子を持つクローン木が植えられています。この木は平成 26 年（2014）に甲佐町が森林総合研究所材木育種センター九州育種場（合志市）に育成を依頼し、平成 30 年（2018）４月に約 30㌢に育った苗木を植樹したものです。



麻生原のキンモクセイと観音堂

麻生原のキンモクセイ開花の様子

麻生原のキンモクセイとイチョウ（後方）

国２．史跡　陣ノ内城跡（旧：陣内館跡）（所在　下豊内区）

【指　　定】令和３年（2021）10 月 11 日

陣ノ内城跡は、一級河川緑川と流域の平野を見下ろす標高約 100㍍の平坦地上に立地する肥後国における中世城館の中でも突出した規模を持つ保存状態が良好な城跡です。

現在の陣ノ内城跡は、約 1.9㌶の平坦地の東側と北側を堀と堀の内側に沿った土塁が方形に区画しています。堀は直線的で北東隅で直角に折れ、北隅では鉤型（かぎがた）に折れ、その規模は長さ 400㍍を超え、最大幅は 20㍍、深さは５㍍です。その内側に沿った土塁の規模は、長さ 270㍍を超え、幅は 15 ～ 30㍍、平坦面からの高さは５㍍あります。この土塁は「あげつち」と呼ばれており、堀を掘った時の土砂を積み上げて造られたことが、平成 20 年度から実施された発掘調査によって明らかになりました。

一方、発掘調査の結果、平坦部の南側と西側で埋没していた堀や土塁、虎口（こぐち）なども確認されました。堀は直線的で南西隅で直角に折れて、南側中央でも北側に屈曲しています。この堀は現在見られる東側と北側の堀にはつながっていません。堀の規模は長さ 275㍍、最大幅 8.5㍍、深さ 2.7㍍です。堀の内側には土塁が造られていることも確認され、虎口も確認されました。

こうしたことから、陣ノ内城跡は「堀と堀の内側に沿った土塁が明瞭に残り、その規模は発掘調査で確認されたものを含めると、東西 210㍍以上、南北 190㍍以上の北西と南東に虎口をもつ方形の城跡」であることが明らかになりました。

陣ノ内城跡は江戸時代中期頃から阿蘇大宮司（あそだいぐうじ）の館跡（やかたあと）と伝えられ、中世の輸入陶磁器なども出土していますが、肥後国内で突出した規模を持つこと、大規模な堀と土塁で構成される城の構造は、豊臣系（とよとみけい）大名（だいみょう）の城に共通することから、天正 16 年（1588）に入部（にゅうぶ）した小西行長（こにしゆきなが）が、阿蘇氏の拠点が置かれた場所に築城したと考えます。

また、城跡のある場所は水陸交通の要衝（ようしょう）であり、文献史料と出土遺物などから長期間にわたって継続的に利用されたと考えられます。

さらに、陣ノ内城跡と近接する松尾城（町指定文化財）の構造の違いや近接した選地の状況は、豊臣系大名が新たな領国に入部した際の統治の在り方の一つを示めすことが考えられ、阿蘇氏から豊臣系大名による肥後国支配へと転換する時期の政治的、社会的状況を考える上でも重要な城であると言えます。

陣ノ内城跡に残る堀と土塁

陣ノ内城跡から甲佐町を望む

町指定文化財

※甲佐町文化財保護条例第２条第１項では、本町の文化財について次のとおり定義されています。

「この条例で「文化財」とは、法第２条第１項に掲げる有形文化財、無形文化財、民俗資料及び記念物をいう。」

また、甲佐町文化財保護条例第５条第１項では、指定について次のとおり記載されています。

「教育委員会は、町の区域内に存在する文化財（法及び県条例の規定により指定されたものを除く。）のうち、町にとって重要なものを甲佐町文化財（以下「町指定文化財」という。）として指定することができる。」

町１．陣ノ内城跡（旧：陣内館跡）（所在　下豊内区）

【指定】昭和 55 年（1980）２月 23 日

町指定文化財陣ノ内城跡は、国史跡陣ノ内城跡の指定範囲に隣接する一部の地域が該当します。
文化財の説明については史跡陣ノ内城跡（４ページ）を参照ください。

町２．船津東前横穴群（ふなつひがしまえよこあなぐん）（所在　船津区）

【指定】昭和 55 年（1980）２月 23 日

船津東前横穴（東から）

熊本バス船津バス停から約 100㍍北の崖にあります。

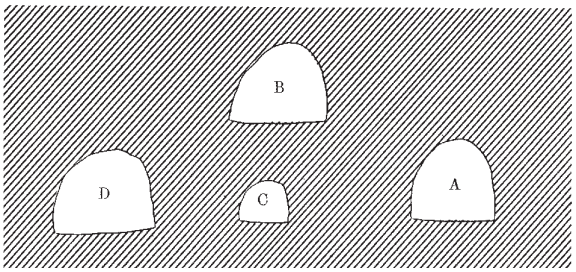
この崖は約９万年前の阿蘇大噴火による火砕流（阿蘇４火砕流）の堆積を緑川が侵食したものであり、現在は緑川の左岸に溶結凝灰岩（ようけつぎょうかいがん）の崖として表出しています。溶結凝灰岩は他の岩石と比べてやわらかく加工しやすいため、古くから石灯籠や墓石、石橋などに広く利用されており、船津東前横穴群がこの場所に造られた理由も同様と考えられます。

船津東前横穴群は正式な調査が実施されていないため詳細は不明ですが、古墳時代後期～終末期の今から 1,400 年～ 1,500 年前の墓群と考えられ、指定当時は町内で最も原形を留める横穴群として評価されました。

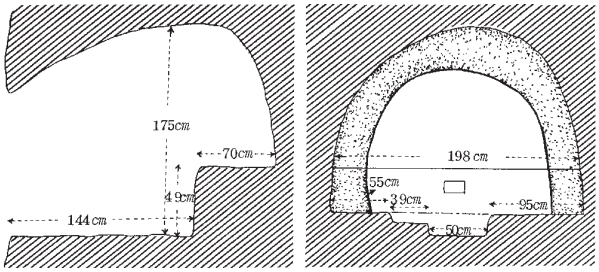
現在は３基の横穴が確認されており、いずれも脆（もろ）い溶結凝灰岩の崖面に掘りこんでいるために崩壊が激しく、掘削当時の状態を留めていません。

この内の１基は開口部から奥壁まで 214㌢、最大高 175㌢、最大幅は 198㌢のドーム状の横穴であり、遺体を直接安置する場所である屍床（ししょう）は「コ」の字に配置されており、奥の屍床が一段高く左右の屍床はほぼ同じ高さにあります。

町内には船津東前横穴群以外にも下豊内横穴群（下豊内区）、中山横穴群（中山区）が確認されています。



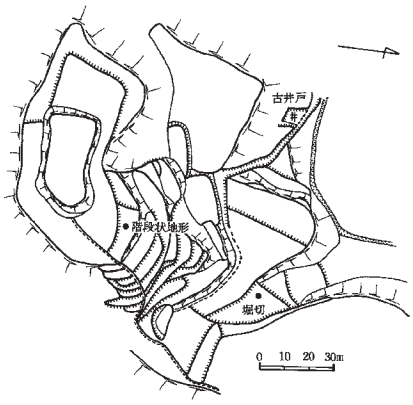
船津東前横穴群配置図（『甲佐町史』より）



船津東前横穴断面図（『甲佐町史』より）

町３．早川城跡（所在　早川区）

【指定】昭和 55 年（1980）２月 23 日



縄張図（『熊本県の中世城跡』より）

西福寺（早川区）南方の水田地帯に突出する「城山」と称される、標高 50㍍の山稜末端部にあります。

建長５年（1253）に渡邊近江守秀村が築城したと伝えられます。渡邊氏は早川氏と名乗り、秀村より代々阿蘇家の家臣として居城し、その後清正に仕えたとされます。

この早川城が所在する早川区は、阿蘇外輪山の南西裾野の益城郡の東北部一帯の中小在地領主の連合体で阿蘇惟豊に属した「衆」の拠点の一つでした。また、早川は矢部の阿蘇大宮司にとって、矢部から尾根伝いに緑川中流域に出るための最短コースであり、軍事交通上の最前線でもあったことから、周辺には「知行」や「城平」など戦国時代の阿蘇氏の活動を示す地名も残っています。

早川城の山頂部分は長軸 35㍍、短軸 16㍍の長方形状の曲輪で主郭となり、その約３㍍下方を曲輪が取り囲んでいます。東側の鞍部には階段状の地形が幾段にも重なり、迫には自然地形を利用した堀切がみられます。また、麓の登城口脇には「城井戸」と称される古井戸も残されています。

早川城（南から）

町４．早川六地蔵（所在　早川区）

【指定】昭和 55 年（1980）２月 23 日

早川公民館の約 200㍍南東の集落の中にあります。

文明 12 年（1480）に早川城城主の早川式部少輔邦秀によって建立されました。

仏教の因果応報思想によると、現世に生をうけたもの（衆生）はこの世で行った所業によって、死後に六道のなかで生死を繰り返す（六道輪廻）と言います。六道は地獄・餓鬼・畜生・阿修羅・人・天の各道をいいます。六地蔵は六道に迷う衆生をそれぞれで救済するとされています。

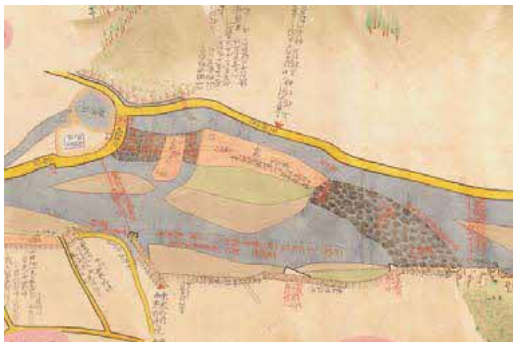
六地蔵信仰は 11 世紀から 13 世紀にかけて広まり、肥後国では 15 世紀と 18 世紀に辻や村境での建立が流行しました。

六地蔵は複数の部材からなり、下から基礎、幢身、中台、龕、笠、宝珠と積み上げられます。しかし、早川六地蔵は土地区画整理に伴い、現在の円福寺跡に移設された際に基礎、中台、龕、宝珠を失い、笠と幢身が残存しています。中でも幢身の大きい点が特徴です。阿蘇溶結凝灰岩の幢身の銘文は風化が著しいですが、正面と右側面に 84 名の法名を数えることができます。このことから、早川六地蔵は早川領主の早川邦秀が主導して地域住民と共に現世の安寧を願い建立した碑文で、文明 12 年の早川地域の村の存在を示す貴重な事例です。

早川六地蔵（西から）

町５．鵜ノ瀬堰（所在　上豊内区）

【指定】昭和 56 年（1981）３月 22 日



緑川図の鵜ノ瀬堰（熊本県立図書館蔵）

甲佐町やな場から約 600㍍東の緑川内にあります。

慶長 13 年（1608）に加藤清正によって造られたとされる緑川の治水施設で、石畳や石積みからなる堰です。この堰は緑川を斜めに横断し、上豊内区から東寒野（ひがしさまの）区まで延長約 660㍍にわたって広がります。現在はその大半がコンクリートで固められています。しかし左岸の東寒野区で平成 16 年（2004）に実施した発掘調査で江戸後期の「緑川図」に描かれている石畳が幅６㍍、延長 120㍍以上にわたって出土しました。石畳は川の流れで堰が壊れないように石の向きを工夫して配置し、直径 10 ～ 20㌢程度の穴が２列に連続して掘られている部分もあり、「橋」や「簗（やな）」といった構造物があったと考えられます。

鵜ノ瀬堰は、急流緑川の水の勢いを弱める「治水」と、灌漑用水として甲佐・竜野・白旗地区の約 600㌶の田畑を潤した「利水」の双方から江戸時代以降の甲佐町の発展に重要な役割を果たしました。

この鵜ノ瀬堰については、緑川の急流によって築造に苦労した加藤清正が、「斜めに浮かぶ鵜の鳥の夢を神のお告げとして築造した」という、昔話も残っています。

鵜ノ瀬堰（西から）

町６．円福寺跡阿弥陀如来坐像（所在　早川区）

【指定】昭和 56 年（1981）３月 22 日

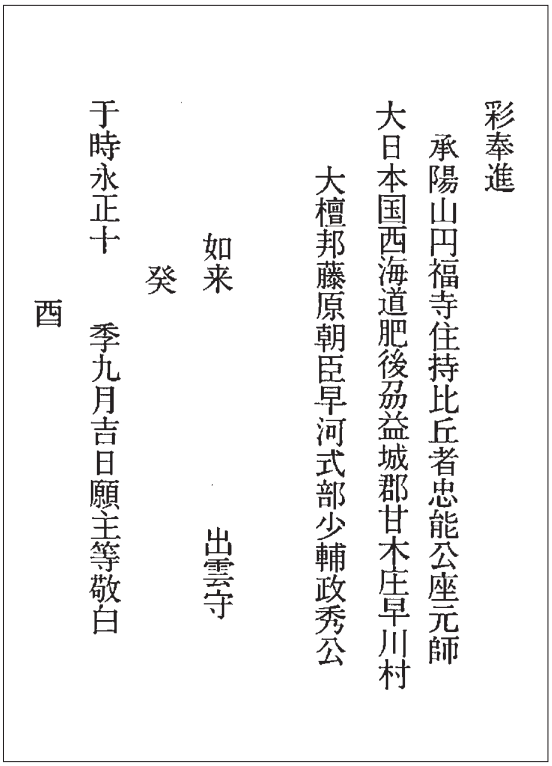
早川公民館の約 200㍍南東の集落の中にあります。

本像は像高 44.6㌢の木造阿弥陀如来坐像で定印を結んでいます。両手首先は後の時代に補われたものです。針葉樹の一木造ですが、樹種は不明です。胸元の衣文を方形に開き衣文線の表現が硬いこと、構造が一木造であることなど室町時代後期の特徴が見られます。また、背面には内刳りがあり、背板があてられています。背板には墨書銘があり、現在はそのほとんどが判読不能となっていますが、制作年の「永正十」の文字が判読できます。

『甲佐町の文化財（第二集）』の解読文を参照すると、永正 10 年（1513）早川城城主の早河式部少輔政秀を願主として制作され、「大日本国西海道肥後州益城郡甘木庄早川村」との記載から、戦国時代の重層的な地域観が読み取れます。

ここに祈願すると「脚気が治る」と言われ、人々の信仰も厚く「カッケさん」と呼ばれています。

円福寺跡阿弥陀如来坐像



彩奉進
承陽山円福寺住持比丘者忠能公座元師
大日本国西海道肥後州益城郡甘木庄早川村
大檀邦藤原朝臣早河式部少輔政秀公
如来　出雲守
癸
于時永正十　季九月吉日願主等敬白
酉

背面墨書
（『甲佐町の文化財第二集』より）

町７．目野薬師如来及び十二神将像（旧：目野薬師堂）（所在　中横田区）

【指定】昭和 56 年（1981）３月 22 日

中横田区の目野薬師堂内にあります。

薬師堂は、明治初年に目野集落の東側の山麓の「堂ノもと」から移設されたと伝えられています。この辺りには数十ヶ所におよぶ寺坊が繁栄したとされ、「目野寺」「六箇寺」、「加要寺」、「坊屋敷」、「寺ノ迫」、「釈迦堂山」等の地名が残っています。

薬師堂内には薬師如来を主尊に両脇に日光菩薩・月光菩薩を配し、さらに眷属である十二神将を配しています。これら 15 駆の仏像全てが指定されています。

薬師如来は樟材の一木造で像高 49.6㌢です。頭部や体部の素朴な表現から室町時代後期（16 世紀）の地方仏師による制作と考えられます。

脇侍は持物がないため、日光菩薩と月光菩薩の区別ができませんが、薬師如来と同様に、樟材の一木造で表現も素朴であることから、主尊と同時代のものと考えられます。

十二神将像は桧材で造られ、薬師三尊よりも顔の表情も素朴さが増していることから、江戸時代に制作されたものと考えられます。

目野薬師如来像及び日光菩薩・月光菩薩像

町８．松尾城跡（所在　上豊内区）

【指定】昭和 58 年（1983）３月 10 日

松尾城跡　主郭状況

陣ノ内城跡の 200㍍南東に谷を挟んで対峙した、標高 93㍍の独立丘にある戦国時代の平山城（ひらやまじろ）です。

永禄（1558-1570）・天正（1573-1592）年間に、阿蘇家の家臣の伊津野秀勝とその子の山城守（やましろのかみ）が在城したと伝えられています。豊内（甲佐）は、阿蘇外輪山の南西裾野に位置する益城郡東北部一帯の中小在地領主の連合体で阿蘇惟豊（これとよ）に属した「衆（もしゅう）」の拠点の一つでした。また、豊内は矢部の阿蘇大宮司（だいぐうじ）にとって、矢部（山都町）や砥用（美里町）から緑川に沿って熊本平野につながる出入口で、南東には肥後二宮の甲佐社、その門前には緑川河川交通の最上流港が所在するなど、軍事交通上の最前線でした。

城跡には南北 200㍍にわたって削平（さくへい）された曲輪群があり、最高所の曲輪が最も広く、長軸 120㍍、短軸 30㍍の地形に沿った不整形の曲輪が主郭と考えられます。この主郭の北西側の稜線には、小規模な腰曲輪群が付属しています。塁線（るいせん）を示すものは曲輪群の切岸（きりぎし）のみで、空堀（からぼり）などは確認できていません。

現地には「本丸」や「搦手（からめて）」、「味噌蔵（みそぐら）」の地名が伝わり、昭和 30 年（1955）頃には南西麓の地名「法念寺（ふねじ）」に老人ホームが建設された際に、多くの五輪塔が出土しています

松尾城跡縄張図（『陣ノ内館跡』より）

町９．木造如来形坐像（所在　上揚区）

【指定】昭和 58 年（1983）３月 10 日

上揚区の個人宅に祀られています。

樟材の一木造で像高 83㌢、後の時代に再彩色され、台座は無くなっています。ずんぐりした体型、衣文の胸のはだけた部分が方形に近いなど、室町時代（15 ～ 16 世紀）の特徴が随所に見られます。

また、九州に豊富な樟材を使用していること、当時の都である京都の表現と異なり鼻が大きく頬下が張るなど地方仏師の素朴な表現が認められることから、肥後もしくは九州で活躍した仏師の作と考えられます。

左手に宝塔を持っています。一般的に宝塔を持つ如来は弥勒とされますが、本像は両手首先と宝塔が別材で、当初から宝塔を持っていたかは不明です。肘先の構造から当初の姿を推定すると、施無畏与願印の釈迦如来、または左手に薬壺を持つ薬師如来、あるいは宝塔を持つ弥勒菩薩（如来）の可能性が考えられます。

北嶋雪山著『国郡一統誌』（寛文９年･1669）に「上揚　甲佐三宮明神　聖観音　薬師」と記載があり、この薬師に相当する尊像かもしれません。像底から 18㌢ほど内刳りが施され、ここに墨書の痕跡が認められるのですが、残念ながら後世に鑿で削られ、判読不能です。

木造如来形坐像

町 10. 緒方家文書（所在　糸田区）

【指定】平成 14 年（2002）4 月 25 日

糸田区の個人宅に所蔵されています。

緒方家文書は、江戸時代に代々にわたって世襲で糸田村庄屋職を継承してきた緒方家に伝来する、熊本藩領の代表的な庄屋文書の一つと評価されています。

これまで熊本県立図書館の目録作成事業によって 1,394 点が把握され、平成 17 年（2005）の熊本大学文学部日本史学研究室古文書学実習の調査によって、約 1,500 点を数える古文書群であることが明らかになっています。

緒方家文書は、宝暦２年（1752）から始まった熊本藩の宝暦の藩政改革よりも約 50 年前の元禄 17 年（1704）である 18 世紀初頭から、単体の家文書と行政文書が伝えられ、同一地域の社会状況を藩政の変化とともに定点観測できる稀有な庄屋文書と評価されています。

また、藩政改革前の世襲惣庄屋及び手永会所役人と村庄屋とのやり取りに用いられた文書原本としては、ほぼ唯一現存するものとも評価されています。

平成 28 年（2016）熊本地震の際には、発災直後の４月 29 日に「熊本被災史料レスキューネットワーク」によって、被災した所有者宅の土蔵・納屋から「緒方家文書」がレスキューされ、熊本大学永青文庫研究センターに一時的に収容されました。これに伴い平成 28 年（2016）から４年間にわたって熊本大学日本史研究室歴史資料学野外実習で調査されています。

緒方家文書

町 11. 簗の樋門（所在　上豊内区）

【指定】平成 14 年（2002）４月 25 日

甲佐町やな場の東端に築造された、径間（アーチの直径）2.4㍍、拱矢（輪石の一段目からアーチの頂上までの高さ）２㍍、幅 8.7㍍の石橋です。

元々は鵜ノ瀬堰（町指定文化財）から水を導き、農業用水路として開いた井手の水量調節用に造った樋門です。江戸時代の惣庄屋、木原寿八郎の記録にも記載されていることから、文化 14 年（1817）～天保３年（1832）に築造されたものと推定されます。

整然と積まれた石材の構築状況から、築造当時の技術の高さが窺われ、アーチ天井部の裏側には「六」や「十二」など文字が刻まれた石も確認できます。

また、アーチ下の河床にも切石が隙間なく並べられています。

アーチ天井部裏側の刻字「六」

アーチ天井部裏側の刻字「十二」

簗の樋門（西から）

町 12. 緑川上流通漕碑（所在　上揚区）

【指定】平成 22 年（2010）1 月 1 日

甲佐神社の境内に建立された幅 58㌢、高さ 175㌢、厚さ 38㌢の石碑です。

以前はこの石碑は横倒しとなっていましたが、指定の際に現在のように起こされました。なお、碑文は永年の風雨により摩耗し、判読しづらくなっています。

碑銘には次の内容が記されています。鵜ノ瀬堰（町指定文化財）から上流の緑川は川底が浅く通船できなかったため、陸路を牛馬でしか往来できませんでした。そこで、緑川の川浚えを行い、上流から中流までを船が通れるようにする通漕が計画されました。上益城郡が桑津留（美里町）から豊内までを担当して、文化 4 年（1807）から同 9 年（1812）にかけて毎年川浚えを行いました。このことを後世に記録として遺すために、甲佐手永の井樋方助役などを務めた、渡辺官（寛）太が文化 11 年（1814）に記しました。

19 世紀の緑川河川交通の進展の努力が現代に伝えられる貴重な事例です。

緑川上流通漕碑（東から）

町 13. 下豊内の逆修碑（旧：供養塔（逆修碑））（所在　下豊内区）

【指定】平成 22 年（2010）1 月 1 日

下豊内の逆修碑（東から）

「史跡陣ノ内城跡」南端麓の下豊内区集落内にあります。

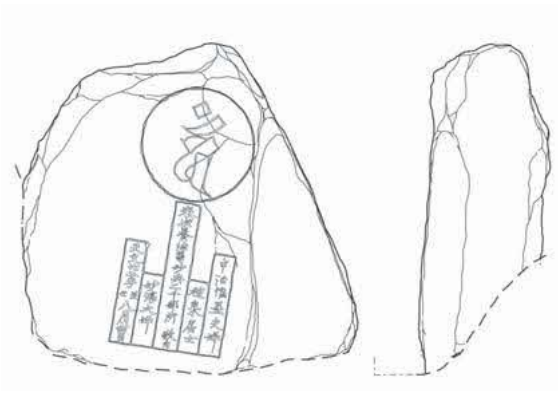
高森（高森町高森）を本領とする阿蘇大宮司の有力一族で、大宮司領の統治を担う「宿老」に補されていたとみられる村山刑部大輔宇治惟益とその妻によって建立された２基の逆修碑です。

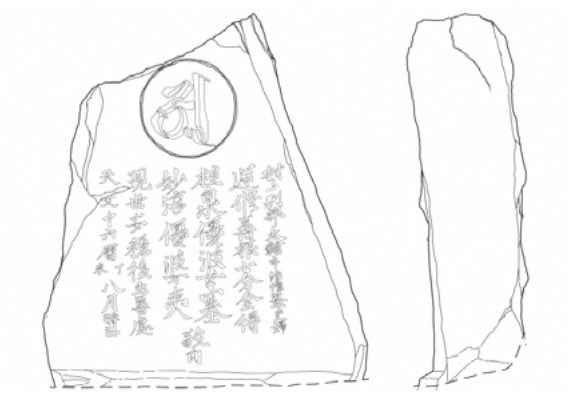
隣り合う対の逆修碑は、西方を正面にして建立されています。

逆修の碑１（正面に向かって左）は、高さ 100㌢・最大幅 97㌢、板状の自然石表面の上方には○に種子「バン」（金剛界大日如来）、下方には「宇治惟益夫婦／桂泉居士／奉供養法華妙典二千部所　敬白／妙淳大姉／天文廿二年癸丑八月吉日」の５行の文字列を方形に囲んで銘文を刻んでいます。

逆修の碑２（正面に向かって右）は、高さ 127㌢・最大幅 109㌢、板状の自然石表面の上方には○に種子「ア」（胎蔵界大日如来）、下方には「村山刑部太輔宇治惟益夫婦／逆修善根七分全得／桂泉優婆塞／敬白／妙淳優婆夷／現世安穏後生善處／天文十六年暦丁未八月時正」の７行の銘文を刻んでいます。

これらの銘文から村山惟益（桂泉）・妙淳夫婦は、天文 16 年（1547）８月に逆修供養を行って逆修碑１を建て、さらに同 22 年（1553）８月に再度夫婦で法華経二千部の誦読を行なって逆修碑２を建立したことが分かります。


下豊内の逆修碑１実測図（『陣ノ内館跡』より）


下豊内の逆修碑２実測図（『陣ノ内館跡』より

町 14. 薬王寺の宝篋印塔（所在　早川区）

【指定】平成 22 年（2010）１月１日

早川公民館から約 100㍍北東の山裾に所在する薬王寺の境内にあります。

文明８年（1476）に阿蘇溶結凝灰岩で造られた幅 50㌢、高さ 140㌢、厚さ 50㌢の石塔です。町内に残る石造物資料のうち制作年が刻まれたものとしては最古の資料です。

宝篋印塔は、内部に宝篋印陀羅尼経を納めて供養する塔で、日本へは平安時代中期に伝わりましたが、室町時代以降に供養塔や墓塔の石塔として盛んに建立されました。

宝篋印塔は複数の部材からなり、下から基壇・基礎・塔身・笠・相輪と積み上げられ、薬王寺のものは基礎と基壇を失い、塔身の上には笠を２基乗せ、その上に相輪が乗っています。最下段の塔身とみられる部分には文字が刻まれていますが、風化が著しく判読できない状況です。

文明 12 年（1480）の早川六地蔵より４年先行する町内最古銘の石造物です。

薬王寺の宝篋印塔（南から）

町 15. 津志田の逆修碑（旧：津志田板碑）（所在　津志田区）

【指定】平成 22 年（2010）1 月 1 日

乙女小学校から約 300㍍南東の県道今吉野甲佐線沿いの墓地背面にある丘の上にあります。

逆修碑は戦乱の絶えない戦国時代の中で、生前に自らの死後の冥福を祈るために建てた碑を指します。逆修の「逆」は予(あらかじ)めの意味をもち、あらかじめ善根(ぜんこん)を「修」めるというもので、死後追善(ついぜん)をしてもらうのに比べ、はるかにその功徳(くどく)がまさるとされています。多くの逆修碑は仏を示す種子を上部中央に描き、その下部に建立者や供養した年月日、その内容や時期を刻んでいます。

津志田の逆修碑は、天文 20 年（1551）7 月 8 日に「兼忠大徳」によって建立された高さ 115㌢、幅 60㌢、厚さ 24㌢の砂岩製の板碑です。板碑の上部に月輪(がちりん)を刻み、その中に「ア（大日如来）」の種子(しゅじ)を薬研彫(やげんぼり)し、その下に「天文二十年／兼忠大徳／七月八日」と刻んでいます。「兼忠大徳」の逆修供養塔と考えられます。また、位号(いごう)が「大徳」とあることから、「兼忠」が徳の高い人物であったことが推測されます。

なお、法名はこれまで「無忠」と判読されていましたが、再調査の結果、「兼忠」または「勇忠」と判読される可能性が生じ、再検討しました。

この逆修碑は西方に向いて建っていましたが、平成 28 年（2016）熊本地震で転倒し、津志田区が復旧しました。周囲には、江戸時代の墓が多数寄せ集められています。

津志田の逆修碑（南から）

町 16. 豪淳（ごうじゅん）の碑（所在　上揚区）

【指定】令和元年（2019）１月１日

緑川右岸の鵜ノ瀬堰（町指定文化財）から約 140㍍北の墓地内にあります。

豪淳の碑は、永禄 11 年（1568）３月吉日に「顕密傳燈沙門大僧都法印豪淳」によって建立された高さ約 220㌢、幅約 70㌢、厚さ約 40㌢の阿蘇溶結凝灰岩製の逆修供養板碑です。板碑の上部に月輪を刻み、その中に「ア（大日如来）」の種子を薬研彫し、その下に「二千三観仮正一體／阿妙不留即覚不生／七部全得逆修善根之所／奉轉読法華経妙典一千部顕密傳燈沙門大僧都法印豪淳／真自尓非作所成／身一念通於石像／永禄十一暦戊辰三月大吉」と刻んでいます。なお、銘文は今回再検討したものを掲載しました。

『肥後国誌』によると、豪淳は甲佐神社の神宮寺を永禄元年（1558）に再興し、阿蘇や熊本などの寺を回っていた大僧都（だいそうず）とされ、加藤清正が熊本城築城の際に地鎮を依頼するほどの名僧であったといわれていますが、熊本城築城時には豪淳は既に没しています。江戸時代に豪淳が肥後を代表する修験の名僧として広く知れ渡っていたために、後年にこうした伝説が作られたものと考えられます。この板碑は伝説化した豪淳が実際に存在していたことを証明する貴重な文化財です。

なお、平成 28 年（2016）熊本地震で折れて倒壊しましたが、上揚区が令和元年（2019）に修復しました。

豪淳の碑（南から）

宮　内　地　区

宮内地区は町東端の山間部に位置します。

宮内地区には甲佐神社が創建され、甲佐明神降臨に関する文化財が点在しています。

また、甲佐神社周辺から緑川の流れが渓流から川幅が広く緩やかに変化することから、石橋や舟運、近代ではトロッコ林道など様々な交通に関する文化財も認められます。

さらに、緑川の河床では、中生代（今から２億５,000 万年前～ 6,550 万年前）の鉱物、ミグマタイトの露頭も確認できます。

1．広瀬旧道眼鏡橋（所在　広瀬区）

県道三本松甲佐線の甲佐町と美里町の境近くの山側にあります。

天保 12 年（1841）に日向往還（ひゅがおうかん）上に架橋されました。橋の石材は、加工しやすい阿蘇溶結凝灰岩です。

川底の地形から両端の石積みが異なり、道路から見ると、右端の石積みが高くなっています。自動車の普及で新たに道（県道三本松甲佐線）が造られたため、現在は使用されていません。

2．トロッコ林道の鉄橋（所在　広瀬区）

県道三本松甲佐線を美里町方面に進むと緑川に架かる鉄橋が見えてきます。

甲佐営林署から内大臣（ないだいじん）の角上（すみあげ）までトロッコ林道が、内大臣を中心とした豊かな森林を活用するため大正３年（1914）から昭和２年（1927）にかけて造成された林道です。大正 13 年（1924）には、緑川上流域（内大臣一帯）で伐採された木材は、熊本営林局森林鉄道（トロッコ道）から貯木場（現在の甲佐町役場）まで運搬されていました。この鉄橋は、木材を積み出すトロッコ林道の一部でしたが、昭和 38 年（1963）に内大臣橋の架橋で昭和 39 年（1964）に廃止となりました。

3．広瀬阿弥陀堂（所在　広瀬区）

本村集落道路脇の山腹にあります。切妻造平入（きりつまづくりひらいり）のお堂は、建物全体がセメント造で間口 140㌢、奥行 120㌢、高さ 131㌢です。本尊は総高 63㌢、像高 45㌢の木造阿弥陀如来立像です。

「だごじゃご（抱かれている子も座る子）も一年間よく頑張った」と堂前で村中がお祝いをする習わしで、例年稲刈りの後に行われていました。

このお堂は、大雨で流されてそのままになっていましたが、約 60 年前に現在のお堂に建て直されたとのことです。

4．谷内阿弥陀如来像（所在　谷内区）

坂谷川沿いの谷内公民館内に木造阿弥陀如来立像が祀られています。厨子は木造で朱･青･緑･白･黒で彩色され、幅 104㌢、奥行 57㌢、高さ 160㌢です。仏像は総高 120㌢、像高 65㌢です。

『国郡一統志』には「坂谷　阿弥陀二所　観音釈迦」と記述があり、現在の広瀬区と谷内区には、阿弥陀仏が二体と観音、釈迦が各一体祀られていたようです。『肥後国誌』には記載がなく、廃寺になったと考えられます。また、谷内公民館横に板碑がありますが、風化して文字が読めません。公民館の川向には破魔呑（はまどん）水源があり、飲料水として使用されています。

5．本坂谷天満宮（所在　本坂谷区）

本坂谷公民館の裏にあります。

切妻造瓦葺妻入の本殿は間口 130㌢、奥行 160㌢で、拝殿は公民館を兼ねています。

御神体の菅原道真は、総高 67㌢、像高 55㌢の木造坐像です。脇には二体の随神（ずいしん）が祀られ、右側は総高 30㌢の木造坐像で、左側は総高 15㌢の木造立像です。

以前は、甲佐岳に登る際にお参りして登っていました。

天満宮の奥の石室には、石造地蔵菩薩坐像が祀られています。

6．金山（所在　本坂谷区）

この鉱山は、広瀬区と甲佐平（こうさびら）（美里町）との境界の山の斜面にあります。

坑口が三つあり、中央の入口は高さ 1.5㍍、幅２㍍です。現在は土砂崩れ等により現地へ行くことは困難です。

昭和初期までの近代に銅を中心とした鉱石の試掘、あるいは採掘が行われた鉱山です。地元の人たちはこれを「金山（かなやま）」と呼んできました。

福岡鉱山監督局管内「鉱区一覧」（昭和 15 年７月１日現在）によると、甲佐町宮内および竜野にて、金・銀・銅が試掘された記載があることから、この「金山」でも金の試掘があった可能性があります。

7．堂ノ原観音堂（所在　堂ノ原区）

谷内公民館から坂を登ると観音堂が見えてきます。

切妻造瓦葺平入のお堂は、間口・奥行共に 287 ㌢です。中には厨子（ずし）が二つあり、右の厨子には、舟形光背（ふながたこうはい）の総高 32㌢、像高 26㌢の木造観音菩薩坐像が、左の厨子には、総高 27㌢、像高 18㌢の木造観音菩薩立像が祀られています。

祭日は 11 月 18 日です。お堂は 20 年ほど前に建て替えられました。

8．ミグマタイト（所在　西原（にしはら）区）

甲佐町広瀬地区緑川左岸（トロッコ林道の鉄橋の約 80㍍上流）で観察できます。ミグマタイトとは変成岩のなかに花崗岩質の物質が入り込んで、不均質な混合物を作っているように見える岩石のことで、ここでは黒っぽい部分に白っぽい部分が入り込んだものや縞状（しまじょう）になったものが見られます。この辺りには、中生代（ちゅうせいだい）（恐竜がいた頃）に地下で高温低圧の変成作用を受けてできた変成岩が分布しており「肥後変成帯」と呼ばれています。

肥後変成帯のミグマタイトは、日本列島とアジア大陸との地質学的な関連を考える上で重要であることが評価され、平成 21 年（2009）に「日本の地質百選」に選ばれています。

9．西原薬師堂（所在　西原区）

県道三本松甲佐線から西原橋を渡り、約 500㍍西にあります。

入母屋造瓦葺妻入（いりもやづくりかわらぶきつまいり）のお堂は、間口 410㌢、奥行 510㌢です。厨子の中の木造薬師如来立像は総高 60㌢、像高 40㌢で、右手は施無畏印（せむいいん）を結び、左手は薬壷を持っています。薬師如来像の両脇には、十二神将像が六体ずつ祀られています。十二神将は総高 25 ～ 34㌢で髪色は黒で、着物は水色、緑、黒、桃色の四色で再彩色されています。

広瀬区と西原区を結ぶ渡し場の近くに建てられたこのお堂は、川を渡って行き来する旅人の安全を祈願する目的で建立されたと考えられています。

10. 西原の宝塔（所在　西原区）

西原薬師堂から約50㍍北西の土手上にあります。

阿蘇溶結凝灰岩製の宝塔で、相輪の上部と笠石の一部は欠損し、塔身は頸部が下になり、その下部は一部欠損しています。

塔身の四方に「ウーン」・「タラーク」・「キリーク」・「アク」の金剛界四仏の種子が刻まれています。このことから、本塔が金剛界大日如来の塔として建立されたことがわかります。

建立された時期は、相輪や塔身の形態から15世紀前半とみられます。

平成28年（2016）熊本地震で倒壊しましたが、地元の方々によって復旧されています。

11. 西原荒神（所在　西原区）

西原区の集落の西側にあります。

入母屋造瓦葺妻入のお堂は、間口300㌢奥行370㌢です。高さ70㌢の台の上にある厨子の中には、髪は角髪で右手には槍を持っている像高55㌢の男性神像が祀られています。棟板には「天四桂尊」とあり、竣工日（昭和16年（1941）４月12日）や大工・棟梁などの氏名が墨書されています。

お堂内の木札から、砥用（美里町）や寒野など様々な地域から参拝者があったことがうかがえます。

12. 小鹿の堤（所在　小鹿区）

小鹿集落から約170㍍東へ下った小川の右岸を約１㌔登ったところにあります。

堤の大きさは高さ11間（約20㍍）、長さ30間（約54㍍）です。嘉永３年（1850）に溜池造築を記念して徳を称えるために建立されたもので、碑文には、水不足に苦しむ小鹿村の人々を救う溜池を造るために庄屋の丸山平左衛門が郡代の村井次郎作と上妻半右衛門と共にこの地を調査し、三年後の嘉永２年（1849）３月に完成。結果、10町余りの田に水が潤い、干ばつの心配がなくなり、その後、新田が増えたことが刻まれています。石碑の裏側には、溜池の余剰水を放流する余水吐が造られています

堤までの道は、落石が多く、道がかなり悪いので車で行くことは困難です。

13. 大王神社（所在　小鹿区）

小鹿集会所の横にあります。

切妻造銅板葺平入の本殿は、間口150㌢、奥行220㌢です。奥から高さ95㌢、幅100㌢の祭壇の上に厨子があります。中には二体の木造坐像が祀られており、右側は像高40㌢の男神、左側は像高33㌢の女神です。拝殿は入母屋造瓦葺です。

『肥後国誌』には「大王社」と記され、明治時代に入江天神と合祀されて天満宮とも呼ばれるようになりました。

祭日は９月15日です。

14. 井戸江の猿田彦大神（所在　井戸江区）

柳瀬地区の道路左脇にあります。

明治18年（1885）の建立で、高さ110㌢、最大幅70㌢、最大厚20㌢、台座は130㌢です。祭日は11月15日です。

猿田彦は『古事記』および『日本書紀』の天孫降臨に登場する天照大御神（あまてらすおおみかみ）に遣わされた邇邇芸命（ににぎのみこと）を道案内した国津神（くにつかみ）とされ、天と地の境に出現しているので、境の神としても信仰されました。江戸時代には導きの神として崇拝され、全国的に猿田彦の信仰が広まりました。町内の猿田彦大神は19世紀に建てられています。

15. 井戸江地蔵堂（所在　井戸江区）

井戸江峡交流拠点施設の脇の道を上ると竹林の前に地蔵堂があります。

三段の石組の上に石室があり、全体の高さは150㌢、幅96㌢です。このうち石室は高さ120㌢、屋根幅120㌢です。石室の中には像高65㌢、幅34㌢の石造地蔵菩薩立像が祀られており、ともに阿蘇溶結凝灰岩製です。光背に向かって右に「安永六天　井戸左衛門」、左に「五月　喜右衛門」と刻まれており、安永６年（1777）５月に建立されたことがわかります。石室は昭和年間の建立です。

16. 安平阿弥陀堂（所在　安平区）

安平集会所の横にあります。

切妻造瓦葺平入のお堂は、間口216㌢、奥行254㌢です。厨子の中には三体の阿弥陀三尊像が祀られています。中央には総高80㌢、像高50㌢の木造阿弥陀如来立像、右側の脇侍（きょうじ）は総高55㌢、像高35㌢、左側の脇侍は総高55㌢、像高37㌢の木造立像です。三体とも顔の部分は金色に彩色されています。

集会所の正面左側には、御門大明神（みかどだいみょうじん）の石碑もあります。

17. 甲佐大明神降坐之碑（所在　安平区）

安平集会所から約60㍍北の畑の隅にあります。

文政２年（1819）建立で、石垣積の台座は高さ175㌢、幅217㌢、奥行211㌢で、その上に高さ210㌢の石碑が建てられています。

この石碑には、「阿蘇大明神である健磐龍命（たけいわたつのみこと）が、第二子の甲佐神を南方の守護神とするために、鏑矢（かぶらや）を放ち矢が落ちた所に社をつくることにした。阿蘇山から甲佐神が降臨された所が安平で、その途中の御宿をとって休まれた所に「石の間臥」（マドロミの石）といわれている高さ２㍍の巨石がある。この巨石が磐座（いわざ）で甲佐神の後霊として祠（小さな社）を建てている。」と記されています。

祭日は１月９日です。

18. 石の間臥（旧：石ノ間伏）（所在　安平区）

上揚区から御船町の水越（みずこし）へ行く林道山上幹線（さんじょうかんせん）の途中にあるヒノキ林に中にある自然石です。道から３㍍下にある岩は高さ２㍍、幅1.6㍍、周囲７㍍です。

言い伝えでは、阿蘇大明神である健磐龍命は第二子の甲佐神を南方の守護神とするために鏑矢を放ち矢が落ちた所に社をつくるよう命じます。十三人の供を連れて甲佐神が阿蘇からやってきますと、山の頂上に大きな岩があり、一行がこの地に着いた時に疲れて寄りかかって眠ってしまったとのことです。そこでこの岩を「石の間臥」（別名「マドロミの石」）と呼ぶことになったそうです。

19. 御手洗橋（みたらいばし）（所在　安平区）

御手洗神社の約 50㍍東側の安平川に架かる石橋です。

上揚区や安平区と小鹿区を結ぶ重要な路線上に嘉永５年（1852）に架橋され、矢部（山都町）地方と結んでいました。

立地が火砕流台地の地形であるため、川底からの基礎部分とアーチの上の壁石部分を阿蘇溶結凝灰岩の切石で高く積み上げているのが特徴です。現在は壁石部分が嵩上げされ、路面幅も拡幅されています。

20. 御手洗神社（所在　安平区）

甲佐神社脇から安平区へ約１㌔の道沿いにあります。

切妻造瓦葺平入の本殿は、間口 260㌢、奥行 205㌢です。厨子には甲佐神社の守護札が六枚祀ってあります。以前は、男神と女神の二体の御神体がありましたが、盗難にあったとのことです。言い伝えでは、甲佐明神が近くの安平川で手を洗われたとされています。

敷地内の隅には、安平の猿田彦大神が建てられており、神社入口には、幹周りが約４㍍の御神木があります。付近からは布目瓦（ぬのめがわら）が採取されています。

『国郡一統志』には「御手洗社」、『肥後国誌』では「御手洗大明神社」と記されています。

21. 安平の猿田彦大神（所在　安平区）

御手洗神社の境内にあります。

天保 13 年（1842）の建立で、高さ 145㌢、最大幅 35㌢、最大厚 15㌢、台座は 50㌢です。

『新甲佐町史』によると、「当初から御手洗神社の境内に祀られていた。」とあります。

祭日は 12 月 15 日です。

22. 甲佐神社（所在　上揚区）

甲佐町やな場から1.5キロ西の県道三本松甲佐線沿いにあります。

主祭神は健磐龍命（阿蘇大明神）の御子、八井耳玉命（甲佐明神）で、健磐龍命、蒲池比咩命、神倭磐余彦命、媛蹈鞴五十鈴媛命を配祀しています。なお、八井耳玉命（甲佐明神）は、阿蘇神社の主祭神健磐龍命の子で速瓶玉命の異母弟であると神系図では位置づけられています。

元は鏑﨑宮と称したが、「三韓」出兵の時、天から金の甲を授けられ、神功皇后を助けたので、神功皇后凱旋ののち勅号により甲佐宮と改めたとされています（正平16年（1361）８月付「甲佐社牒写」（『大日本古文書 阿蘇文書之二』阿蘇文書写二十九））。

甲佐神社が古文書で最古に確認できるのは平安時代の保延３年（1137）で、健軍社（熊本市）・郡浦社（宇城市）と共に阿蘇社の末社と位置付けられています（康治２年（1143）２月付「阿蘇大宮司宇治惟宣解」『大日本古文書 阿蘇文書之一』２号）。

また、12世紀後半～14世紀中頃には「当国第二宮霊験殊勝社壇也」（承安３年（1173）１月18日付「木原顕実寄進状」（『大日本古文書 阿蘇文書之一』３号）や「我神者忝阿蘇大明神御嫡子、南郡管領之鎮守也」（正平16年（1361）８月付「甲佐社牒写」（『大日本古文書 阿蘇文書之二』阿蘇文書写二十九））等の記載がみられるように、益城郡（緑川流域）の信仰を一身に集める鎮守である、と主張するようになります。

『新甲佐町史』によると、建長２年（1250）の甲佐社領は八代海沿いの港津とそれらと甲佐社をつなぐ交通路上の要衝などを含めて307町１反４丈の広大なものでした。

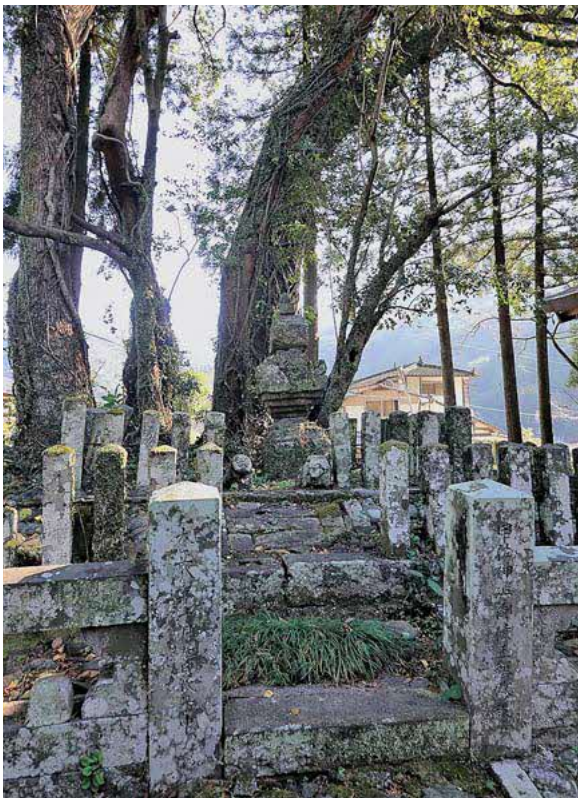
こうしたことからも、甲佐社は益城郡の鎮守として崇敬を集める存在であり、13世紀末の鎌倉時代には肥後国の御家人竹崎季長が甲佐社に蒙古襲来絵詞（令和３年国宝に指定）を奉納したことにもつながっています。

明治６年（1873）に郷社に列格しました。

明治27年（1894）には拝殿が焼失し、同31年（1898）に現拝殿が再建されています。

境内には二宮（阿蘇十二宮）、三宮（八鉾大神）、四宮（雨ノ宮）の三社と御陵があります。御陵には文明11年（1479）に阿蘇大宮司氏の有力一族であった村山刑部大輔宇治宿祢惟廣によって建立された宝篋印塔であることが『肥後国誌』や『索隠甲廟記』の記述から確認できます。この御陵は地元では「みささぎさん」と呼ばれています。

境内には水盤（文政10年（1827））や龍神を象った灯籠（文政９年（1826））、力士を象った灯籠（文政12年（1829））、布哇国出稼人によって奉納された灯籠（明治33年（1900））があり、拝殿には蒙古襲来絵詞大絵馬（平成18年（2006））などが奉納・寄進されています。



御陵

左上：龍神灯篭　右上：力士灯篭
下：布哇国灯篭

甲佐神社

23. 上揚弁財天（所在　上揚区）

甲佐神社の向かい側緑川右岸堤防下の水刎（みずはね）の根元にあります。

石室は間口 64㌢、奥行 50㌢、高さ 99㌢で、中には舟に乗り琵琶を持った弁財天が祀られています。弁財天は木造坐像で、八本の腕には剣、槍、弓等の武器や宝物を持っています。

弁財天は水難事故を防いでくれると言います。大正５年（1916）に再築されていますが、その後、御神体が盗難の被害に遭い、住民によって新たな木製の弁財天が祀られています。

祭日は８月 15 日です。なお、平時は施錠されており中の弁財天を見ることはできません。

24. 上揚の板碑（所在　上揚区）

甲佐神社から 500㍍上流の県道三本松甲佐線沿いの個人宅にあります。

安山岩製の高さ 115㌢、最大幅 50㌢、最大厚 24㌢で、板碑の上部に月輪（がちりん）を刻み、その中に阿弥陀如来の種子「キリーク」を刻んでいます。中央より下部に十六行の縦線と三段の横線が引かれ、平均横 2.5㌢、縦 10㌢の四五個のマス目が作られています。本来はこのマス目中に講衆（こうしゅ）の戒名（かいみょう）が刻まれますが、本板碑には記名はみられず、墨書の可能性もありますが、その痕跡はみられません。

本板碑は講衆により建立されたもので、16 世紀半ばのものと考えられます。

25. 上揚仁王堂（所在　上揚区）

上揚区の北側の山裾にあります。

切妻造瓦葺平入のお堂は、間口・奥行ともに 400㌢、向拝は半間（90㌢）です。中には、三体の仏像が祀られています。正面の仏像は総高 180㌢、像高 135㌢の火焔光背（かえんこうはい）を負い、右手に 60㌢の剣を握った木造不動明王立像です。右の薬師如来像は像高 70㌢で、左の仏像は総高 85㌢、像高 55㌢で木製坐像です。その他に炭化した仏像が二体、左隅と不動明王像の右横にあります。建物の右手には石造りの手水（ちょうず）があります。

新甲佐町史によると「明治元年（1868）から始まった神仏分離令により、甲佐神社の境内にあった神宮寺（じんぐうじ）は廃寺になり、不動堂は境内の外に移された」とあります。

仁王堂の不動明王像は、不動堂にあったと推測されます。

26. 日枝神社（山の神）（所在　上揚区）

上揚区の北側の山裾に仁王堂と並んで建っています。

切妻造瓦葺平入の本殿は、隣の上揚仁王堂と同じ造りです。厨子には、扉が三つあり、それぞれの扉の中には二体ずつ（右が男神、左が女神）計六体の木造男女神像が祀られています。

比叡山の麓に鎮座する日吉大社は、日吉･日枝･山王神社の総本宮です。日枝神社は日吉神社で、甲佐神社の神宮寺の妙智院（みょうちいん）の護法神であったと考えられます。

祭日は 12 月初申です。

27. 上揚の猿田彦大神（所在　上揚区）

日枝神社入口左の個人宅にあります。

高さ 97㌢、最大幅 37㌢、最大厚 10㌢、台座は二段で上段 23㌢、下段 7㌢で、背面に「明治十二年（1879）　四月吉日」と刻まれています。

28. 上揚観音堂（旧：上揚阿弥陀堂）（所在　上揚区）

日枝神社・仁王堂より約 50㍍南の集落の中に建っています。

切妻造瓦葺平入のお堂は、間口 200㌢、奥行 180㌢です。中の厨子は幅 40㌢、高さ 58㌢で、その中には総高 55㌢、像高 45㌢の木造観音菩薩坐像が祀られています。この観音菩薩像の由緒等は不明です。

明治元年（1868）神仏分離令により、上揚仁王堂の不動明王像と同様に神宮寺から移されたものである可能性があります。お堂の外には、石造の手水（文化（1804 ～ 1818）の文字が刻まれています）もあります。

29. 神宮寺住職の板碑（所在　上揚区）

上揚の豪淳の碑の近くに、年代の異なる板碑が三基あります。これは甲佐神社境内にあった神宮寺の住職の墓碑または供養塔です。

建立年は東から享保 11 年（1726）、文政 13 年（1830）、宝永 6 年（1709）です。高さは東から 45㌢、100㌢、125㌢です。板碑には「大阿闍梨」「権律師」「法印権大僧都」などの僧侶の地位を示す文字が刻まれています。

『肥後国誌』には「神宮寺例光山妙智院　台宗叡山正覚院末寺」と記載されており、妙智院には本堂・冠木門・萱葺きの庫裏などがあり、甲佐宮の鳥居の右手に建つ神宮寺でした。この神宮寺は、明治元年（1868）の神仏分離令により廃寺となっています。

甲　佐　地　区

甲佐地区は町南端の平野部に位置します。

中世には、陣ノ内城跡や松尾城跡とその城下町、近世には細川藩政期の甲佐手永における唯一の在町である岩下が発展するなど、現在まで甲佐町の政治・経済の中心となっています。また、鵜ノ瀬堰や築場、清正公山等、加藤清正に関するものや、甲佐井手や新井手といった用水も認められます。

さらに近代になると、西日本で最初の、かつ最大の民営製糸場緑川製糸場も設立されました。

30. 尾北の猿田彦大神（所在　東寒野（ひがしさまの）区）

尾北地区を過ぎた町道交差点右脇にあります。

建立年は不明で、高さ 100㌢、最大幅 70㌢、最大厚 40㌢、台座は三段で上段 33㌢、中段 20㌢、下段 90㌢です。上段の台座正面に「明治 / 十三年（1880）/ 辰年 / 五月 / 尾北組」と刻まれています。

祭日は８月 15 日です。

31. 尾北眼鏡橋（所在　東寒野区）

東寒野区の永明寺（ようみょうじ）から約 450㍍東の緑川左岸の尾北川合流地点付近に架かる石橋です。

文政 13 年～天保 14 年（1830 ～ 1843）に架橋され、東・西寒野区と名越谷（なごしだに）（美里町）を結ぶ主要幹線を担ってきました。アーチの美しい曲線と基礎の根石が特徴的です。

現在の橋長は 11.5㍍、橋幅は 2.7㍍です。橋の材質は、加工しやすい阿蘇溶結凝灰岩です。

32. 白象山　永明寺（ようみょうじ）（旧：永明寺）（所在　東寒野区）

宗派は、浄土真宗本願寺派で、本尊は阿弥陀如来です。

入母屋造瓦葺平入の本堂には御拝口があります。境内には、二層の山門や入母屋造瓦葺の鐘楼があります。

『甲佐町史』によると、明暦３年（1657）、川尻町（熊本市南区）明善寺の法弟である祐信という僧が、東寒野村において草庵を結び、心睦庵（『新甲佐町史』では心暁庵）と号して代々世襲をしていました。明治 12 年（1879）に『国郡一統志』や『肥後国誌』に記述がある「永明寺迹」の寺号公称を許された、とあります。

33. 永明寺阿弥陀堂（所在　東寒野区）

東寒野区の永明寺境内にあります。切妻造瓦葺平入のお堂には、像高 58㌢、幅 38㌢、台座 25㌢の木造阿弥陀如来坐像が祀られています。

『国郡一統志』には「東寒野　釈迦　正福寺永明寺　普賢　文殊　地蔵」と記されています。『肥後国誌』には「甲佐郷寒野村ト云小木田村永明寺村等小村アリ永明寺迹　不分明」とあります。この阿弥陀仏を指す記述はなく、その由緒等は不明です。以前は東寒野区の人が祀っていましたが、現在は永明寺で護持されています。

34. 東寒野地蔵尊（所在　東寒野区）

永明寺より 100㍍東の緑川左岸側の鵜ノ瀬堰（町指定文化財）を見下ろす道路沿いにあります。

白いコンクリート造の石室の中には、二体の仏像が祀られています。右は総高 110㌢、像高 75㌢の石造観音菩薩立像で舟形光背を負い、両手に蓮の花を持ち、左は総高 53㌢、像高 35㌢の石造地蔵菩薩坐像です。

地蔵尊は享和２年（1802）に鵜ノ瀬堰の大修理が行われた際に造立された像です。供献の石製花立てには「文久二年（1862）　奉納　村長　忠左右衛門」と刻まれています。文久２年（1862）は享和２年（1802）から 60 年目にあたります。

35. 白石板碑（所在　東寒野区）

東寒野公民館の裏手にあります。

板碑は高さ 104㌢、最大幅 52㌢です。

板碑の上部に月輪が刻まれ、その中には大日如来を表す種子が刻まれ、下部に「永禄二年（1559）三月十二日」と刻まれています。現在は摩耗のため文字は判読出来なくなっていますが、逆修供養板碑と考えられます。

目の前には、松ノ尾川が流れており、「お蝶滝」を見ることができます。

36. 堂迫眼鏡橋（所在　東寒野区）

東寒野公民館近くの松ノ尾川を上流へ向かい、三つ目の橋が堂迫眼鏡橋です。

上流側はコンクリートで道が拡幅されており、下流側から石造りのアーチを確認できます。架橋時期は不明です。

現在の橋長は4.6㍍、橋幅の中央部分が5.6㍍、アーチの大きさは径間4.35㍍、拱矢（きょうし）（川面からアーチ部までの高さ）1.95㍍です。橋の材質は、加工しやすい阿蘇溶結凝灰岩です。

37. 大祇（だいぎ）神社（所在　西寒野（にしさまの）区）

西寒野区の宮園地区にあります。

建立時期等は分かりませんが、『国郡一統志』には「大祇明神」、『肥後国誌』には「大神宮（大祇宮）」と記されています。

祭神は景行天皇で、お祭りは秋分の日です。神事は甲佐神社より神主が来て執り行われていますが、祭りの運営は実行委員会と区内５組による持ち廻りで、しめ縄作りや料理が振る舞われます。現在も子ども相撲や出店、同区有志による「肥後にわか」や「チョンかけコマ」も披露され、賑やかに行われています。

38. 大祇眼鏡橋（所在　西寒野区）

大祇神社の鳥居前を流れる宮園川に架かる小さな石橋です。

橋の長さは4.5㍍、橋の幅（路面幅）250㌢、アーチ部から路面までの高さ90㌢、川面からアーチ部までの高さ（拱矢）100㌢です。路面は、上流側へ100㌢程拡張されています。橋の材質は、やや赤みを帯びた阿蘇溶結凝灰岩です。

現在も生活道路として利用されており、上流側はコンクリートで道が拡幅されているため、下流側から石造りのアーチを確認できます。

39. 宮園地蔵尊（所在　西寒野区）

西寒野区の宮園地区で、大祇神社より約60㍍西の四差路に石室があります。石室は間口116㌢、奥行40㌢、高さ110㌢です。中には二体の石造地蔵菩薩が祀られ、右の地蔵は、像高38㌢、幅27㌢で、「慶応元歳（1865）　十一月　石工　壽助」と彫られた台石に乗っています。左の地蔵は像高36㌢、幅28㌢、両手で宝珠を持っています。

なお、西寒野区は、五地区（宮園・千才丸（せんざいまる）・小川島（おごじま）・松ノ尾・西）に分かれており、各地区の路傍に地蔵尊があり、地域住民を見守っています。

40. 千才丸の猿田彦大神（所在　西寒野区）

西寒野公民館手前を緑川側に入った個人宅にあります。

建立年は不明で、高さ130㌢、最大幅70㌢、最大厚40㌢、台座は10㌢です。

『新甲佐町史』によると、明治時代に作成された神社の基本台帳「肥後国上益城郡神社明細帳」では、大祇神社へ合併された猿田彦の板碑（旧所在地字名：千歳丸）は元の集落に残されたとあります。現地での信仰は今も続いています。

祭日は３月15日に近い日曜日です。

41. 西の観音菩薩（所在　西寒野区）

県道宮原甲佐線の熊本バス西寒野バス停より約150㍍西にあります。

西寒野区は、五地区（西、松ノ尾、小川島、千才丸、宮園）に分かれており、その中の「西地区」にあります。

切妻造鋼板葺コンクリートのお堂は、間口150㌢、奥行105㌢です。中には、縦65㌢、幅27～31㌢の板状の石の表面に、像高33㌢の十一面観音菩薩立像が陽刻されています。

42. 西の猿田彦大神（所在　西寒野区）

西の観音菩薩の左脇にあります。

建立年は不明で、高さ 130㌢、最大幅 45㌢、最大厚 40㌢、台座は二段で上段 25㌢、下段 40㌢です。

祭日は３月 15 日です。

43. 小川島六地蔵（所在　西寒野区）

小川島地区へ入り、約 200㍍西の道路左脇にあります。

六地蔵は高さ 243㌢、幅 44㌢、傘石の幅は 145㌢、厚さは 17㌢で、15 世紀頃の建立と考えられます。

以前は水田の中にありましたが、耕地整理の際に現在の地に移されています。

44. 小川島の猿田彦大神（所在　西寒野区）

小川島六地蔵の右隣にあります。

建立年は不明で、高さ 120㌢、最大幅 73㌢、最大厚 30㌢、台座は二段で上段 7㌢、下段 65㌢です。

45. 鵜ノ瀬堰観音菩薩（所在　上豊内区）

やな場東側の簗（やな）の樋門（町指定文化財）上にあります。

間口95㌢、奥行115㌢、高さ150㌢のお堂には三体の石像が祀られています。中央の仏像は高さ65㌢、幅30㌢の馬頭観音立像です。この仏像には「三界萬霊為結縁　南無観世音菩薩」と彫られています。享和２年（1802）に鵜ノ瀬堰（町指定文化財）の安泰と五穀豊穣を祈願して造られました。左右の石像は名称由来ともに不明です。

横には上豊内鵜ノ瀬堰改修記念碑と猿田彦大神が立っています。

46. 上豊内区の猿田彦大神（所在 上豊内区）

鵜ノ瀬堰観音菩薩の左脇にあります。
明治13年（1880）庚辰４月再建で、高さ130㌢、最大幅47㌢、最大厚64㌢、台座は三段で上段33㌢、中段21㌢、下段34㌢です。

47. やな場（旧：上豊内やな）（所在　上豊内区）

県道三本松甲佐線を宮内方面へ約１㌔東に、藁葺き屋根の東屋があります。

簗とは、竹で編んだ簀（す）に落ちてくる鮎を捕る仕組みです。

この簗は、加藤清正が川狩りを楽しむために設けた茶屋が起源で、その後、熊本藩主細川忠利が整備を進め、代々の藩主が来遊したとされています。

また、「やな場」の脇には昭和16年（1941）に「肥後の甲佐は鮎なら名所　御簗（おやな）落鮎見においで」と甲佐歌謡（小唄）をつくった詩人、作詞家の野口雨情（のぐちうじょう）の歌碑もあります。

48. 緑川製糸場跡記念碑（所在　上豊内区）

やな場の駐車場に「糸姫様」と呼ばれる緑川製紙糸場跡記念碑が建っています。

緑川製糸場は、明治８年（1875）６月に長野濬平（ながのしゅんぺい）と嘉悦氏房（かえつうじふさ）によって豊内村に設立された、西日本で最初の、かつ最大の製糸場でした。

設立は官営富岡製糸場の３年後で、明治15年（1882）まで操業しました。多くの旧士族の娘が働き、その中には嘉悦孝子（日本初の女子商業教育校創設者）や徳富音羽（徳富蘇峰、蘆花の姉）もいました。彼女たちは技術を各地に広め、県内の養蚕製糸業に寄与しました。

この石碑の文字は徳富蘇峰（とくとみそほう）の書です。

49. 四方仏（旧：上豊内四方仏）（所在　上豊内区）

上豊内の共同墓地に「四方仏」と呼ばれる二基の石塔があります。

四方仏は高さ97㌢、幅50㌢で、完全な形では無く、三つ石造物の部材を組み合わせたものです。最上段には八角柱の四面に仏像が彫られ、中段は五輪塔の水輪（すいりん）です。

『国郡一統志』には、「上豊内　藤崎八幡　西宮　安養寺阿弥陀　法念寺阿弥陀」、『肥後国誌』には豊内村に「安養寺迹　法念寺迹　共ニ宗旨年代等不分明」とあります。中世にはこの辺りは寺院が立ち並ぶ場所であり、村の人の話では、昔、安養寺があったとされる畑で発見され、現在地に移されたそうです。

この場所から約50㍍離れた場所に「安養寺（あんにょじ）の井戸」もあります。

50. 玉造神社（旧：西宮八幡宮）（所在　上豊内区）

やな場から約200㍍北西の上豊内区集落内にあります。本殿は神明造（しんめいづくり）平入で、入母屋造瓦葺平入の拝殿には花の絵柄のある格子天井があります。拝殿前には阿吽の像が一体あり、祭神は八幡大神です。

本殿内には三つの厨子が並び、中央の厨子は最大幅140㌢、奥行48.5㌢、高さ160㌢で、中には木造男神坐像が、左右の厨子には男女神像が祀られています。『国郡一統志』には「藤崎八幡」「西宮」、『肥後国誌』には「玉殿神社」と記され、上豊内の人々は「八幡様」と呼んでいます。なお、玉造神社の名前の由来については、不明です。

51. 上豊内阿弥陀堂（所在　上豊内区）

上豊内区法念寺地区の山裾にあります。

切妻瓦葺平入のお堂には、台座が25㌢、像高70㌢で、筋光の光背を負う阿弥陀如来立像が祀られています。

法念寺（ふねじ）は小西行長によって焼かれたと伝えられ、現在の阿弥陀堂は昭和59年（1984）７月に新築されました。

国郡一統志に「法念寺　阿弥陀　安養寺　阿弥陀」とあり、この阿弥陀如来像の詳細は不明ですが、古い仏像なので法念寺の本尊である可能性があります。

祭日は12月８日です。阿弥陀堂への石段横に板碑が一基あります。

52. 法念寺（ふねじ）跡の板碑（所在　上豊内区）

上豊内阿弥陀堂近くにあります。

この辺りは中世に法念寺があったとされ、周辺には五輪塔の残欠があります。

板碑は高さ62㌢、最大幅33㌢、厚さ30㌢の安山岩製です。上部に月輪があり、その中に禅宗で悟りの境地を示す「咄」の文字が薬研彫されています。銘文から天正５年（1577）の建立とわかります。月輪に本尊ではなく、悟りの境地を示す文字を刻んでいることから、禅宗で建立された板碑の衰退時期のものと考えられます。

53. 稲荷大明神（所在　下豊内区）

史跡陣ノ内城跡の北西隅の鉤型（かぎがた）に屈曲した堀底にあります。

石室は高さ100㌢、幅と奥行き135㌢のコンクリート製の台座の上に設置され、高さ113㌢、幅と奥行き36㌢、屋根幅は72㌢です。中には、正一位稲荷大明神と記載された木札が祀られています。石室周辺には手水鉢（ちょうずばち）や石灯籠の部材なども確認できます。

この稲荷大明神は、安政４年（1857）に岩下町の豪商、天野屋の渡邉佐左衛門と市左衛門が商売繁盛を願って建立したものです。かつては、商人が定期的に訪れていましたが、昭和47年（1972）７月の豪雨による土砂災害で、稲荷大明神への参道は消失しました。

なお、建立主の天野屋が嘉永６年（1853）に建てた商売繁盛と子孫繁栄を願った石塔（旧：供養塔）が清正公山（せいしょこさん）の中腹にあります。

54. 下豊内薬師堂（所在　下豊内区）

下豊内区の集落から陣ノ内城へ登る遊歩道の途中にあります。

切妻造瓦葺妻入のお堂は、間口 2.6㍍、奥行 1.6㍍で、拝殿の間口は 4 ㍍、奥行 3.7㍍です。お堂内の中央には総高 60㌢、像高 22㌢の薬師如来坐像、その右には総高 55㌢、像高 48㌢の月光菩薩立像が祀られています。表面は共に金彩色です。両脇には薬師如来の守護神である十二神将が六体ずつ祀られています。薬師如来像、月光菩薩像、十二神将像共に漆喰造です。

下豊内区で近年、明治以降に記された文書が発見され、「慶長十年（1605）創立」とされていました。

祭日は 12 月 8 日（近年は 8 日前後の日曜日）で「薬師さん祭り」として受け継がれています。

55. 下豊内釈迦堂（所在　下豊内区）

下豊内薬師堂の約 100㍍南西の麓にあります。切妻造瓦葺平入のお堂は間口 230㌢、奥行 250㌢で、金彩色の木造釈迦如来坐像が祀られています。

『国郡一統志』には下豊内の寺院について「下豊内　西應寺阿弥陀　大應寺釈迦薬師　教栄寺真宗」と記載されています。『肥後国誌』には「教栄寺　夷堂」のみが記され、西應寺阿弥陀　大應寺釈迦薬師は、廃寺になっているらしく記載されていませんが、この釈迦如来座像は下豊内の大應寺の本尊である可能性があります。

56. 下豊内阿弥陀堂（所在　下豊内区）

史跡陣ノ内城跡への登り道の下にあります。

切妻造瓦葺妻入のお堂は、間口 190㌢、奥行 220㌢です。本尊は、総高 95㌢、像高 58㌢の木造阿弥陀如来立像です。

阿弥陀堂は、慶長年間に移設されたとされ、『国郡一統志』には、「下豊内　西應寺阿弥陀　大應寺釈迦薬師」と記されています。しかし、『肥後国誌』には記載がないので、西應寺阿弥陀・大應寺釈迦薬師は、廃寺になっていたようですが、この阿弥陀如来坐像は下豊内の西應寺の本尊である可能性があります。

57. 下豊内横穴群（所在　下豊内区）

下豊内阿弥陀堂横の新井手に沿って多くの横穴が見られます。

この横穴は、古墳時代後期～終末期の 1,400 年～ 1,500 年前に造られた墓です。丘陵の斜面に横穴を掘り、その中に遺骸を埋葬するものです。

本横穴群は詳細な調査が実施されていませんが、脆い阿蘇溶結凝灰岩の崖面に掘りこんでいるために崩壊が激しく、完全な元の状態を残していません。内部はドーム状で屍床（遺体を直接安置する場所）が設けられています。本横穴群が造られた崖斜面には太平洋戦争時に掘られた防空壕もあり、中には横穴墓を拡大して防空壕に利用したものもあります。

58. 下豊内新井手隧道（所在　下豊内区）

陣ノ内城跡に沿って流れる新井手（上井手用水）は、上豊内区を起点に下豊内区、中横田区、下横田区を通り田圃を潤しています。

この用水路は、全長 2.7キロを超える大規模な水路で、途中には、高さ 1.5メートル、幅 1 メートルの 2 本の隧道があり、その延長は 200メートルに及びます。

江戸時代、下横田区や中横田区では日照りが続くと、水争いが起きるほど農民を苦しめました。惣庄屋の木原寿八郎は、この状況を見かねて鵜ノ瀬堰（町指定文化財）から分水することを計画し、文政 7 年（1824）に水路を完成させました。特に下豊内区内は難工事で、3 年以上の期間を要しました。

59. とくどうさん（所在　下豊内区）

県道三本松甲佐線沿いの下豊内区の民家に「とくどうさん」と呼ばれる三基の石碑があります。右が六地蔵石幢、中央に観音菩薩立像、左に板碑が据えられています。

六地蔵石幢は高さ 83センチ、最大幅 43センチ、厚さ 50センチで、15 世紀後半の文明年間の建立と考えられます。中央の観音菩薩立像は 18 世紀後半、薬師如来の種子が刻まれた板碑は 16 世紀半ば頃の建立と考えられます。

「とくどうさん」は「ろくじぞうさん」が訛ったものです。

60. 甲南橋地蔵（旧：岩下地蔵尊）（所在　岩下１区）

甲南橋の袂にあります。

切妻造トタン葺妻入の木造の祠は、間口 90㌢、奥行 98㌢です。中には総高 65㌢、像高 39㌢、両手に宝珠を持つ石造地蔵菩薩坐像が祀られています。水の地蔵で、岩下２区の岩下地蔵堂にある火伏せ地蔵と対になっています。「あゆまつり」の起源となった地蔵で、昔は作り物もあり、砥用や堅志田（かたしだ）（美里町）からも見物客が来ていました。以前は、現在地より上流にありましたが、甲南橋の架け替え時に現在地へ移されました。

平成 28 年（2016）熊本地震により被災しましたが、地元の方々によって修復されています。

61. 恵比寿神社（所在　岩下１区）

甲佐町商店街の本通りの中央部にあります。高さ 120㌢の台座の上に置かれた間口 70㌢、奥行 65㌢の切妻造平入コンクリート造の石室です。側石に「明治 11 年（1878）寅 11 月再□　石工休村　福田与作」と刻まれています。恵比寿像は総高 38㌢、像高 31㌢でレンガのような焼き物で作られています。

古文書『岩下根元記』に元和元年（1615）に蛭子観音勧進の記録があります。この頃、美里町（旧中央町）の岩下や上豊内、下豊内、西寒野など周囲の村々から移住する人々が多くみられ、岩下町として繁栄の基礎が作られました。恵比寿は商売繁盛の神様です。現在は緑町区、岩下１区や２区の人々が信仰し、守っています。

62. 井芹経平先生生誕の地記念碑（所在　岩下１区）

恵比寿神社の正面にあります。

記念碑は高さ 45㌢、幅 61㌢、厚さ 35㌢の台座の上に、高さ 106㌢、幅 40㌢、厚さ 15㌢の黒い石板が載っています。

井芹先生は慶応元年（1865）５月１日に甲佐町岩下東園で生まれました。明治 21 年（1888）に東京高等師範学校を卒業後、佐々友房に招かれ、済々黌の第５代校長に就任しました。同校の中興の祖として、在職中の 36 年間で教育界に新風を吹き込み、「東に菊池謙次郎あり、西に井芹あり」と称され、全国的に評価されました。

昭和 27 年（1952）には、熊本県近代文化功労者として顕彰されました。

63. 天理教熊明分教会（所在　岩下１区）

甲南橋地蔵から約 160㍍北にあります。

宗派は天理教です。教会は瓦葺き入母屋で、入母屋の玄関があります。

設立は大正 14 年（1925）11 月９日となっています。

明治 44 年（1911）５月、和歌山県日高郡湯川村分教会から、原田亥一郎布教師が甲佐で教会を建て、布教を続け大正 14 年（1925）に宣教所設置の認可を得て今日に至っています。

64. 光縁山　教栄寺（所在　岩下１区）

宗派は浄土真宗本願寺派で、本尊は阿弥陀如来です。

境内隅に寄棟瓦葺の鐘楼があり、門の横に天保 12 年（1841）建立の地蔵堂があります。本堂は入母屋造瓦葺平入で、西南戦争では焼失を免れましたが、平成 28 年（2016）熊本地震で被災し、現在は仮本堂です。

現在は岩下１区にありますが、『甲佐町史』や『肥後国上益城郡村誌』によると、元は豊内村小園で浄信が開基したことや、明治 11 年（1881）11 月に岩下町字東園より地蔵菩薩を合併したこと等の記載がみられます。なお、『新甲佐町史』によると、寛永９年（1632）開基とあります。

65. 岩下地蔵堂（所在　岩下２区）

甲佐郵便局から約 50㍍北の右手にあります。

お堂は切妻造瓦葺妻入の三方吹き放ちで内陣と外陣（げじん）に分かれており、内陣の間口 190㌢、奥行 350㌢、外陣は間口 370㌢、奥行 360㌢で、総高 92㌢、像高 75㌢の石造地蔵菩薩立像が手作りの帽子と前掛けをつけて祀られています。火伏せ地蔵と言われ、岩下１区の岩下地蔵尊にある水の地蔵と対になっています。起源は不明です。現在の堂宇（どうう）の敷地は、大正年間に造酒屋の天野屋と萬屋（よろずや）から半分ずつ提供されたものです。平成 28 年（2016）熊本地震により被災しましたが、地元の方々によって修復されています。

祭日は７月 24 日です。

66. 甲佐井手（大井手）（所在　緑町区）

大井手用水は、鵜ノ瀬堰（町指定文化財）から岩下１・２区の中央を通り、糸田区塔の木まで国道443号沿いに続き、糸田区を経て糸田堰からの井手と合流します。

総延長は約20.5㌔、幅は約3.6㍍、灌漑面積は約435万平方㍍に及びます。洪水時には、甲佐井手の取水口（閘門（こうもん））を閉じ、鵜ノ瀬堰からの水流を再び緑川に戻すための排水溝になります。

大井手用水は、慶長13年（1608）に、加藤清正が田上氏里に命じて築造した農業用水です。この用水路の完成により、農業用水の安定供給が実現し、大雨による氾濫の災害も解消され、灌漑や治水の面で大きな効果を発揮し、地域の農業発展に寄与しました。

67. 仁田子地蔵尊（所在　仁田子区）

甲佐町から益城橋に向かう町道を橋の手前から右手の仁田子区に入り、約100㍍北西にあります。

地蔵堂には、蓮華台に立つ木造地蔵立像が祀られています。本町には石造の地蔵尊が多く、数少ない木造の地蔵尊です。

地蔵堂の由緒や建立年代は不明ですが、『国郡一統志』には、仁田子地区に「地福寺　地蔵」の記述があります。しかし、『肥後国誌』にはこの記述がなく、廃寺となったと考えられます。この地蔵尊が地福寺の本尊であったかは不明です。

68. 仁田子の猿田彦大神（所在　仁田子区）

役場から益城橋に向かい、橋の手前を左に約150㍍向かった桜塘にあります。

慶応２年（1866）の建立で、高さ190㌢、最大幅65㌢、最大厚27㌢、台座は二段で上段37㌢、下段55㌢です。

『新甲佐町史』によると、明治時代に作成された神社の基本台帳であった『肥後国上益城郡神社明細帳』では無格社として存置が許され、緑川の改修で堤防から集落内に移された、とあります。

69. 仁田子菅原神社（所在　仁田子区）

益城橋の約50㍍甲佐側を右折し、下仁田子地区内約20㍍の所にあります。

地元の人は「天神さん」と呼んでいます。高さ２㍍、四方20㍍ほどの敷地には石段があり、縦68㌢、幅60㌢の菅原道真を祀った石室があります。明治６年（1873）の建立で境内には、梅の木、灯籠、門柱等があります。

『国郡一統志』には、「仁田子　地福寺　天神森」が記載されており、石室を建てる前は天神の神木を祀っていたのではないかと推測されます

祭日は９月の第２日曜日で、甲佐神社の神主が来られます。

70. 大町の板碑（所在　大町区）

甲佐高校から約150㍍北の集落内にあります。

高さ60㌢、最大幅41㌢、厚さ21㌢の砂岩製です。上部に月輪を刻み、右側面の紀年銘は大半が判読できませんが、「□正十三乙」と読めます。この紀年銘から天正13年（1585）の建立と考えられます。

71. 立岩神社（所在　大町区）

甲佐地区から県道甲佐稲尾野線の竜野地区入口左手に立岩神社があります。

境内には入母屋造瓦葺妻入の拝殿があり、ご神体の大きい岩を男岩（高さ10㍍、幅7.6㍍）、少し小さい岩を女岩（高さ７㍍、幅3.9㍍）として祀っています。

本町を貫流する緑川沿いには多くの水神様が祀られていますが、江戸時代の早川厳島神社の神官の渡邉玄察は、「立岩森（タテイハモリ）甲佐川筋此當りに水神頭（スキジンカシラ）」と記しており、立岩神社は「緑川第一の水神」と由緒書きにあります。

祭日は７月11日と11月11日で、神主を呼び、祝詞（のりと）をあげています。

72. 田上氏里の碑（所在　横田区）

清正公山の山裾、岩鼻神社の麓の新井手の山際にあります。

縦 140㌢、幅 47㌢の石碑が倒れており、その横には高さ 70㌢の宝篋印塔の相輪と寛文 12 年（1672）の田上氏里（号：監物（けんもつ））の顕彰碑があります。

田上氏里は、慶長 13 年（1607）加藤清正が甲佐地方を巡検の際、清正の命で鵜ノ瀬堰（町指定文化財）から大井手用水の縄張りを担当し、その後、甲佐手永（てなが）の惣庄屋に任ぜられました。

73. 岩鼻神社（所在　横田区）

清正公山（せいしょこさん）登り口の鳥居を潜り、更に登ると「加藤神社」と記された鳥居があります。

祭神は加藤清正ですが、地元では「岩鼻神社（いわはなじんじゃ）」と呼んでいます。この神社の所在する山は、元々長楽山と呼ばれていました。この長楽山には「清正公緑川改修の時、この山頂より工事の模様を日毎ご覧になったゆかりの地であります。後に長楽山を清正公山と呼ぶようになりました。」との伝承があります。

74. 八角塔（旧：清正公供養塔）（所在　横田区）

岩鼻神社の境内にあります。

全体の高さは 210㌢で、７つの部材を組み合わせており、上から３段目が八角柱です。

文政７年（1824）に長楽山の観音堂を修復した際の記念塔で、その碑文には、「清正が鵜ノ瀬堰を築く際に、元服前の田上盛重は若年であったが、役に功があって鬼丸と呼ばれ、その名が地名として現在に伝わっていること。そして、盛重の父の氏里は、自らを四菩薩と号するほどに信仰心の深い人で、観音大師堂を建てたこと。観音堂の堂宇が壊れかかってきたため、渡邊正直や渡邊持などの有志住民等により、五月に着工し、六月に竣工して再建された。」等が記されています。

75. 新井手（上井手）と清正公山地蔵尊（所在　横田区）

岩鼻神社への登り口の第一鳥居の脇を流れる用水路があります。この用水路の開削は、江戸時代の惣庄屋の木原寿八郎の手により行われました。

用水は、鵜ノ瀬堰（町指定文化財）の漏斗口（じょうごぐち）から引き、上豊内区から中横田区まで導く計画でした。そのため、下流に水が流れなくなるのではと、当初は反対も多くありましたが、寿八郎自らが説得に廻り、文政７年（1824）ようやく着手し、３年かけて造られました。嘉永年間（1848 ～ 1853）には、用水の潤す範囲は下横田・中横田・浅井・上早川の各区にも広がりました。

また、参道入口には像高 70㌢の石造地蔵菩薩坐像が石室に祀られています。傍らに凝灰岩製の石室屋根があることから、古くからこの場所にあったようで、現在の台座には「昭和 36 年（1961）９月吉日再建」とあります。

76. 横田観世音堂（所在　横田区）

甲佐高校裏の清正公山の麓の道路沿いにあります。

拝殿は、間口 370㌢、奥行 363㌢で、拝殿と本殿は幅 190㌢、長さ 91㌢の廊下で繋がっています。本殿の中には間口 170㌢、奥行 47㌢、高さ 145㌢の厨子があり、中は三つに仕切られ、中央には総高 60㌢、像高 45㌢の木造観音菩薩坐像が祀られています。

観世音堂は、清正の 13 回忌にあたる寛永元年（1624）に長楽山（清正公山の前名）に建立され、その後に現在地（岩鼻地区）に移築されたと伝えられています。

祭日は 11 月 18 日です。

77. 長楽山　正宗寺（しょうそうじ）（所在　横田区）

宗派は浄土真宗本願寺派で、本尊は阿弥陀如来です。

切妻造瓦葺平入の本堂で御拝口があります。境内には入母屋瓦葺の鐘楼があります。

『上益城郡誌』によると、寛永 21 年（1644）、横田村の田上七之助が剃髪し、名を了益と改めて創建したが、明治 10 年（1874）、西南戦争で堂宇が灰燼と帰した、とあります。『新甲佐町史』では寛永 19 年（1642）開基とあります。

78. 横田の猿田彦大神（所在　横田区）

甲佐高校裏（松橋西支援学校甲佐分校入口）の県道稲生野甲佐線の交差点を集落内に約50㍍入ったところにあります。

明治13年（1880）の建立で、高さ165㌢、最大幅85㌢、最大厚70㌢、台座は台形で最大160㌢です。

79. 横田地蔵堂（所在　横田区）

横田公民館の近くにあります。

入母屋造瓦葺平入のお堂は、間口453㌢、奥行362㌢です。奥の祭壇には、地蔵が七体祀られています。

地蔵は子供の成長を願い、供養する仏様です。七体中二体が総高68㌢と47㌢の木造立像で、他の五体は石造で一体は総高50㌢立像、四体は40㌢～46㌢の坐像です。

それぞれの地蔵には、祈願された方の名前が記された前掛けが着けられ、祈願者による焼香台が奉納されています。

80. 有安の猿田彦大神（所在　有安区）

有安公民館前交差点を右折し、約100㍍左側にあります。

元治元年（1864）の建立で、高さ200㌢、最大幅60㌢、最大厚34㌢、台座は105㌢です。

『新甲佐町史』によると、明治時代に作成された神社の基本台帳であった「肥後国上益城郡神社明細帳」では緑川の改修で堤防から集落内に移された、とあります。

右脇には水神、左脇には地蔵が祀られています。

81. 有水山　正法寺（所在　有安区）

宗派は浄土真宗本願寺派で、本尊は阿弥陀如来です。

本堂は入母屋造瓦葺妻入です。境内には入母屋造瓦葺の鐘楼があります。

『甲佐町史』によると、正法寺は甲佐神社の神職を勤めて来た赤星一太夫の孫、赤星清太輔の子が浄土真宗に帰依して法名を慶智と改め、慶長３年（1598）、安平村から有安村に居を移し、寛永 12 年（1635）有安村に正法寺を開基した、とあります。

現在の本堂は、明治 10 年（1874）の西南戦争で焼失した後、明治 20 年（1884）に再建され、昭和 63 年（1988）に改修されたものです。

竜　野　地　区

竜野地区は町の中央東側の平野部及び山間部に位置します。

中世には目野集落を中心に数十ヶ所に及ぶ寺坊が立ち並んでおり、地区内にも多くの神仏が祀られています。また、伝承阿蘇惟前墓や「知行」や「城平」といった地名が残るなど、中世阿蘇氏に関連するものも認められます。

さらに、標高 100 mの台地上には、約２万年前の旧石器時代の遺跡「大峯遺跡」も認められます。

82. 目野の石造物（所在　中横田区）

目野地区の個人宅にあります。

高さ83㌢、最大幅45㌢、厚さ14㌢の砂岩製です。上部に月輪が蓮座（れんざ）上にあり、その中に、阿弥陀如来の種子「キリーク」が薬研彫されています。碑文から「道泉禅門」の追善のために「道音禅門」と「妙昌信女」が願主（がんしゅ）となり、永禄２年（1559）３月21日に追善供養を行い、板碑が建立されたことがわかります。「道泉禅門」は「道音禅門」の父とみられ、「道音禅門」と「妙昌信女」は夫婦と思われます。

また、右側には高さ62㌢、最大幅28㌢、厚さ11㌢の蛇紋岩製板碑もあります。銘文は中央にのみ「帰真妙秀禅定尼霊位」と刻まれ、妙秀禅定尼の墓碑で18世紀以前の建立と推測されます。

83. カワベニマダラ（所在　中横田区）

目野薬師堂隣の水場（湧き水）に生息しています。

カワベニマダラは淡水性川苔の一種で、きれいな水場の川石に自生する紅苔です。

以前は水場の底を真っ赤に染めるほど生息していましたが、近年その数は少なくなり、水場の一部で確認できます。

また、このカワベニマダラは清水の遊水池（上早川３区）でも生息が確認されています。

84. 宮野観音堂（所在　中横田区）

宮ノ尾公民館の斜め向かいにあります。

切妻造瓦葺妻入のお堂は、間口280㌢、奥行392㌢、向拝（こうはい）66㌢の木造です。厨子には扉と引き出しが付き、間口51㌢、奥行27㌢、高さ65㌢です。仏像は総高40㌢、像高27㌢の木造馬頭観音菩薩立像で、両手は欠損しています。祭日は１月18日です。

宮尾の観音菩薩は、福城寺（美里町）から明治初めに伝えられたそうです。また、お堂の欄間（らんま）に白毛馬と栗毛馬が天に向かって躍動する姿の絵馬が奉納されていましたが、絵馬は色あせ、朽ちてしまったとのことです。明治30年代に宮尾で大火災が起こり、家々はことごとく燃え尽き、観音堂だけが残り、馬頭観音への信仰がより深まったと伝えられています。

85. 中尾釈迦堂（所在　中横田区）

中尾地区にあります。

切妻造瓦葺平入のお堂は、間口・奥行は308㌢、向拝90㌢です。祭壇には二体の仏像が祀られています。一体は総高167㌢、像高140㌢、髪は螺髪（らほつ）の青銅造釈迦如来立像で、衣は鮮やかな朱色に彩色されています。石製台座は蓮の花が彫られ、朱・黄・緑に彩色されています。地元では中横田区目野の釈迦堂の本尊と伝えられています。もう一体は、総高48㌢の青銅造立像です。こちらも衣は朱色に彩色されています。

86. 若一王（わかいちおう）神社（所在　中横田区）

中尾地区への道路の左側に丘陵があり、その中腹に若一王神社の鳥居が見えます。

若一王神社は、寄棟瓦葺（よせむねかわらぶき）の拝殿（はいでん）と神明造の本殿からなります。社殿の両側には石灯籠と石柱が一対ずつ並んでいます。

『国郡一統志』には、「宮尾明神　若一王子　阿蘇　甲佐」と記されています。また、『肥後国誌』には、「若一皇子権現宮　祭11月15日　年神社」とあります。慶応4年（1868）の神仏分離令で権現号の使用が禁止され、若一王子権現宮は若一王子神社と改められました。現在は若一王神社と呼ばれています。祭神は伊弉冉尊命（いざなみのみこと）と速玉之緒命（はやたまおのみこと）です。

87. 木原寿八郎の碑（旧：木原寿八郎碑）（所在　中横田区）

甲佐中学校駐車場脇にあります。

今から約170年前、中横田区の立神・庄分・内田地域では、谷川の水で稲作をしており、干ばつが続けば全く収穫できないこともありました。その様子をみた惣庄屋の木原寿八郎は、鵜ノ瀬堰の漏斗口から水を引く計画を立てます。初めは下流に水が流れなくなるのでは、と他の地域からの反対も多くありましたが、自ら説得に廻り、文政7年（1824）から3年かけて新井手を完成させました。その後、嘉永年間（1848～1853）には、用水路は下横田・浅井・上早川地域にも広がり、現在も私たちの生活を支えています。この碑は万延2年（1861）に中横田村庄屋永野淳平以下役人によって木原寿八郎の慰霊碑として建立されたものです。

88. 中横田阿弥陀堂（所在　中横田区）

立神集会所の中にあります。部屋の一角に格子戸（開き戸）があり、中には観音開きの木製厨子があります。厨子は間口 44㌢、奥行 33㌢、高さ 121㌢で、朱や黒、金で彩色され、欄間は 13㌢です。仏像は総高 83㌢、像高 68㌢で、金彩色の木造阿弥陀如来立像です。台座には蓮華が彫られています。

阿弥陀堂に伝わる古文書「阿弥陀堂一宇」によると、この阿弥陀如来像は延暦年間（782 ～ 806）に造られ、古閑寺に安置されていましたが、小西行長によって寺院が焼失させられ、長い間土中に埋められていたものを、後に多くの人々によって再祀されたとされます。

89. 下横田天神社（所在　下横田区）

有安区から約 100㍍入った下横田区の道路脇にあります。

拝殿は切妻造瓦葺妻入で、その奥の切妻造トタン葺の本殿の中には間口 28㌢、奥行 35㌢、高さ 150㌢の両開きの厨子があります。祭神は菅原道真で総高 40㌢、像高 32㌢の木造男神坐像が祀られています。

『国郡一統志』には、下横田区に「天神森」の記載があります。しかし、『肥後国上益城郡神社明細帳』では飛石菅原神社とあり、その後、現在の下横田天神社になったと考えられます。

祭日は 11 月 24・25 日です。

90. 清涼山　寿専寺（旧：清涼山寿専寺）（所在　下横田区）

宗派は浄土真宗本願寺派で、本尊は阿弥陀如来です。

寄棟瓦葺の本堂の建立年は不明ですが、熊本城を建築した大工が建てたと伝えられています。質素な丸太材の屋根組は力強く、幾多の災害を乗り越えてきています。本堂内の欄間等の装飾は壮麗な江戸時代の真宗寺院の姿を見せています。境内には入母屋造瓦葺の鐘楼があります。

『甲佐町史』や『上益城郡誌』によると、寛永２年（1625）に菊池氏の末裔（まつえい）である僧、了西によって創建されたとあります。町内の浄土真宗寺院として最初に建てられ、中心的な役割を果たしてきたと伝えられています。

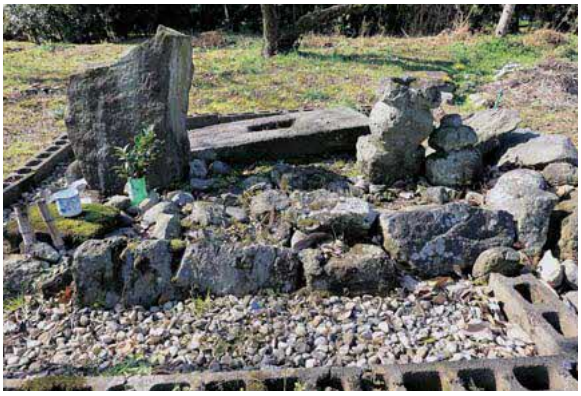
91. 宇佐園の猿田彦大神と明治 45 年洪水記念碑（所在　下横田区）

下横田消防格納庫の左脇にあります。

建立年は不明で、高さ 128㌢、最大幅 100㌢、最大厚 25㌢、台座は二段で上段 36㌢、下段 70㌢です。

台座には明治 45 年（1912）７月に発生した豪雨を「驟雨的豪雨」、「明治四十五年七月十二日貳十時増水」、「宮内豊内仁田子有安下横田塔木糸田所属堤防拾余箇所潰」などの銘文が記されており、その左脇に谷川道路改修記念碑が立っています。

92. 下横田の石造物（所在　下横田区）



宇佐園の猿田彦の約 260㍍北の畑の中に板碑と一石五輪塔があります。

板碑は高さ 60㌢、最大幅 41㌢、最大厚 21㌢の砂岩製で、上部と右側を欠損しています。上部には蓮座が二箇所あり、左側は蓮座のみで上部を欠損しています。右側には地蔵菩薩の種子「カ」が薬研彫され、銘文から、「道永禅門」のために永禄３年（1560）９月 10 日に石塔一基を建立したことが分かります。

一石五輪塔は高さ 40㌢の阿蘇溶結凝灰岩製で、上部の空風輪と地輪の側面五分の一が欠損しています。その形態から 16 世紀半ば頃の建立と考えられます。

93. 御崎（みさき）大明神（所在　下横田区）

小鶴地区にあります。

木造亜鉛鉄板葺の本殿は南向きで、間口 200㌢、奥行 225㌢です。切妻造瓦葺妻入の拝殿の板書には、「本宮尾根改築茅葺ナリシヲ氏子２名協議の上亜鉛鉄板に替えたり、（略）昭和４年（1929）10 月 27 日完結ス」とあります。

奥の祭壇に大小の厨子があり、大きな方の厨子には彫刻が施され、石造（凝灰岩）神像二体、小さい方の厨子には損傷した神像が祀られています。

『国郡一統志』には下横田に「御塩焼（みさき）明神」とあり、『肥後国誌』には「御塩焼社」と記されています。伊勢神宮の御師（おんし）福島御塩焼太夫（みさきだゆう）との関係をうかがわれる社号です。明治になって御崎宮神社と改められました。

祭日は 12 月 15 日です。

94. 祇園社（所在　下横田区）

九折（つづら）集会所の裏にある祇園社は、木造天板葺で間口・奥行共に197㌢、向拝180㌢、厨子は間口43㌢、奥行50㌢、高さ100㌢の木造です。

祭神は総高33㌢の木造男神坐像の素戔嗚尊（すさのおのみこと）で、疫病退散の神とされ、村人が京都の祇園社から持ち帰ったと伝えられていますが、その真偽は不明です。

なお、祇園社は昭和10年（1935）に現在の場所へ移転した際に新築されました。

祭日は旧暦の6月14日で、かつては、竜野三大祭りの一つに数えられていました。

95. 九折阿弥陀堂（所在　下横田区）

九折地区の中心にあります。

切妻造瓦葺平入のお堂は、壁はブロック積、間口205㌢、奥行175㌢で、厨子は間口73㌢、奥行31㌢、高さ105㌢の木造です。仏像は二体あり、いずれも舟形光背を負っています。右の仏像は総高78㌢、像高58㌢の木造阿弥陀如来立像です。左の仏像は総高43㌢、像高28㌢の木造立像です。

祭日は12月第1日曜日です。

96. 下横田六地蔵（所在　下横田区）

九折集会所から約150㍍東にあります。

高さ184㌢で、基礎、笠、宝珠を失っています。15世紀の造立と考えられますが、最下部の八面体の幢身に再建立銘とみられる「大正三年（1914）三月十二日」と彫られています。中台の六面体は一面が高さ15㌢、幅24㌢です。最上部は高さ42㌢の四面体で、各面には輪郭不明の地蔵が彫られています。下横田六地蔵は本来の形態を留めてはいませんが、地元では「六地蔵」として大切に祀られています。

言い伝えによると、明治45年（1912）7月13日の大洪水は、鵜ノ瀬堰（町指定文化財）をはじめ各所の堤防が決壊し、人家の流出、水田は根こそぎ流される惨状となる記録的な大災害でした。その時に六地蔵も現在の地に流れ着いたとのことです。

97. 浅井観音堂（所在　浅井区）

浅井区の若宮神社麓の竜野川沿いの山裾にあります。

観音堂内は、八畳敷きの奥の祭壇に虚空蔵菩薩立像、中央に寿老人そして如意輪観音菩薩立像の三体が祀られています。

平成の初め頃の調査によると、祠の裏に文政７年（1824）の名が刻まれた石が確認されています。

毎月８日は祭日で、供物を祭壇に供えて、体の痛み、悩み事や願いをかけ、お参りをすると願いが成就するとの伝承があり、今でも近郷から駆けつけてこられるそうです。

98. 若宮神社（所在　浅井区）

浅井区の丘陵頂上にあります。

参道の石段を登ると、「浅井神社」と記した鳥居があります。鳥居の先には切妻造瓦葺平入の拝殿があり、本殿は神明造となっています。若宮神社は、甲佐神社の末社で本殿には三つの厨子があり、健盤龍命、八井耳玉命、蒲池比咩命、神倭磐余彦命、媛蹈鞴五十鈴媛命が祀られています。境内には、嘉永５年（1852）の石碑や、嘉永２年（1849）の手水鉢があります。『国郡一統志』には、「若宮　山王　阿弥陀　三代将軍」と記されています。また、『肥後国誌』には、「若宮大明神社　祭九月五日」とありますが、現在の祭日は９月 15 日に近い日曜日です。

99. 日吉神社（将軍堂）（所在　浅井区）

若宮神社境内にあります。

切妻造トタン葺平入のお堂で、中の厨子には二体の男女の木造神像が祀られています。

日吉神社は山王社とも呼ばれています。現在は、日吉神社と将軍堂が一体となっています。『国郡一統志』には「若宮　山王　阿弥陀　三代将軍」と記されています。また、浅井猿王権現社は、日吉神社の境内社であると思われます。『肥後国誌』には「若宮大明神社　祭九月五日　山王」とあり、「阿弥陀　三代将軍」の記載はなくなっています。

祭日は 11 月 23 日です。

100. 浅井猿王権現堂（所在　浅井区）

若宮神社境内の中腹にあります。

本殿には二つの厨子があり、左の厨子には素焼きの子猿を抱いた猿が三体祀られています。右の厨子には男神と女神、更に小さな神様が祀られています。また、村の人は「さんのんさん（山王社）」と呼んでいます。

『国郡一統志』には「若宮　山王　阿弥陀　三代将軍」と記されており、猿王権現社は、この山王社である日吉神社の境内社であると思われます。『肥後国誌』には「若宮大明神社　祭９月５日」とあり、「山王　阿弥陀　三代将軍」の記載はなくなっています。

この猿王権現堂については、古くから「河童と猿の戦い」として語り伝えられています

平成 28 年（2016）熊本地震により被災しましたが、地元の方々によって修復されています。

101. 田代歳神（所在　上早川１区）

田代地区の北側に、安永４年（1775）３月に建立された石室があります。石室は間口 80㌢、奥行 109㌢、高さ 70㌢で、中には高さ 18㌢～ 20㌢の四体の神像が祀られており、右から男神、女神、男神、女神の木造坐像が並んでいます。田代上組の守護神であり、歳神は村の家々に１年の実りと幸せをもたらすために、高い山から降りてくる新年の神様とされています。

祭日は毎年 12 月 10 日に近い日曜日で、12 個の小さな竹筒に入れた甘酒とご飯がお供えされます。以前は、現在地より 50㍍ほど北側にありましたが、耕地の区画整理事業に伴い、昭和 56 年（1981）頃、現在地に移設されました。

102. 田代阿弥陀堂（所在　上早川１区）

田代公民館（一心館）の裏にあります。このお堂は、「田代地区共同墓地が移転した際、墓の跡地に先祖供養のために建てられた」と伝えられています。

切妻造瓦葺妻入のお堂は、間口 214㌢、奥行 255㌢、向拝 76㌢です。中には間口 68㌢、奥行 51㌢、高さ 99㌢の朱色の木造厨子があり、黒く焦げた総高 48㌢の木造阿弥陀如来坐像が祀られています。この焦げた仏像は、「昔、お堂に無断で寝泊まりしていた人が、不審火で被災したが、幸いにお堂だけが焼けて、村には被害が無かったことから、阿弥陀如来様が守って下さった。」と言い伝えられています。

103. 田代の猿田彦大神（所在 上早川１区）

田代地区入口の道路左脇にあります。

明治 20 年（1887）の建立で、高さ 190㌢、最大幅 75㌢、最大厚 60㌢、台座は二段で上段 45㌢、下段 35㌢です。

104. 田代地蔵（所在　上早川１区）

田代地区のほぼ中央にあります。

石室は間口 89㌢、奥行 87㌢、高さ 200㌢です。高さ 47㌢の台座の上に高さ 79㌢、幅 31㌢、厚さ 27㌢の舟形光背を負った地蔵菩薩立像が陽刻されています。地蔵の総高は 42㌢、像高は 33㌢です。台座には「寛延二年（1749）　無縁□界」の文字が刻まれています。

地元で大切に守られており、参拝しやすいように手造りのスロープがあります。

105. 大谷歳神（所在　上早川１区）

上早川１区公民館の東側にあります。

平成 28 年（2016）の熊本地震でお堂が被災し、その跡地に公民館が建てられました。大谷歳神の石室は倒壊し、平成 31 年（2019）２月に公民館東側に復元されました。復旧工事に際して石室の石板に「宝暦七年（1757）十月建立」の刻銘が見つかり、造立年が明らかになりました。

地区住民からは、「歳神（としがみ）さん」と慕われ、穀物や家を守る神、そして、村の家々に一年の実りと幸せをもたらすために、高い山から降りてくる新年の神様として祀られています。

平成 28 年（2016）熊本地震により被災しましたが、地元の方々によって修復されています。

106. 大谷（おたに）観音堂（所在　上早川１区）

大谷地区の山の中腹に建てられています。

切妻造瓦葺妻入のお堂は、間口 219㌢、奥行 255㌢で格子戸両開きの扉がついています。

厨子は木製で間口 53㌢、奥行 39㌢、高さ 104㌢です。仏像は木造十一面観音菩薩立像で総高 60㌢、左手には蓮の花を一輪持ち、右手は印を結んでいます。観音像は金彩色で平成７年（1995）に化粧直しされました。

言い伝えでは、観音堂は明治以前には集落の平坦地にありましたが、集落に火事が多発したことから、集落全体を見下ろせる現在地に移されたそうです。毎月第３日曜日には集落の行事として清掃作業が行われています。

107. 光明山　皓月（こうげつ）寺（所在　上早川２区）

宗派は浄土真宗本願寺派で、本尊は阿弥陀如来です。

入母屋造瓦葺の本堂と切妻造瓦葺の鐘楼があります。

皓月寺はもと皓月山上にありましたが、文亀年間（1501 ～ 1504）に現在の地に移り、皓月庵と名乗りました。

『新甲佐町史』によると、開基は明治 12 年（1882）寺号公称とありますが、同町史には天保元年（1830）５月 25 日付けの本願寺と肥後国門末（もんまつ）との往復書簡を記録した記録（本願寺史料集成『肥後国諸記』）に「肥後国皓月寺」とあることから、既に江戸末期には本願寺から寺号免許を得ていたと考えられます。

108. 大峯（おみね）遺跡（所在　上早川２区）

大峯遺跡は上早川２区の大峯公民館から約 100㍍南の標高約 100㍍の台地上に立地し、沖積平野（ちゅうせきへいや）との比高は約 50㍍です。

昭和 40 年（1965）１月に熊本県で初めて旧石器時代の本格的な発掘調査が実施されました。この発掘調査は、考古学者だけではなく地質学者も参加する総合的な発掘調査でした。

その結果、旧石器時代の石器と縄文時代の土器や石器が出土し、九州で初めてローム層（火山灰層）から石器が発見された遺跡として評価されました。

このローム層は放射性炭素年代測定（C14）の結果、約２万年前の土層であることが明らかになり、出土した旧石器時代の石器は約２万年前を中心としたものであることも分かりました。

109. 大峯菅原神社（旧：大峰菅原神社）（所在　上早川２区）

上大峯集会所の裏手にあります。

高さ 87㌢の石造り台座上に間口 100㌢、奥行 90㌢、高さ 120㌢のコンクリート造の石室があります。中には間口 25㌢、高さ 40㌢の木製厨子があり、高さ 25㌢の木板製の菅原道真が祀られています。

この神社は、『国郡一統志』には「天神」、『肥後国誌』には「天神社」、『肥後国上益城郡神社明細帳』には「大峯天神社」へと呼び名が変化しています。

祭日は１月 15 日です。

110. 大峯地蔵尊（所在　上早川２区）

大峯地区の最も奥の山裾にあります。

以前は近くに堤があり、地域の水田を潤していましたが、現在は埋立てられています。

コンクリート造の石室は間口 53㌢、高さ 96㌢、屋根は片流れです。

総高 50㌢、像高 40㌢の石造地蔵菩薩立像は、子守地蔵として祀られ、以前は子ども達によって祭りが行われていたようです。

地蔵像は平成 19 年（2007）３月２日に木造から石造に作り替えられています。

祭日は１月 15 日です。

111. 大峯馬頭観音（旧：大峰馬頭観音）（所在　上早川２区）

大峯地区中央の道路際にあります。

石室は間口 53㌢、奥行 36㌢、高さ 90㌢です。観音像は総高 43㌢、像高 33㌢の石造馬頭観音菩薩坐像です。明治９年（1876）４月に建立された三面六臂（さんめんろっぴ）の菩薩像で、現在は正面の顔の右半分が欠けています。馬頭観音は農業の仏様として農民の崇拝を受け、特に家畜や農作物の安全や豊穣を願ってきました。

言い伝えによると、「この場所で生える笹を牛馬に食べさせると元気が出る」と言われています。

112. 下大峯の観音堂（四方仏）（所在　上早川２区）

下大峯地区中央の町道脇の手摺付き階段を登った所にあります。

高さ 40㌢の台座に二つの石室があり、右の石室は間口 40㌢、奥行 35㌢、高さ 90㌢です。仏像は高さ 46㌢、最大幅 30㌢、最大厚 16㌢の砂岩製で、三面八臂の石造馬頭観音菩薩坐像です。石室の側面の銘文から明治 23 年（1890）12 月に「本田亀 / 仝安平 / 仝順次 / 植村玄伸 / 本田光治」が建てたことがわかります。左はブロック造の石室の中に高さ 46㌢、最大幅 30㌢、最大厚 16㌢の砂岩製墓碑があります。月輪の中に「ア」の種子、その下に「権律師昌珎」とあり、江戸後期の天台宗僧侶の墓碑と考えられます。

観音堂は馬の無病息災を祈願し、明治 35 年（1902）12 月の建立です。

祭日は７月 10 日です。

113. 城平板碑（所在　上早川２区）

県道稲生野甲佐線の竜野川に架かる城平橋から約 130㍍東の道路右側にあります。

板碑は高さ 58㌢、最大幅 121㌢、最大厚 28㌢の砂岩製で東向きに立っています。板碑の中央上部には、蓮座の上の月輪内に阿弥陀如来の種子「キリーク」が薬研彫されています。蓮座に向かって左側に「貞阿弥陀　生智　亀霍　万徳　亀太良満龍」の俗名が刻まれ、大永５年（1525）２月 28 日に建立された結衆（けちしゅう）板碑（逆修碑）であったことがわかります。

板碑は一般的には戒名を刻むことが多いため、実名が記されたこの結衆板碑は貴重な事例です。

114. 上知行の天神社（所在　上早川３区）

上知行地区の宮ノ尾川に架かる橋の傍にあります。

高さ 70㌢の基礎の上に石室が建っており、大きさは間口 160㌢、奥行 121㌢、高さ 168㌢です。中には天神と弁財天が祀られています。天神は総高 46㌢の木造男神坐像です。弁財天は総高 38㌢の木造女神坐像です。

石室の横には、御神木とされるムクの老木があります。

上知行地区では 11 月 25 日を祭日とし、下知行地区では 12 月 15 日を祭日として、器に入れたご飯を奉納します。奉納したご飯の一部を木の葉に移し、天神と御神木に供え、残りを「天神さんのめし」として住民が頂きます。

115. 上知行薬師堂（所在　上早川３区）

上知行公民館の中にあります。

公民館の一角には、観音開きの祭壇があり、総高 65㌢、像高 47㌢、幅 33㌢の木造薬師如来坐像が祀られています。髪は螺髪で、体は水色と朱色に彩色されています。左手には薬壺、右手は前に差し出していますが、人差指が欠損しています。

地域の繁栄を祈って毎年１月 12 日には住民がお堂に集まり、座が開かれます。以前のお堂は、明治 24 年（1891）９月 16 日に新築され、昭和 40 年（1965）８月６日の台風により大破しました。その後、平成 17 年（2005）公民館新築に伴い、現在の場所へ移転しました。

116. 下知行（しもちいき）の猿田彦大神（所在　上早川３区）

町営バス城平バス停先 20㍍を右折し、100㍍進んだ左側にあります。

明治 20 年（1887）の建立で、高さ 155㌢、最大幅 165㌢、最大厚 60㌢、台座は二段で上段 50㌢、下段 100㌢です。

祭日は３月 15 日と９月 15 日です。

117. 幸野の地蔵堂（所在　上早川３区）

幸野地区のほぼ中央にあります。

切妻造瓦葺妻入のお堂は、間口 293㌢、奥行 325㌢、向拝は 120㌢です。お堂の中には間口 63㌢、奥行 41㌢、高さ 95㌢で木製の厨子があります。中には総高 55㌢、像高 37㌢の木造地蔵菩薩坐像が祀られています。

地蔵尊は、火除けや地域繁栄の守り神であり、古くから「延命地蔵さん」としても親しまれています。

なお、お堂は平成 28 年（2016）の熊本地震で損壊したことから、平成 30 年（2018）に再建されています。その際、旧祠の裏に「文久二年（1862）七月」と記載されていたことが確認されています。

祭日は１月 24 日と７月 24 日です。

118. 海陸大明神（所在　上早川３区）

竜野保育園の近くにあります。

切妻造トタン葺平入の本殿は、間口 325㌢、奥行 203cm、向拝 120㌢です。中には木製の厨子があり、間口 55㌢、奥行 25㌢、高さ 95㌢です。厨子には二体の木造神像坐像が祀ってあります。右は総高・像高共に 25㌢の豊玉姫尊（とよたまひめのみこと）で、左は総高・像高共に 23㌢の綿津見神（わたつみのかみ）です。

この地区には太古の昔、海幸彦と山幸彦の兄弟が住んでいたという言い伝えがあります。地元では、海陸大明神を「きゃーらくさん」とも呼んでいます。

祭日は 12 月 10 日です。

119. 清水の遊水池（所在　上早川３区）

幸野地区の県道稲生野甲佐線沿いにあり、道向いには海陸大明神があります。

湧水池には樹齢 700 年以上の大スギがあり、現在も根元からは、幸野原から浸透してきた水が湧き出ています。

以前は、野菜を洗ったり、洗濯場や子ども達の遊び場であったりと、生活に欠かせない湧水池だったそうです。

現在は、生活用水としての利用はありませんが、毎年１月の初寄合時には周辺の掃除をし、御神酒（おみき）を上げて１年間の無事を祈っています。

120. 小原（こばる）山ノ神（所在　上早川４区）

林道山ノ神線の砂防ダムの先を 50㍍以上登った沢の横にあります。砂防ダムの先は傾斜が急な山道で、標高は約 190㍍です。

祠は木とトタン屋根でできています。屋根は片屋根で地面まであり、間口 294㌢、奥行 196㌢、高さ 196㌢の鳥居の高さは 110㌢です。斜面にあるため、周りの石を集めて平坦にしています。

地元の方の話では、「以前は、祭日は 12 月 15 日でしたが、現在は 12 月 15 日に近い日曜日に米と塩サバを持って現地に行き、沢の水と羽釜、近くに落ちている杉などを使って米を炊き、塩サバを焼いてお供えした後、お神酒を上げて食べて帰っていた」、とのことです。管理は集落の４軒で行っています。

121. 小原観音堂（所在　上早川４区）

山口観音堂から700㍍北の右手の山裾にあります。

切妻造トタン葺妻入のお堂は、壁はブロック積、間口141㌢、奥行119㌢、高さ180㌢です。ブロックの棚の上に、石像三体が祀ってあります。右は総高38㌢、像高34㌢の石造観音菩薩立像で、両手で宝珠を持っています。中央は総高32㌢の男神坐像で、烏帽子をかぶり手には杓を持っています。左は総高30㌢の女神坐像です。

言い伝えでは、「明治10年（1877）４月３日、西南戦争に出征した村人が宮崎県佐土原から持ち帰り、昭和２年（1927）に観音堂が建てられた時に、現在地に三体が祀られることになった。」とされています。

122. 伝承阿蘇惟前（これさき）墓（所在　上早川４区）

小原観音堂より約30㍍北の道路沿いに立つ「おたっちょさん（伝承阿蘇惟前墓）」の標柱の奥にあります。

阿蘇惟前は永正10年（1513）に阿蘇惟豊との争いに勝利した父・惟長の後見を得て阿蘇大宮司となるが、永正14年（1517）に惟豊の反撃を受けて八代の相良長毎のもとに逃れました。大永３年（1523）に堅志田城を落とし、甲佐・砥用（美里町）・中山（美里町）を支配下に治めましたが、天文12年（1543）に堅志田城を惟豊に落とされ、再び八代の相良長唯のもとに逃れました。永禄３年（1560）に阿蘇領小国に侵攻するが撃退されました。

竜野地区は、阿蘇大宮司の拠点「浜の館」があった矢部（山都町）との重要な交流地点でした。地元では惟前のことを「おたっちょさん」と呼んでいます。「おたっちょ」とは、お館様のなまったものと言われています。現存の墓は宝篋印塔の残石のみで、明確な墓碑はありません。

123. 大原（おばる）地蔵堂（所在　上早川４区）

大原公民館の中にあります。

厨子は間口44㌢、奥行26㌢、高さ64㌢です。仏像は総高45㌢、像高30㌢で、左手には宝珠を持ち、舟形光背を負う木造地蔵菩薩坐像で、台座は13㌢です。

言い伝えによると、「17世紀の初め大原地区を開拓するため、上大谷より守護として地蔵尊を勧進していたが、村づくりの基礎もでき、上大谷に返還すべくお伺いをたてたところ、地蔵尊はこれを拒んだため、以来300年の永きにわたりこの場所に祀られている」、とされています。加えて、今日まで大原地区に火事がないことから「火伏地蔵」として厚い信仰を得ています。

124. 山口観音堂（所在　上早川４区）

山口公民館の中にあります。厨子は木製で、間口 52㌢、奥行 38㌢、高さ 125㌢です。仏像は総高 90㌢、像高 58㌢の木造観音菩薩立像です。光背は輪光を負い、左手に子どもを抱き、金彩色された子安観音で、台座は蓮華座です。

古くから安産の仏様として信仰を集め、山口地区では年２回祭事が行われています。

祭日は１月 18 日と７月 10 日です。

125. 六谷地蔵尊（所在　上早川５区）

六谷公民館の近くにあります。

高さ 180㌢の石室の中に、台座 30㌢、総高 93㌢の石造地蔵菩薩立像が祀られています。地蔵菩薩には､｢宝暦９年（1759）10 月･安永６年（1777）正月吉日｣、右側に立つ石灯籠には「弘化２年（1845）」と刻まれています。

「子どもの守り神」として信仰されており、お菓子が供えられています。

祭日は年２回あり、１月・７月の 14 日に１番近い日曜日に行われています。また、右手斜面にも二体の石造地蔵菩薩立像があります。

乙　女　地　区

乙女地区は町の中央西側の乙女台地を中心に位置します。

弥生時代の支石墓や古墳時代の円墳、横穴墓等が確認されており、古くから乙女台地上で人々が生活していた痕跡が認められます。中でも、乙女地区では世持道免遺跡や世持石佛遺跡、中山錦川遺跡で発掘調査が行われ、縄文時代から奈良・平安時代の様子が分かる町内でも数少ない地域です。また、台地上に立地する地形的な要因から水の確保に関するものも認められます。

126. 船津磨崖五輪塔と磨崖板碑（所在　船津区）

熊本甲佐総合運動公園の山裾の壁面に陽刻されています。

磨崖五輪塔は水輪と地輪が土砂に埋もれて全容はわかりませんが、火輪と風輪の形態から鎌倉時代後期から南北朝前期（14 世紀前半）の頃のものと考えられます。

隣の磨崖板碑は、上部に阿弥陀三尊の種子を薬研彫し、その下に「諸行無常／是生滅法／生滅滅已／寂滅為樂」と刻まれています。本来は、その下には紀年銘が刻まれる可能性が高いですが、土砂に埋もれて確認することはできません。この板碑も磨崖五輪塔と同様の時期に建立されたものと考えられます。

127. 谷の観音堂（所在　船津区）

谷地区に入り、約 200㍍西にあります。

切妻造瓦葺平入のお堂で、中の厨子には木造十一面観音菩薩立像が祀られています。厨子の内側には「開眼昭和十二年（1937）／南無妙法蓮華経／南無馬頭観世音菩薩／玉祥寺四世／義照」と記してあります。

しかし、祀られているのは十一面観音菩薩で、厨子の墨書銘にある馬頭観音菩薩と食い違っています。村人の話によると、元は山手にあったそうです。

128. 船津地蔵堂（所在　船津区）

谷の観音堂から約 200㍍西にあります。

切妻造平入のお堂で、中の厨子には彩色された木造地蔵菩薩立像が祀られています。その横には朽ちた古い地蔵菩薩がありますが、この地蔵菩薩の由緒等は不明です。

現在は谷、迫、山口地区で守られ、船津地蔵菩薩の氏子祭りは 11 月 24 日です。

なお、お堂は昭和 50 年（1975）５月に改修されています。

129. 船津観音堂（所在　船津区）

熊本バス船津バス停より約100㍍南にあります。

切妻造瓦葺妻入のお堂は、躯体がブロック造で、間口は200㌢、奥行は200㌢です。台座上に総高31㌢、台座7㌢の石造馬頭観音菩薩立像が祀られています。その顔は修復され、合掌しています。菩薩像の左には「為三界萬霊」、右には「観世音菩薩」の文字が刻まれています。

本町では江戸時代後期から明治時代初期に多くの農耕馬が飼われており、馬を家族の一員として大事に育てていたため、馬の守護仏の馬頭観音菩薩が祀られていたと考えられます。

祭日は4月18日です。

130. 迫の大乗妙典一部石塔（所在 船津区）

船津観音堂の北側にあります。

三基の石碑の一つは一字一石経の碑で、台座は121㌢、その上に23㌢の小さな台座があり、更に137㌢の「大乗妙典一部石」の文字が彫られた石碑が乗っています。側面には、この碑の発願が記してあり、天保14年（1843）に建立されたことがわかります。小石にお経の文字を一文字一文字書いたものは一字一石経と呼ばれ、室町時代から江戸時代に流行した写経の一種です。写経された小石は地面に埋められ、その上に塔が建てられています。

131. 船津六地蔵（所在　船津区）

熊本バス山口バス停より約200㍍南にあります。

高さ200㌢のうち基礎が30㌢、幢身が127㌢です。宝珠は後方に落ち、龕の六面にそれぞれ地蔵が彫られている六地蔵ですが摩耗して見えなくなっています。

六地蔵は人間の六道を守護する地蔵への信仰から「道」に着目して交通安全に転じた信仰です。この船津六地蔵はその形状から15世紀に建立され、再度江戸時代に修復されて建立されたものと思われます。

132. 船津支石墓（ドルメン）（所在　船津区）

船津区八ッ割周辺にあります。

これは昭和 40 年（1965）頃に熊本県立女子大学教授（当時）の乙益重隆氏らの現地調査によって発見された縄文時代晩期～弥生時代の前期（2000 ～ 2500 年前）の墓です。支石墓（ドルメン）は死体を埋め、頭大の石を三つ置き、その上に長さ 1.5㍍、幅 1 ㍍ぐらいの石を平に置くもので、八ッ割の支石墓は南鮮式支石墓で、発見当初は十二基以上が確認され、九州では数少ない珍しい墓制として着目されました。

また、麻生原区から船津区には、縄文土器や弥生土器、石器等が多量に発見され、古くから長期にわたって人々が居住していたことがうかがえます。

133. 山口薬師堂（所在　船津区）

山口集会所の中にあります。

厨子は間口 30.5㌢、奥行 20㌢、高さ 92㌢、屋根幅 64㌢で、総高 58㌢、像高 40㌢、台座 18㌢の両手が欠損した木造薬師如来立像が祀られています。この薬師如来像は全体的に黒ずんでおり、由緒等は不明です。

祭日は 1 月 12 日です。

134. 山口の猿田彦大神（所在　船津区）

山口集会所横にあります。

明治 14 年（1881）の建立で、高さ 114㌢、最大幅 94㌢、最大厚 20㌢、台座は二段で上段 22㌢、下段 95㌢です。

135. 山上神社（所在　船津区）

山口集会所から60㍍南西にあります。

本殿には中央に厨子があります。本殿と拝殿を結ぶ通路の両側には随神像が左右一体ずつ祀られています。どちらも椅子に腰かけて右足を上げて座っています。左の随神像は総高75㌢ 幅42㌢、椅子の高さは19㌢です。右の随神像は総高85㌢、幅40㌢、椅子の高さは22㌢です。

山上神社は「山ん神さん」とも呼ばれ、昭和の初めの頃までは女人禁制の場所でした。『肥後国誌』に記載されている「権現宮　山神宮　若宮」の山神宮はこの山上神社であると比定されます。

136. 船津の猿田彦大神（所在　船津区）

船津公民館から古閑地区へ約400㍍の共同墓地入口にあります。

明治14年（1881）の建立で、高さ150㌢、最大幅55㌢、最大厚22㌢、台座は二段で上段23㌢、下段55㌢です。

137. 船津阿蘇神社（所在　船津区）

船津区坊分地区から杉木立の参道先にあります。

本殿は切妻造瓦葺、拝殿は入母屋造瓦葺平入で、本殿には健磐龍命などを祀っています。拝殿には随神像が左右に並んで祀られており、文政9年（1826）の板木もあります

同神社は、延慶3年（1310）3月15日に勧請され、寛永6年（1629）に南條左近・芦田輿左衛門によって再興されたと伝えられています。

『国郡一統志』には「宮山明神」とあり、『肥後国誌』には「十二宮大明神　祭九月十九日」とあるのがこの船津阿蘇神社です。

平成28年（2016）熊本地震により被災しましたが、地元の方々によって修復されています。

138. 船津仏像堂（所在　船津区）

船津阿蘇神社の境内の一角に仏像堂があります。この仏像堂には、六体の仏像が祀られています。等身大の阿弥陀如来立像が二体、そして厨子には大日如来が祀ってあり、その横には三尊形式の不動明王があります。

これらの仏像の由緒等は不明です。『国郡一統志』には「船津　宮山明神　天神永照寺観音　清蓮寺阿弥陀」とあり、『肥後国誌』には「十二宮大明神社　権現宮　山神宮　若宮」とあるので、17世紀から18世紀にかけて廃寺になったと思われる、観音菩薩を祀る永照寺と阿弥陀如来を祀る清蓮寺の本尊等が、この仏像堂に合祀されているのかもしれません。

また、仏像堂に参ると頭髪が黒くなると伝えられており、地元では「くろかみさん」と呼ばれています。

139. 桜地蔵（所在　船津区）

熊本バス山口バス停より約500㍍北のサクラの木の下にあります。

高さ65㌢の石造地蔵菩薩像です。その横には「右　堅志田」「左　中山」と刻まれ、背面には明和２年（1765）と刻まれている高さ46㌢の石造道標があります。

平成20年（2008）頃までは、道標の上に地蔵菩薩が載せられていました。地元の方によると、以前は木製のお堂の中に祀られていたそうです。

この地蔵は道路の分かれ道に建てられており、道祖神信仰と結びついたものと考えられます。

140. 麻生原菅原神社（所在　麻生原区）

麻生原区内の南に位置し、杉の大樹に囲まれています。

本殿は大社造銅板葺、拝殿は入母屋造瓦葺妻入です。本殿には間口59㌢、高さ132㌢の厨子があり、中には台座９㌢、像高43㌢で衣に梅の紋様が描かれた、漆喰造りの菅原道真坐像が祀られています。

厨子の左右には高さ65㌢、幅32㌢で椅子に座り、片足を椅子に上げて座った随神像があります。随神像の横には高さ30㌢の阿吽の狛犬があります。『甲佐町の文化財 第一集』には「寛永10年（1633）３月10日勧進」とあり、『肥後国誌』では「天満宮」と記されています。

平成28年（2016）の熊本地震により鳥居が倒壊したため修復され、令和５年（2023）に本殿の屋根が修復されました。

141. 麻生原観音堂（所在　麻生原区）

国指定天然記念物「麻生原のキンモクセイ」の隣にあります。

切妻造瓦葺妻入のお堂は、向拝が115㌢、間口285㌢、奥行356㌢で、東向きに建っています。中の厨子は間口63㌢、奥行38㌢、高さ115㌢で、像高55㌢、幅23㌢の木造観音菩薩坐像が祀られています。仏頭から馬頭観音か十一面観音と思われ、地元の方が衣を着せ、手編みの帽子をかぶせています。厨子の壁には「千時天保十一歳（1840）」等と墨書されています。厨子の屋根下部分は燃えて炭化しています。

142. 麻生原の猿田彦大神（所在　麻生原区）

麻生原観音堂の敷地内にあります。

明治15年（1882）の建立で、高さ125㌢、最大幅100㌢、最大厚40㌢、台座は二段で上段35㌢、下段80㌢です。

平成28年（2016）熊本地震により被災しましたが、地元の方々によって修復されています。

143. 光明山　青蓮寺（しょうれんじ）（所在　麻生原区）

宗派は浄土真宗本願寺派で、本尊は阿弥陀如来です。

本堂は瓦葺入母屋造で、縦６間、横７間で、御拝口があり、本堂の向拝には壮麗な彫刻が施されています。

『甲佐町史』によると、伊佐三郎助が真宗に帰依し、名を慶宅と改めて一宇を建立し、青蓮寺と号した、とあります。

なお、『新甲佐町史』によると、寛文２年（1662）開基とあります。

144. 麻生原伊勢堂（所在　麻生原区）

光明山青蓮寺の敷地内にあります。

切妻造銅板葺平入のお堂は、間口 180㌢、奥行 180㌢、向拝 49㌢です。中には間口 44㌢、奥行 34㌢、高さ 83㌢の木製厨子があり、像高 25㌢、台座 7㌢の天照大神の木造立像が祀られています。

祭日は 2 月 22 日です。

145. 麻生原天神社（所在　麻生原区）

麻生原公民館の横にあります。

石室は高さ 150㌢、幅 40㌢、土台の高さは 60㌢で、裏には「明治八年（1875）」と刻まれています。中には総高 12㌢、像高 11㌢の一木造の天神坐像が祀られています。

鳥居は令和 5 年（2023）に新設されました。

祭日は 12 月 15 日です。

146. 麻生原金八（水神）（所在　麻生原区）

甲佐大橋を乙女方面に渡った道沿いの右上方にあります。

一辺が 230㌢の玉垣で囲まれており、中央には高さ 90㌢、最大幅 70㌢、厚さ 60㌢の砂岩が祀られています。

この金八水神には緑川の両岸で様々な伝説や民話等があります。左岸では、「首を切られて死んだ金八が可哀そうだと麻生原の人々が金八の魂をなぐさめ水神さんとして祀ったところ、それ以降、麻生原区の村からは水に溺れて死ぬ者がいなくなりました。それは金八の家来である河童たちが村の人たちを守ってくれるから」と伝わっています。

祭日は 7 月 1 日です。

147. 塔の木さん古墳（旧：麻生原塔ノ木古墳）（所在　麻生原区）

県道今吉野甲佐線とマミコウロードの交差点から約 150㍍南東の県道今吉野甲佐線沿いにあります。

塔の木さん古墳は、北側が削平されていますが、高さ約 2.5㍍、長さは 20㍍の墳丘が残っており、復元すると、直径約 30㍍の円墳になると推定されます。また、西側には大石が露出しており、これは古墳の側面に入口を設けた横穴式石室の一部とみられ、６世紀頃に造られたものと考えられます。

148. 世持（よもち）・石佛（いしぼとけ）遺跡と世持・道免遺跡（所在　世持区）

両遺跡は、県営乙女大沢水（おおそうず）地区農免農道整備事業に伴って、平成 15 年度から平成 16 年度に甲佐町教育委員会によって発掘調査が実施されました。

世持・石佛遺跡では 1,000 平方㍍が発掘調査され、縄文時代の埋甕（うめがめ）や近世の溝等が確認されました。中でも、埋甕は埋められた甕の中に更に１点の土器が伏せて埋納（まいのう）された状態で出土しました。

世持・道免遺跡では、2,267 平方㍍が発掘調査され、溝や炉跡などが確認されています。

両遺跡からは多くの縄文時代晩期（ばんき）の土器が出土しており、両遺跡の周辺に縄文時代の集落があったと考えられます。

149. 世持沢水池（所在　世持区）

世持区の西側にあります。「沢水池」と書いて「そっつぁんいけ」と呼ばれています。

世持区が所在する乙女台地には大きな川が無く、昔から農業用水の確保に苦労していました。区の水源としては、雨水を蓄えた二つの溜池と「沢水池」と呼ばれる湧水池の水が主となっています。この「沢水池」は、世持区から南三箇区・中山区を経て、熊本市南区城南町の浜戸川へと流れる錦郷川（にしきごうがわ）の源流となっており、池の近くには「水神様」を祀る石室があります。石室は台座が２段（上段 22㌢、下段 30㌢）あり、間口 50㌢、奥行 42㌢、高さ 85㌢です。水神は舟形光背を負い、像高 37㌢、最大幅 30㌢です。

祭日は４月１日です。

150. 世持地蔵堂（所在　世持区）

錦郷川の源流である沢水池より川沿いに約300㍍下った所にあります。

切妻造瓦葺平入のお堂は、間口180㌢、奥行240㌢、向拝70㌢で南向きに建っています。中の厨子は昭和40年代にサクラの木で造られたもので、間口58㌢、奥行39㌢、高さ85㌢です。中には台座10㌢、像高40㌢の木造地蔵菩薩坐像が祀られており、右手は欠損しています。また、像容不詳の総高48㌢、最大幅20㌢の仏像も祀られています。

151. 世持妙見社（所在　世持区）

世持公民館から約200㍍南の錦郷川右岸にあります。

本殿は切妻造瓦葺、拝殿は入母屋造瓦葺平入です。本殿の奥には、間口20㌢、奥行45㌢、高さ90㌢の厨子があり、中には総高40㌢の彩色された木造女神立像が祀られています。通常は拝観窓からの拝観となり、女神像の全体像は見ることはできません。

祭神は高御産巣日神（たかみむすびのかみ）です。『国郡一統志』には「妙見」、『肥後国誌』には「森妙見社」と記されています。

祭日は10月18日です。

152. 虚空蔵菩薩（こくんぞさん）（所在　世持区）

世持妙見社傍の個人宅にあります。

虚空蔵菩薩がなまって「こくんぞさん」と呼ばれるようになったと思われます。

阿蘇溶結凝灰岩製（②は馬門石）の石造物が四基で、左から①高さ50㌢、最大幅35㌢の宝塔塔身、②高さ26㌢、最大幅21.5㌢の五輪塔の空風輪、③高さ56㌢、最大幅36㌢の宝塔塔身、④高さ40㌢、最大幅31㌢の宝塔塔身です。②の五輪塔の空風輪は逆さまに置かれ、石材は宇土市網津町馬門付近で産する赤みを帯びた阿蘇溶結凝灰岩で、通称「馬門石（阿蘇ピンク石）」と呼ばれるものです。宝塔の形態から13世紀から14世紀半ば頃の建立とみられます。

153. 世持天神社（所在　世持区）

世持公民館の裏に建っています。

本殿の中には二つの厨子があり、右の厨子は間口 45㌢、奥行 29㌢、高さ 54㌢です。中には円形の青銅製鏡が祀られており、大きさは高さ 18㌢、幅 15㌢です。左の厨子は間口 25㌢、奥行 19㌢、高さ 41㌢で、像高 21㌢の木造女神立像が祀られています。

『国郡一統志』には「天神」、『肥後国誌』には「天満宮」と記されています。17 世紀から 18 世紀の間に名称が「天神社」から「天満宮」に変わっています。

祭日は 11 月 4 日です。

154. 世持地蔵尊（所在　世持区）

世持区から津志田区と南三箇区への分岐となる三叉路の角にあります。

お堂の中の石室は、間口 52㌢、奥行 43㌢、高さ 117㌢で、総高 35㌢、像高 28㌢の石造地蔵菩薩立像は高さ 60㌢、幅 30㌢の舟形光背を負っています。

舟形光背の右側には、「法界　子時　明和元（1764）　申　世持村萬霊　十二月九日　願主平五良」と彫られています。

155. 荒人神社（旧：三賀神社）（所在　南三箇区）

南三箇区中央にあります。

拝殿入口の梁には梅鉢の紋があり、菅原道真が祀られています。拝殿は入母屋造瓦葺平入で御拝口があり、本殿は神明造です。本殿には同じ大きさの厨子が四個並んでいます。厨子にはそれぞれしめ縄があります。

由緒等は不明ですが、土地の守り神の産土（うぶすながみ）神が祀られ，村の氏神と意識されていました。『肥後国上益城郡神社明細帳』には、南三箇に「日下神社、荒人神社、水天神社」と記載されています。この荒人神社が三賀神社です。天神森が三賀神社に合祀されています。

平成 28 年（2016）熊本地震により被災しましたが、地元の方々によって修復されています。

祭日は 11 月 2 日です。

156. 南三箇水天宮（所在　南三箇区）

荒人神社から約 100㍍東の南三箇公民館の横にあります。

慶応４年（1868）に建立された石室の水天宮です。水天宮とは、水と子供を守護し、水難除けの信仰で、漁業、海運、農業、水商売、また安産、子授け、子育てなど広く厚く信仰されています。

祭神は不明で、祭日は３月 15 日です。

157. 南三箇観音堂（所在　南三箇区）

荒人神社から約 70㍍西にあります。

切妻造瓦葺妻入コンクリートブロック造のお堂は、間口 162㌢、奥行 120㌢、高さ 192㌢で、中の厨子は間口 65㌢、奥行 35㌢、高さ 85㌢です。菩薩像は総高 59㌢、像高 36㌢の木造十一面観音菩薩坐像が祀られています。舟形光背を負い、彩色されていたと思われますが、現在は剥落し、左手が持つ花瓶と頭部正面の阿弥陀如来の化仏（けぶつ）等が欠落しています。横には、仏像であったと思われる木の塊があります。

祭日は 11 月 18 日です。

158. 南三箇阿弥陀堂（所在　南三箇区）

荒人神社から約 300㍍南の山裾にあります。

切妻造瓦葺平入のお堂は、間口 210㌢、奥行 183㌢です。中には蓮華座に総高 76㌢、像高 40㌢で、両手で定印を結ぶ木製阿弥陀如来坐像が祀られています。頭頂の肉髻（にくけい）は消失しており、白毫（びゃくごう）（眉間の珠）も破損しています。定印とは、「心静かに精神を集中している」ことを象徴する印契（いんげい）で、阿弥陀の定印は、両手掌を仰いで右手を上に重ね、両人差し指を立てて相背け、両親指をその端に横たえています。

本町では円福寺跡阿弥陀如来坐像（町指定文化財）や田代の阿弥陀如来像等が定印を結んでいます。

159. 南三箇六地蔵（所在　南三箇区）

南三箇区南側の山裾にあります。

この六地蔵は、享保 17 年（1732）の建立で、破損箇所の少ないものです。総高 340㌢の内、土台が 40㌢、基礎が 20㌢、幢身が 115㌢あります。

碑文には「當邑信善男子許多人合志再興之」また、正面には「三界萬霊有無二縁等」と刻まれています。

村の男性が志を合わせて世にあるあらゆる霊を供養するために六地蔵を再建立したものです。

平成 28 年（2016）の熊本地震により倒壊しましたが、区の人々により再建されました。

160. 明神堂（所在　南三箇区）

荒人神社からフルーツロードに向うと、左手の土手上にあります。

お堂の正面の額には「日下（くさか）大明神」と記されています。

日本姓氏語源辞典には、久佐賀は「日下の異形。日下部氏の後裔と伝える。」とあります。「久佐賀」の姓は全国的には珍しいようですが、南三箇区には一番多くある姓で、その由緒等は不明です。日下大明神は久佐賀の氏神を祀る神社と思われます。

161. 南三箇大平観音、水神（所在　南三箇区）

熊本南カントリークラブの中にあります。

ゴルフ場の一角には、神木と共に三基の石碑が並んでいます。その一つの石室には、嘉永２年（1849）に建立された石造十一面観音菩薩立像が祀られています。

この大平観音の横には、水を湛（たた）えた大平堤があります。この堤は江戸時代末期の三賀村（現在の南三箇区）で、重い年貢に苦しみながらもそれを乗り越えた村人たちの歴史そのものなのです。収穫を感謝すると共に再び決壊しないようにと堤防上に建立されたのが、この大平十一面観音です。その後も昭和から平成に至るまで改修が続けられました。南三箇区の歴史と重なるのが大平堤であり、大平観音です。

なお、大平観音はゴルフ場内にあり、通常は見学できません。

162. 中山の板碑（所在　中山区）

県道今吉野甲佐線沿いの中山入口看板近くの公園化された一角に移転されています。

安山岩製で高さ 87㌢、最大幅 58㌢、最大厚 18㌢です。上部に阿弥陀如来の種子が彫られており、下部に「道廣禅定門／奉造立石塔一基／妙香禅定尼／干時天文十四己酉年十月十八日」と刻まれています。道廣禅定門・妙香禅定尼夫婦が天文 14 年（1545）10 月 18 日に建立した逆修供養板碑です。

天文 14 年（1545）より 2 年前の天文 12 年（1543）には阿蘇惟前が阿蘇惟豊に攻められ、堅志田城（美里町・国史跡）が落ち、惟前は八代の相良長唯のもとに身を寄せています。この頃は、矢部大宮司に味方する衆（もしゅう）と呼ばれる小武士団との争いが激化した時期と考えられます。このような時代背景で建立された生前供養塔です。

163. 中山菅原神社（所在　中山区）

中山公民館の約 30㍍北東にあります。

本殿には間口 70㌢、奥行 45㌢、高さ 100㌢の観音開き戸の厨子があり、中には木造坐像二体が祀られています。右は像高 32㌢、幅 20㌢の菅原道真で、左は像高 27㌢、幅 20㌢の女神です。二体は高さ 6㌢の同一台座に祀られています。

『国郡一統志』によると、中山村に「天神　地蔵」との記載があります。「天神」は中山菅原神社と思われます。建立時期は不明ですが、現在の社殿は掲示物から平成 13 年（2001）に再建されています。また、平成 28 年（2016）熊本地震により被災しましたが、地元の方々によって修復されています。

祭日は 11 月 5 日に宮座が行われています。

164. 中山むさしさん（所在　中山区）

中山菅原神社境内の御神木の根元にあります。

高さ 70㌢、最大幅 40㌢の自然石が祀られています。名前や由来、建立時期等については地元の方もご存知ないそうです。「中山菅原神社の祭日（11 月 5 日）には、6 人分のご飯と水を供えている」とのことです。

165. 中山地蔵堂（所在　中山区）

中山公民館より約50㍍南西の道路脇にあります。

切妻造鋼板葺平入のお堂は、建立時期は不明ですが、堂内の棟板によると、元々は現在地よりも約15㍍南の舞妓橋近くにあったものを道路改修に伴い、堂内の棟板によると平成12年（2000）に現在地に移設再建されています。

お堂内には三体の仏像が祀られており、中央は総高53㌢、像高41㌢の木造地蔵菩薩立像です。右手に持っている錫杖は、上部の錫輪部が欠損しています。右は高さ46㌢、幅23㌢、奥行20㌢の石造仏像で、像名や作成時期等は不明です。左は総高50㌢、像高35㌢、台座6㌢の舟形光背を負う石造千手観音菩薩立像で、作成時期等は不明です。

166. 中山横穴群（所在　中山区）

中山区内を東西に流れる錦郷川に架かる、威竜橋と道免橋間の右岸崖面にあります。

正式な調査が実施されていないため詳細は不明ですが、横穴は阿蘇溶結凝灰岩の崖面に掘り込まれており、高さ1.5㍍、奥行２～３㍍で正面奥と左右両側の屍床（ししょう）に遺体が安置されていたと考えられます。

作成時期は古墳時代後期～終末期の今から1,400～1,500年前と推定されます。

この横穴群は隣接する天ノ平横穴群（てんのひらよこあなぐん）（熊本市南区城南町）へと連なっています。また、周囲では県道今吉野甲佐線道路工事に伴う発掘調査（平成17～20年）で旧石器時代から平安時代の住居跡や石器、縄文土器等の様々な遺物が確認されました。

167. 中山錦川遺跡（所在　中山区）

本遺跡は県道今吉野甲佐線緊急地方道路整備事業に伴って、平成17年（2005）６月から平成20年（2008）３月に熊本県教育委員会によって発掘調査が実施されました。

発掘調査の結果、縄文時代の調理痕跡と思われる屋外炉や集石遺構（しゅうせきいこう）、狩猟に使用した落とし穴が確認されました。また、古墳時代の集落跡も確認され、乙女台地の崖面に造られた中山横穴墓群を築いた人々の集落の可能性が考えられます。さらに、奈良時代から平安時代の集落も確認されており、近隣に陣内廃寺（じんないはいじ）（熊本市南区城南町）があることから、陣内廃寺に関連する集落と考えられます。

168. 津志田菅原神社（所在　津志田区）

津志田区の鶴地区にあります。

本殿は流造トタン葺で、拝殿は入母屋造平入です。厨子は間口35㌢、奥行22㌢、高さ64㌢で、両開きの扉がつき、屋根の中央に梅の紋様があります。中には、総高25㌢、最大幅28㌢で、黒・青等で彩色された男神像が祀られており、衣に梅の紋様があることから、菅原道真と思われます。

祭日は10月14日です。

169. 津志田地蔵尊（所在　津志田区）

津志田菅原神社から約100㍍西にあります。石室の中には、高さ58㌢、幅32㌢、厚さ15㌢の台石に、高さ49㌢の陽刻された石造地蔵菩薩立像が祀られています。地蔵の右側には、宝暦9年（1759）と刻まれています。

170. 乙女山　光現寺（所在　津志田区）

宗派は浄土真宗本願寺派で、本尊は阿弥陀如来です。

入母屋造瓦葺妻入の本堂と切妻造瓦葺の山門と入母屋造瓦葺の鐘楼があります。

『甲佐町史』によると、元は乙女山城主北小左衛門友清の末子の鶴之助が慶円と号し、その後七代の孫慶伝が寛文元年（1661）に現在の地に一宇を建立し、光現寺と号した、とあります。また、境内の北家墓所には、初代住職の慶円の無縫塔（むほうとう）と墓誌塔があります。

なお、『新甲佐町史』によると、貞享元年（1684）開基とあります。

171. 津志田八幡宮（所在　津志田区）

津志田区の字男山にあります。

承平５年（935）に橘能貞（たちばなよしさだ）が国家鎮護のため、男山八幡宮（おとこやまはちまんぐう）（京都府石清水（男山）八幡宮）の分霊を甲佐町種子川（場所不明）に建立しました。その後、平治元年（1159）に鎮西八郎為朝（ちんぜいはちろうためとも）が「八幡宮」の額縁を奉納し、本殿を現在地に移し、地名を「男山」と呼ぶようになったとされています。さらに寛永元年（1624）11 月に加藤忠広の命により三宅角左衛門（みやけかくざえもん）が社殿を再興し、明治 31 年（1898）に改築されています。

平成 28 年（2016）熊本地震で本殿が被災し、修復されました。祭日は 10 月 15 日で、祭礼には南三箇区、中山区の氏子も参加します。

また、境内には菅原神社があります。この神社は、正保２年（1645）に八幡宮の約 50㍍西の天神山（現在は男山の一部）に建立され、菅原道真が祀られました。明治の初めに氏子の希望により現在地に移されています。祭日は 11 月 11 日です。

さらに、昭和 45 年（1970）10 月に熊本県緑化推進保存木に指定された「津志田八幡宮の楠」もあります。この楠は樹齢 350 年以上と推定されています。

172. 津志田地蔵尊（宮坂地蔵）（所在　津志田区）

津志田八幡宮鳥居の手前にあります。

石室は高さ 121㌢、幅 46㌢で、中には、高さ 62㌢の石造地蔵菩薩立像が祀られています。石室には「元治元年（1864）子　七月吉日　宮林／中／古小路」と刻まれています。

元々、津志田八幡宮から田んぼへ下る坂道にあったことから、「宮坂地蔵」と呼ばれています。

昭和 40 年代頃までは、７月 24 日に地域の子ども達による地蔵まつりが行われていました。

173. 長興寺（ちょうこうじ）薬師堂と熊野座神社（所在　津志田区）

乙女小学校から約 400㍍北東にあります。

長興寺地区の山手に薬師堂と熊野座神社を合祀しています。

左は薬師堂で、厨子は間口 95㌢、奥行 45㌢、高さ 106㌢で、中には総高 60㌢、台座 15㌢の木造薬師如来坐像が祀られています。更に 27 ～ 40㌢の木造立像が十体と、像高 47㌢と 37㌢の十二神将と思われる木造坐像が祀られています。右の厨子は熊野座神社で、元は近くの山中にありましたが、平成 28 年（2016）熊本地震により社が傾いたため、このお堂に移転されたものです。厨子は五室分あり、各室に一体の神像が祀られています。

174. 長興寺跡の宝塔群（所在　津志田区）

長興寺薬師堂と熊野座神社の堂内に二基の宝塔塔身があります。

共に阿蘇溶結凝灰岩製で、右は高さ 49㌢、最大幅 29㌢、左は高さ 36㌢、最大幅 27㌢です。それぞれ四方の仏龕に四方仏の種子が刻まれています。四方仏は金剛界四仏で、宝塔の形態から 14 世紀半ば頃の建立と考えられます。

175. 津志田のなまず塚（所在　津志田区）

津志田河川自然公園から約 500㍍北西の個人宅裏手の塚の上にあります。

幅 43㌢、奥行 36㌢、屋根幅 95㌢の石室は高さ 40㌢、幅 90㌢、奥行 80㌢の石製土台上に設置されています。中には木板材で造られた鳥居が祀られています。

なまず塚には大なまずの話があり『ふるさと民話第二集　甲佐のむかしばなし』の中に「なまず塚のはなし」が載っています。また、『肥後国誌』には「ヒナイ神」と記載されています。

176. 田口彌城天神（所在　上田口区）

県道宇土甲佐線の津志田区と上田口区の境となる岩元地区にあります。

石室は全体の高さは 195㌢、台座は 43㌢、石室部分の間口 60㌢、奥行 45㌢、屋根の最大幅は 92㌢です。中の天神は石造男神坐像で総高 57㌢、像高 45㌢で、座っている丸い石に「八彌天神」と刻まれています。また、石室の脇に置かれた石碑の「文政５年（1822）陽無月」は三月の別名の「雛月」の当て字と思われます。『肥後国上益城郡神社明細帳』には、「田口上出口彌城神社」とあります。

祭日は 12 月 1 日です。

177. 上田口不動尊堂（所在　上田口区）

田口彌城神社の傍にあります。

ブロック積の瓦屋根切妻造平入のお堂で、片屋根の厨子があります。中には台座８㌢、像高 37㌢の赤や青で彩色された木造不動明王立像が祀られています。不動明王は赤や青で彩色されていたようで、赤い炎の光背を負い、右腕は欠損しています。

祭りは１月 28 日です。以前は約 25 軒で守ってきましたが、近年は住民も減少し 12 軒となり、２軒の受け元が持ち回りで地元のお寺から住職を招き、お酒とお茶を供えているとのことです。

178. 田口菅原神社（所在　上田口区）

上田口区の西側に位置し、五色山（ごしきやま）の山裾にあります。

祭神は菅原道真、配神は阿蘇十二社、北宮四座です。

『肥後国誌』には「天満宮祭り 10 月 25 日社記に云、村上帝天徳２年（958）肥前、肥後、筑前、筑後の国肥後守源師信当国益城郡乙女山（五色山）に一宇を建て菅霊を祀る」と記されています。

神社の裏手は五色山（乙女山）と呼ばれ、永正 14 年（1517）から天文 19 年（1550）までの 33 年間にわたり田口弾正という豪族が住んでいたと伝えられる城跡があります。この田口弾正の名にちなみ、一帯を「田口」と呼ぶようになったと伝えられています。

平成 28 年（2016）熊本地震により被災しましたが、地元の方々によって修復されています。

祭日は 10 月 25 日です。

179. 上田口薬師堂（所在　上田口区）

田口菅原神社の拝殿左の階段を下ったところにあります。

切妻造瓦葺平入のお堂は、間口 192㌢、奥行 202㌢です。中には高さ 75㌢、屋根幅 62㌢、間口 48㌢、奥行 20㌢の厨子があり、その中には総高 51㌢、像高 43㌢の円光背を負った金色の木造薬師如来立像が祀られています。左手には薬壺を持っています。

『国郡一統志』には、菅原神社の境内社の一つとして薬師堂が記してあることから、元々は神社の境内にあったものが、明治元年（1868）の神仏分離令により神社の外に移されたものと思われます。

祭日は１月８日です。

180. 法性山（ほっしょうざん）　聞得寺（もんとくじ）（旧：法陛山聞得寺）（所在　下田口区）

宗派は浄土真宗本願寺派で、本尊は阿弥陀如来です。

入母屋造瓦葺妻入の本堂には御拝口があります。

『甲佐町史』によると、寛永元年（1624）（『新甲佐町史』では宝永元年（1704））３月、熊本順正寺塔頭長安寺の二男貞元が、田口に一庵を結んだのが聞得寺の始まりで、嘉永５年（1852）８月には一代僧業の許可を受け、その後、庵を世襲しました。明治10年（1877）８月、永代庵室の公称を得て聞得庵と号しました。同12年(1879)８月寺号公称の許可を得て聞得寺と号した、とあります。

181. 下田口地蔵堂（所在　下田口区）

下田口公民館から約100㍍東にあります。

切妻造瓦葺平入のお堂は、間口162㌢、奥行192㌢で、中には二体の木造地蔵菩薩立像が祀られています。一体は台座が高さ15㌢の蓮華台で、総高87㌢の一木造で両手は欠損しています。もう一体は像高80㌢、幅30㌢で両手両足が欠損しています。

この地蔵尊の製作・建立時期等の詳細については不明です。地蔵堂の横には石碑や石室の屋根石が残っています。

182. 田口小一領（こいちりょう）神社（所在　下田口区）

下田口公民館の横にあります。

入母屋造瓦葺平入の本殿の奥には、ガラスの折り戸があり、中には二体の木造坐像の神像が祀られています。左が男神で総高40㌢、右は女神で総高35㌢、二体は高さ３㌢の畳の台座に鎮座し、和紙の衣を着衣しています。

『肥後国誌』には「小市明神社ノ由来」として「下田口にある叢祠（そうし）なり祭神詳しならず」と記し、祭神は小市郎大納言藤原経家を祀ると言われています。一説では、鎮西八郎為朝が益城郡萬所を甲佐郷に押領されて退去される時に、長子の小一郎に対し、「汝輿ふべきものなし是一領こそ伝ふべき千金なりとて鎧一領譲り与えられし」その名前にちなんで小一郎とも、また「これ一領」が訛って小市郎となったとも伝えられています。

祭日は12月10日です。

183. 下田口観音堂（所在　下田口区）

県道宇土甲佐線と県道御船甲佐線の五差路分岐点から約200㍍南西にあり、六地蔵が同じ境内にあります。

切妻造瓦葺妻入のお堂は、間口284㌢、奥行284㌢で、東向きに建っています。木製の扉の中に総高67㌢、像高43㌢、円光背を負い、左手に蓮の花を持つ木造十一面観音菩薩坐像が祀られています。後世に赤茶・茶色等で彩色されました。

184. 下田口六地蔵（所在　下田口区）

下田口観音堂の境内にあります。

六地蔵の高さは250㌢、龕は58㌢で、陽刻された六体の地蔵は総高16～17㌢、台座は5～9㌢です。

建立時期等は不明ですが、『国郡一統志』に記載されている「下田口の地蔵」であると思われることから、少なくとも17世紀以前に建てられたと考えられます。塔身から読み取れる文字は、「法界萬霊」の文字と塔身に記されている明治36年（1903）再建の文字のみです。

185. 田原（たばる）板碑（所在　田原区）

県道今吉野甲佐線沿いの甲佐町グリーンセンター入口沿いにあります。

板碑は高さ113㌢、最大幅100㌢、最大厚20㌢で、上部に月輪の中に釈迦如来を示すバクの種子を刻み、下部中央に「干時大永五天（1525）乙酉初春吉日」と刻み、複数の法名が彫られていることから、結衆板碑（逆修碑）であることがわかります。

「八代日記」には、大永3年（1523）3月25日阿蘇惟前が挙兵し、4月3日に勢田尾城（堅志田城）を奪い、甲佐に陣取ったと記しています。建立された頃は阿蘇惟豊と惟前の対立が激化していた時期です。村の人たちが日々の平和と安穏を願って建立したものと思われます。

なお、この板碑は甲佐町グリーンセンター造成時に発見され、現在地に移設されました。

186. 田原観音堂（所在　田原区）

田原消防格納庫の脇にあります。

切妻造鋼板葺平入の青く彩色された反り屋根のお堂は、間口 180㌢、奥行 200㌢で、中の厨子は高さ 124㌢、屋根幅 78㌢、間口 51㌢、奥行 49㌢です。中には、総高 74㌢、像高 60㌢の石造十一面観音菩薩立像が祀られています。菩薩像の背面には「嘉永六年（1853）丑年二月」と刻まれています。

以前は 1 月 17 日と 7 月 17 日にお祭りが行われていましたが、現在は 1 月 17 日に持ち回りの当番の方と周辺の方によりお参りが行われています。なお、お堂は県道今吉野甲佐線拡幅工事に伴い、令和 4 年（2022）9 月 8 日現在地へ移転されました。

187. 和田内（わたうち）天神社（所在　和田内区）

和田内公民館の隣にあります。

入母屋造瓦葺平入で本殿と拝殿が一体になっています。入口は道路側にあります。厨子は間口 68㌢、奥行 43㌢、高さ 145㌢、屋根幅 100㌢です。中には台座 23㌢、像高 36㌢の黒・金・緑等に彩色された木造菅原道真坐像が祀られています。

祭日は 11 月 23 日です。

188. 和田内阿弥陀堂（所在　和田内区）

和田内天神社の 100㍍西にあります。

寄棟造瓦葺妻入のお堂は、間口 199㌢、奥行 193㌢で、中の厨子は間口 60㌢、奥行 33㌢、高さ 81㌢です。中には総高 59㌢、像高 46.5㌢、台座は 1.5㌢で舟形光背を負う金色の木造阿弥陀如来立像が祀られています。

189. 山伏塚（やんぼしづか）（所在　和田内区）

和田内区には山伏塚と呼ばれる石碑が二箇所あります。

写真右側は「親」と呼ばれ、和田内天神社より約 200㍍西の個人宅の境界を跨いでいます。玉垣の中には高さ 138㌢の石灯篭があり、竿部には「嘉永二年（1849）四月吉日」と刻まれています。その右には高さ 55㌢の石柱があり、正面に「奉寄進」、左側面に「昭和六年（1931）六月二日」と刻まれています。

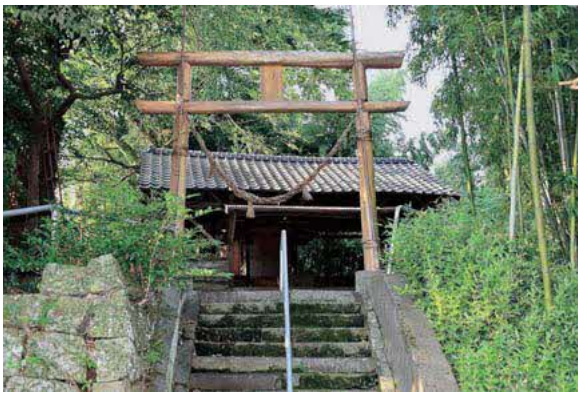
写真左側は「子」と呼ばれ、公民館横の十字路の約 170㍍北の水田角地にあります。高さ 72㌢と 60㌢の二本の石柱が西に向かって建っており、一基には「嘉永二年（1849）四月吉日」と刻まれています。由緒等は不明です。

190. 府領観音堂（旧：府領毘沙門堂）（所在　府領区）

府領公民館の斜め向かいにあります。

切妻造瓦葺平入のお堂は、間口 310㌢、奥行 292㌢です。正面の厨子は間口 74㌢、奥行 48㌢、高さ 116㌢で、中には像高 50㌢、台座 16㌢の木造薬師如来坐像が祀られています。左側の厨子は間口 50㌢、奥行 50㌢、高さ 87㌢で屋根と柱のみで壁はありません。中には総高 60㌢、像高 31㌢の木造十一面観音菩薩坐像が祀られています。右には木造阿弥陀如来坐像が祀られています。仏像とお堂内壁には黒い点が吹き付けたように広がっています。『甲佐町の文化財 第一集』では観音堂ではなく毘沙門天堂となっていますが、現在は毘沙門天はありません。

191. 府領若宮社（所在　府領区）



府領公民館より約 50㍍東にあります。

平成 28 年（2016）熊本地震で倒壊した鳥居に変わって新しい鳥居が再建されました。

厨子の高さは 123㌢、間口 79㌢、奥行 57㌢の中に二体の神像が祀られています。左は像高 37㌢の木造男神坐像で、右は像高 34㌢の木造女神坐像で、朱・緑・青に彩色されています。

祭神は阿蘇若彦神（あそわかひこのかみ）、菅原道真、若姫神で文明５年（1473）の創建です。

平成 28 年（2016）熊本地震により被災しましたが、地元の方々によって修復されています。

192. 府領首塚（所在　府領区）

熊本バス府領バス停より約200㍍北を左折した畑にあります。

縦825㌢、横213㌢、高さ100㌢の塚の周りはコンクリートブロックで囲っています。

天正８年（1580）３月に阿蘇大宮司氏の家臣の隈庄城主甲斐守昌（熊本市南区城南町）は薩摩（鹿児島県）を本拠とする島津氏と手を組み、阿蘇氏に反旗を翻しました。阿蘇惟将の家臣であった御船城主甲斐親直や早川城主早川（渡邊）越前守吉秀、甲佐（松尾）城主伊津野山城守正俊らは、惟将の命を受け、隈庄城を攻めました。これを「舞の原の合戦」といいます。首塚は、この戦いで亡くなった両軍の兵士の亡き骸を埋葬した場所です。

現在でもこの地は「首塚（くびづか）」または「塚畑（つかばたけ）」と呼ばれています。

白　旗　地　区

白旗地区は町の北端の平野部及び山間部に位置します。

白旗の名は、鎮西八郎為朝が立てた白旗、または雁回山から放った白羽の矢に由来するといわれています。中世には、阿蘇大宮司の拠点であった矢部（山都町）から緑川中流域に出てくるための家臣団の拠点として繁栄し、早川城跡をはじめ多くの阿蘇氏関連文化財が認められます。また、円福寺跡阿弥陀如来坐像からは、大日本国西海道肥後州益城郡甘木庄早川村の記載がみられ、当時の地域観を読み取ることができます。

193. 辛崎（からさき）神社（所在　中早川区）

中早川橋上流右岸の階段を上ったところにあります。

入母屋造瓦葺妻入の社殿で、祭神は素戔嗚尊です。社殿の厨子には中央に鏡、左右に神像が祀られています。

境内には高さ48㌢、幅24㌢の石造馬頭観音坐像が祀られています。この馬頭観音像は三面六臂の姿で、正面は合掌し、左側は斧と剣、右側は宝珠と剣を持っています。

建立年及び再建年等は不明ですが、社殿に掲示された木札によると「平成元年（1989）10月２日修理」と記されています。

194. 照月山　浄林寺（所在　早川区）

宗派は浄土真宗大谷派で、本尊は阿弥陀如来です。

本堂は入母屋造瓦葺平入です。

『上益城郡誌』によると、僧順益が寛文５年（1665）７月、熊本市宝町（中央区迎町１丁目）に創建し、宝永６年（1709）寺号を浄林寺と改め、熊本市河原町（中央区河原町）へ移転しましたが、明治10年（1877）２月、西南戦争で焼失しました。そのため、明治44年（1911）に現在地に移転の許可を受け、大正６年（1917）６月に移転したとされています。

195. 養寿院（所在　早川区）

北早川区の山裾にあります。

切妻造瓦葺妻入のお堂で向拝があり、祭壇には三つの厨子が並びます。中央の厨子は高さ90㌢で、総高48㌢の石造不動明王立像と黒く焼けた仏像が、左の厨子には総高45㌢の木造薬師如来坐像、右の厨子には総高34㌢の木造地蔵菩薩坐像が祀られています。

養寿院は早川厳島神社の神宮寺で、『国郡一統志』には「養壽院不動　地蔵」、『肥後国誌』には「禅の古迹ト云早川村三社明神ノ宮寺」と記されています。

196. 養寿院跡の石造物群（所在　早川区）

養寿院の裏に16世紀前半から半ばに建立された三基の無縫塔を含む多くの石造物があります。

この内、主な砂岩製の三基は次のとおりです。①高さ85㌢、最大幅64㌢、最大厚29㌢で、天文３年（1534）９月25日に建てられた漸讀大乗妙典一千部塔です。②高さ64㌢、最大幅46㌢、最大厚16㌢で、養寿院を中興した「天用□□公座元禅師」の預修を行って大永３年（1523）10月20日に建てられた供養塔です。③高さ37㌢、最大幅30㌢で月輪の中に地蔵菩薩を表す「カ」の種子が刻まれ板碑です。

197. 玉堂山　玉祥寺（ぎょくしょうじ）（所在　早川区）

宗派は日蓮宗で、本尊は日蓮聖人図顕の十界大曼陀羅です。

本堂は御拝口のある入母屋造瓦葺妻入で、切妻瓦葺の山門があります。

『甲佐町史』によると、元々、佐賀県小城郡三里村にあったものを、明治30年（1897）12月25日早川下小塚523番地に移籍、明治37年（1904）７月東心敬上人創立となっています。また、初代心敬が玉祥寺の基盤を作り、大正９年（1920年）第三世義照上人の代に現在の地に移転しています。

198. 承陽山　西福寺（さいふくじ）（旧：浄陽山西福寺）（所在　上早川３区）

宗派は浄土真宗本願寺派で、本尊は阿弥陀如来です。

新本堂は入母屋造瓦葺平入で、並列して建つ旧本堂は、寄棟造瓦葺で内陣には鹿里区の釈迦如来像が祀られています。境内には地蔵像二体があります。

『甲佐町史』によると、天正８年（1580）、島津氏（薩摩）と手を組み、阿蘇家に反旗を翻した隈庄城主甲斐守昌と阿蘇惟将家臣の甲斐親直らが争った隈庄合戦で戦死した早川（渡邊）休雲吉久の嫡子の石見守吉行が入道して空円と号し、天正13年（1585）に創立したとあります。

なお、『新甲佐町史』によると、寛永18年（1641）開基とあります。

199. 宮地獄神社（所在　早川区）

玉祥寺から約50㍍北東の階段上にあります。

本殿・拝殿ともに切妻造瓦葺妻入です。本殿内には、屋根幅75㌢、間口46㌢、奥行20㌢、高さ32㌢の木製厨子がありますが、厨子の扉が閉まっており、御神体は不明です。厨子の傍らに直径12㌢の鏡があります。

本殿の扉は通常施錠されています。

200. 早川菅原神社（早川三社）（旧：菅原神社）と早川天神像（所在　早川区）

早川六地蔵（町指定文化財）から山中に約70㍍登った中腹にあります。

拝殿と本殿は切妻造瓦葺平入です。

早川菅原神社は早川三社宮の一つで、『国郡一統志』には、「宮嶋明神　熊野権現　本地堂　弁財天　天神」と記され、『肥後国誌』には、「厳島大明神宮　熊野権現宮　天満宮」とあり、このうち「天神」「天満宮」に比定されます。祭神は菅原道真です。

養寿院下の個人宅には、道真坐像（早川天神像）と随神像の闇神（かどもりのかみ）・看督長（かどおさ）が祀られています。

201. 早川熊野座神社（早川三社）（旧：熊野座神社）（所在　早川区）

早川菅原神社より早川山へ更に約15分登った中腹の杉に囲まれた平坦地にあります。

流造銅板葺平入の本殿は、渡りにてトタン葺平入の拝殿と繋がっています。

祭神は伊邪那岐命、伊邪那美命となっていますが、地元の方によると、「御神体等は厳島神社に祀ってある」とのことでした。本殿の中には、幅80㌢、高さ90㌢、奥行50㌢の木製の厨子が残されており、現在は年に２回社殿周りの掃除が行われています。

『国郡一統志』には熊野権現本地堂弁才天、『肥後国誌』では熊野権現宮、『甲佐手永神社本末』には熊野権現（厳島宮末社）、更に『明治十二年神社明細帳』には村社熊野座神社と紹介されています。地元の人達は早川三社のひとつとして信仰していたようです。

202. 早川の宝篋印塔（旧：早川宝篋印塔）（所在　早川区）

西福寺と薬王寺の中間にある竹林の中にあります。

宝篋印塔は溶結凝灰岩製で、高さ 220㌢、最大幅 65㌢です。標柱には「隈庄合戦で戦死した早川城主・渡辺休雲の墓碑」とされていますが、近年の調査により、塔身には「前念不生即心 / 和山雪心居■（士）/ 後念不滅則佛」、基礎石には「永禄八年（1565）/ 二月十二日也」とあり、「和山雪心居■（士）」の塔であることがわかりました。このことから、本塔の建立が、永禄８年（1565）２月 12 日であり、隈庄合戦は、同年３月 10 日であることから、渡辺一族とみられるものの、渡辺休雲の墓碑ではないようです。

この宝篋印塔の左には板碑様の墓塔、右には五輪塔の残欠など戦国期の石造物が多数みられます。板碑様の墓塔は高さ 63㌢の安山岩製の小塔で、上部に月輪を刻みその中に卍を平彫りし、その下に「天正十四年（1586）/ 爲妙臺大姉之也 / 六月二五日」と銘文を刻んでいます。

203. 長石山　薬王寺（虚鐸山　薬王寺）（旧：薬王寺長石山）（所在　早川区）

宗派は曹洞宗で、本尊は薬師如来と観世音菩薩です。

入母屋造瓦葺の本堂には御拝口があり、境内には瓦葺の山門や「薬王寺の宝篋印塔」（町指定文化財）等の石塔、暁烏敏の石碑もあります。

『甲佐町史』によると、北朝の暦応２年（延元４年）（1339）の薬王寺了性の建立とあります。また、大慈四世当山開祖愚谷常賢大和尚禅師ともあり、定かではありません。また、霊感院（細川重賢）等の名も見られ、由緒深い寺と思われます。しかし、文政６年（1823）には無住となっており、明治以降は堂守さんによって守られてきました。

204. 早川厳島神社（早川三社）（所在　早川区）

国道 443 号線から早川区に入ると、山裾に朱色の鳥居が見えてきます。

本殿は切妻造平入、拝殿は入母屋造平入、主祭神は宗像三女神（田心姫命・湍津姫命・市杵島姫命）で、創建は奈良時代中期の宝亀２年（771）とされています。

『国郡一統志』には「宮嶋明神」、『肥後国誌』には「厳島大明神」と記されております。

境内の案内板によると、大祭は 10 月８日～ 10 日にかけ、早川三社（厳島神社、熊野神社（権現宮）、菅原神社（天神宮））祭りとして行われます。

なお、境内の隅には力士の石像が二体あり、この力士像は江戸相撲の第８代横綱の不知火諾右衛門（宇土市栗崎出身）の活躍を期に寄進されたものです。平成 28 年（2016）熊本地震により被災しましたが、地元の方々によって修復されています。

205. 早川の猿田彦大神（所在　早川区）

早川厳島神社の境内にあります。

嘉永元年（1848）の建立で、高さ 185㌢、最大幅 80㌢、最大厚 30㌢、台座は二段で上段 25㌢、下段 70㌢です。

『新甲佐町史』によると、当初から早川厳島神社の境内に祀られていた、とあります。

206. 北早川菅原神社（所在　北早川区）

北早川区の山裾の丘陵地にあります。

本殿は、切妻造瓦葺妻入です。鳥居は、朱色で山側にあります。

由緒等は『国郡一統志』、『肥後国誌』には記載がなく、『肥後国上益城郡神社明細帳』の「蓮町　菅原神社」を北早川菅原神社に比定できます。以前は、神社の大木で子ども達が遊んでいたようです。

平成 28 年（2016）熊本地震により被災しましたが、地元の方々によって修復されています。

207. 北早川の猿田彦大神（所在　早川区）

熊本バス下早川バス停から集落へ約200㍍の三叉路の個人宅にあります。

文政９年（1826）の建立で、高さ100㌢、最大幅60㌢、最大厚20㌢、台座は32㌢です。左脇には２体の地蔵が祀られています。

町内の猿田彦は19世紀の江戸時代後期から明治にかけて建てられています。北早川の猿田彦大神は、現存するものでは町内で最も早く建立されたものです。

祭日は７月の第１日曜日の川祭りと同日です。

208. 四堂崎（しどうざき）阿弥陀堂（所在　糸田区）

竜野川の右岸四堂崎地区にあります。

阿弥陀堂は、切妻造妻入の拝殿と切妻造平入の本殿で、拝殿天井には、花の絵が描かれています。厨子には格子窓があり、阿弥陀仏と馬頭観音が祀られています。総高52㌢、像高37.5㌢の阿弥陀如来像は放射光背を負い、台座は蓮華台です。

四堂崎は養寿院の境内地で、『肥後国誌』には糸田村内の阿弥陀三尊と古墳墓がある地点を四堂崎と呼び、養寿院跡としています。『拾集昔語（しゅうしゅうせきご）』によれば北早川村の四堂崎辺りは、養寿院の地続きの境内であろうと記しています。

平成28年（2016）熊本地震により被災しましたが、地元の方々によって修復されています。

209. 四堂崎庚申塔（こうしんとう）（所在　糸田区）

四堂崎阿弥陀堂の左脇にあります。

土台はコンクリートで固められ、元の大きさは不明ですが、現在の大きさは高さ63㌢、最大幅37㌢、最大厚24㌢の自然石です。

庚申とは、六十日に一度廻ってくる庚申のことを言い、この日の夜、人が眠ると三尸（さんし）の虫が体内から抜け出して天帝に日頃の罪を告げに行くため、命が縮むとされています。そのため、村の入口に庚申塔を建てて、庚申の夜は座元の家に徹夜で立て籠もり、庚申塔を魔除けにしていました。建立時期等は不明です。

地元の人達は「阿弥陀堂・庚申塔・経塚」を一緒に10月15日に僧侶を招き、供養しています。現在甲佐町にある庚申塔はここだけです。

210. 四堂崎の経塚（所在　糸田区）

四堂崎阿弥陀堂の右側にあります。

経塚は高さ 62㌢、最大幅 27㌢、最大厚 27㌢の砂岩製です。

「天文２年（1533）３月 20 日に玄祐が、大乗妙典一千部を読誦し、その内、六十部を阿弥陀堂の隣に埋めた。」と緒方家文書に記されています。

現在でも一年毎の当番制により、10 月 15 日には僧侶を招き、同境内にある「庚申塔・経塚」と共に供養が行われています。

211. 四堂崎の三尊板碑（所在　糸田区）

四堂崎阿弥陀堂より約 30㍍南の個人宅角地にあります。

板碑は四角形で高さ 78㌢、最大幅 60㌢、最大厚 27㌢の砂岩製です。

碑面には三尊の種子が刻まれており、上部に主尊の阿弥陀（キリ－ク）、下部右には脇侍の観音菩薩（サ）、左には勢至菩薩（サク）が刻まれています。また、記年銘から大永４年（1524）に建立されています。

碑面の剥離が進み、種子や文字が見辛くなっています。

212. 四堂崎逆修碑（旧：四堂崎経塚）（所在　糸田区）

四堂崎阿弥陀堂より約 30㍍南の個人宅敷地内にあります。

板碑は、丸みを帯びた五角形で、高さ 113㌢、幅 130㌢、厚み 34㌢です。碑文によると、建立年は大永５年（1525）で、中央上部には阿弥陀如来像が彫られ、その下には「于時大永五（525）乙酉天十月廿七日」と刻まれています。その右側に「現世安穏（53 名法名）　後生善処」、左側に「逆修善根　功徳主各 53 名法名）」と刻まれています。総勢 106 名の人々によって、現世の安穏と後世（来世）の善処を願い、自らの極楽往生を祈って建立された逆修碑（結衆板碑）です。

『肥後国誌』には、「弥陀ノ三像並古墳墓ノ在ル所ハ四堂崎トテ養壽院ノ廃迹也」と板碑について記してあります。

213. 植木阿蘇神社（所在　糸田区）

糸田区の東側にあります。

神明造平入の本殿は慶長 14 年（1609）の創建とされ、祭神は彦御子神（ひこみこのかみ）と若比咩神（わかひめのかみ）で、祭日は 10 月 9 日です。入母屋造の拝殿には、天井に花が描かれた格子天井があり、絵馬も飾られています。

『緒方家文書（古今集覧、町指定文化財）』には「糸田に氏神無シ、植木ヲ致シ、其所ヲ村ノ明神ト名付ケ」と記され、植木のあった場所を意味すると考えられます。『国郡一統志』には「植木明神」、『肥後国誌』には「植木大明神」と記されています。

平成 28 年（2016）熊本地震により被災しましたが、地元の方々によって修復されています。

214. 観音堂（所在　糸田区）

上糸田地区にあります。

切妻造瓦葺平入のお堂は、間口 402㌢、奥行 490㌢、向拝 200㌢です。中には 2 つの木製厨子があり、中央の厨子は間口 59㌢、奥行 30㌢、高さ 120㌢で、総高 83㌢、像高 63㌢の円光背を負い、朱・金で彩色された木造十一面観音菩薩立像が祀られています。台座は蓮華台です。

右の厨子は間口 56㌢、奥行 34㌢、高さ 125㌢で、総高 85㌢、像高 65㌢の左手には蓮の花を持つ木造観音菩薩立像が祀られています。左には厨子はなく、台座 30㌢の上に像高 50㌢の石像坐像が祀られています。

215. 糸田の板碑（所在　糸田区）

糸田観音堂の境内にあります。

上部の月輪内に阿弥陀如来の種子「キリーク」があり、その下には「道玄信男／逆修善根主／妙玄信女／旹天正十九年（1591）辛卯七月二日」と彫ってあります。

緒方家文書（古今集覧）には、

「一、此道玄信男ハ、糸田邑庄鶴ノ名主、浪人俗名緒方監物ト云

一、此妙玄信女ハ、佐渡越前守ノ息女也（略）右監物夫婦死去年月不知、法名勿論不知」

とあります。その後子孫が夫婦の亡くなった年月等を考えてこの逆修碑を建てたと記しています。

216. 糸田の猿田彦大神（所在　糸田区）

糸田公民館前にあります。

天保 13 年（1842）の建立で、高さ 160㌢、最大幅 65㌢、最大厚 30㌢、台座は二段で上段 35㌢、下段 40㌢です。

右脇には養蚕神が祀られています。

祭日は 9 月 17 日の子ども相撲と一緒に行われます。

217. 糸田水神（所在　糸田区）

熊本バス糸田バス停下（緑川右岸）のグラウンドの端にあります。

水神は、縦 180㌢、横 198㌢の石造の玉垣の中に祀られています。中には、高さ 70㌢、幅 26㌢、厚さ 23㌢の「水神明王」と刻まれた石碑があり、緑川に向かって建っています。

糸田水神の両脇には巨木があり、左は幹回り 350㌢のエノキ、右は幹回り 420㌢のケヤキです。

218. 垣原水神（柿原水神）（所在　辺場区）

白旗小学校の約 300㍍北の水路沿いにあります。

一辺が 114㌢と 118㌢の石造の玉垣の中に自然石が祀られています。

加藤清正の治水工事にあたり、垣（柿）原孫三郎鎮基（しげもと）が普請奉行として活躍、工事の際に水神を祀ったが、彼の死後村人が「垣（柿）原水神」として、特に牛馬の守護神として尊びました。

この水神は、『肥後国上益城郡神社明細帳』に「水神社」と記されています。

平成 28 年（2016）熊本地震により被災しましたが、地元の方々によって修復されています。

219. 辺場阿弥陀堂（所在　辺場区）

辺場公民館より約30㍍西にあります。

お堂は間口214㌢、奥行205㌢、高さ190㌢で、像高67㌢、総高95㌢、台座は二段で12㌢と15㌢の輪光背を負い、印を結んだ木造阿弥陀如来立像が、その横には古い仏像も祀られています。

言い伝えによると、加藤清正が緑川改修の際、川の要衝（ようしょう）毎に阿弥陀堂を置いたとされています。平成28年（2016）熊本地震により被災しましたが、地元の方々によって修復されています。

祭日は1日と15日です。

220. 金戸水神（火の神）（所在　辺場区）

辺場公民館裏の道路沿いにあります。

石造の玉垣は高さ97㌢、一辺が150～160㌢でコの字に三辺を囲っています。中には高さ65㌢、幅40㌢、厚さ10㌢の「水神」と刻まれた自然石が御神体として祀られています。

言い伝えによると、八代で大火事があった時、空中を飛んできて、辺場に鎮座されたとのことです。

地元では、『かなどうさん』と呼んでいます。また、「御神体は堂宇を造らず風雨にさらすべし、そうすれば火事になかるべし」として、“火ぶせの神”として村人の信仰を集め、以後、辺場には火事がないと言われています。

平成28年（2016）熊本地震により被災しましたが、地元の方々によって修復されています。

221. 古閑菅原神社（所在　古閑区）

古閑公民館と同じ敷地内にあります。

本殿は流造銅板葺平入、拝殿は入母屋造瓦葺平入で祭神は菅原道真です。本殿中には間口80㌢、奥行45㌢、高さ130㌢の厨子があり、中には二体の神像が祀られています。左は台座が8㌢、像高50㌢、幅40㌢の胸に梅の文様の衣を着衣した菅原道真像です。右は台座6㌢、像高26㌢の木造女神坐像です。

元は辺場の小高い丘に住む人々により守られていましたが、加藤清正の河川改修により現在地に移設されました。

また、拝殿の左には台座120㌢、高さ180㌢の石碑があり、碑文には「寛文十年（1670）南無天満大自在天神　七月吉日」と記されています。平成28年（2016）熊本地震により被災しましたが、地元の方々によって修復されています。

222. 古閑の墓碑（所在　古閑区）

白旗橋から古閑区へ入り、約130㍍北の県道御船甲佐線沿いにあります。

砂岩製で高さ114㌢、最大幅71㌢、最大厚28㌢です。銘文から元禄４年（1691）11月12日に大武山真興寺を中興した「宇□」の墓碑であることがわかります。

法名に釈号が使用されていることから、真興寺は浄土真宗の寺院と考えられます。

223. 宝珠山　光西寺（所在　古閑区）

宗派は浄土真宗本願寺派で、本尊は阿弥陀如来です。

瓦葺寄棟の本堂には御拝口があります。

『肥後国誌』によると、阿蘇大宮司惟種の家臣の寺尾市蔵の子である了尊が甲佐郷山出村宝珠山の麓に一宇を建立し、光西寺の寺号公称の許可を得た、とあります。『新甲佐町史』によると、承応３年（1654）開基とあります。

現在の光西寺は東福寺と合併したもので、『東福寺記』によると、東福寺は白旗村大字白旗にあった白旗山東福寺で、本尊が阿弥陀仏で、もとは天台宗で源為朝の建立になる祈願所であったとされています。明治12年（1889年）７月25日に東福寺と称し、大正９年（1920年）12月に両寺合併により光西寺と改称しています。

224. 八丁神社（所在　八丁区）

八丁公民館の隣にあります。

本殿は切妻造銅板葺平入、拝殿は切妻造瓦葺平入です。本殿内には厨子が二つあり、右の厨子は間口78㌢、奥行54㌢、高さ170㌢の木造両開きで、中には像高50㌢、台座24㌢の木造天神坐像が祀られています。左側の厨子は間口80㌢、奥行56㌢、高さ175㌢で、中には像高が55㌢、台座24㌢の木造天神坐像が祀られています。天神の衣は金・朱・青等で彩色されていて胸に梅が描かれています。

元は北鶴という場所にありましたが、天和３年（1683）に現在の地に移転したいと公儀（こうぎ）へ願い出たと伝えられています。

225. 八丁十一面観音堂（旧：八丁観音堂）（所在　八丁区）

八丁神社から約 50㍍北にあります。

入母屋造瓦葺妻入のお堂は、間口 224㌢、奥行 284㌢で東向きに建っています。中には、総高 112㌢、像高 75㌢、丸太の台座が 30㌢、蓮華台が 7㌢の木造十一面観音菩薩立像が祀られ、衣は金色に彩色され、左手の蓮の花は消失していますが、阿弥陀如来の化仏と十一面観音は残っています。両脇には、布袋像と木造地蔵菩薩像が祀られています。

226. 八丁十一面観音堂の石造物群（所在　八丁区）

八丁十一面観音堂前の池の周りに板碑が四基、灯篭一基、五輪塔の各部石材（空風輪四基、火輪六基、水輪一基）があります。

四基の板碑は全て砂岩製で、この内建立年が確認できるものは一基で、高さ 75㌢、最大幅 41.5㌢、最大厚 574㌢で、上部の月輪内に卍が刻まれ、中央には「松屋栄秀」その両側に「永禄十三（1570）（下部土中）、左に「四月九日」とあります。その他三基は 16 世紀半ばから後半の建立と推定され、次の通りです。①高さ 101㌢、最大幅 52㌢、最大厚 25㌢で、蓮座の上の月輪内に釈迦如来を表す種子「バク」が刻まれています。②高さ 75㌢、最大幅 41.5㌢、最大厚 57㌢で、上部の月輪内に阿弥陀如来の種子「キリーク」が刻まれています。③高さ 62㌢、最大幅 30㌢、最大厚 41㌢で、上部の月輪内に大日如来の種子「ア」が刻まれています。

また、灯篭は凝灰岩製で竿部正面に「奉寄進」、右側面に「明治九年（1876）五月建」、左側面に「世話人 / 小山田仙七 / 小山田善吉」、裏面に「小山田遊船敬」とあります。

227. 八丁の板碑（所在　八丁区）

八丁十一面観音堂から約 50 m北東の個人宅（伝小山田本家跡）にあります。

高さ 73㌢、最大幅 27㌢、最大厚 19㌢の砂岩製です。上部の月輪内に阿弥陀如来の種子「キリーク」の文字が刻まれています。板碑中央には「道光」とあり、右側面には「小山田家祖先 / 美濃守墓 / 天文十六年（1547）二月六日也」の追刻銘がみられます。なお、同所には五輪塔の残欠も多くみられます。

228. 山出六地蔵（所在　山出区）

県道嘉島甲佐線の山出区入口にあります。

山出六地蔵は、塔身が円柱形の宮崎県でよく見られる形状です。高さは250㌢、台座の部分は、享保２年（1717）に補修されました。

地蔵塔は、室町初期のころから各地に建立された地蔵信仰の塔で、仏教では人間は六道の世界で生まれ変わると考えられ、その輪廻を救済するのが地蔵菩薩です。横には、法界萬霊塔（ほうかばんれいとう）があります。

平成28年（2016）熊本地震で倒壊しましたが、地元の方々により復旧されています。

229. 山出神社（大武宮）（所在　山出区）

山出公民館の前にあります。

本殿はトタン葺、拝殿は入母屋造瓦葺平入で向拝があります。本殿の奥には、高さ64㌢、最大幅52.5㌢の木製台座上に直径24㌢の阿蘇社を表す違い鷹羽の紋が入った鏡が祀られています。

御祭神は天照皇大神、健角身命（たけつのみのみこと）、八井耳玉命、住吉大神、天児屋根命（あまのこやねのみこと）、応神天皇、健磐龍命です。

鎮西八郎為朝が雁回山に住んでいた時、矢が落ちた所に自分が崇敬する神を祀ろうと祈り、白羽の矢を放ち、落ちたところを白旗山と称し、その山の西の麓に社殿を建て為朝の七柱を祀り「大武宮（おおたけぐう）」と称したとされます。

平成28年（2016）熊本地震により被災しましたが、地元の方々によって修復されています。

230. 山出板碑（所在　山出区）

山出神社の鳥居の傍らにあります。

高さ約73㌢、幅約84㌢、厚さ約８㌢で、上部の月輪には、阿弥陀如来（キリーク）と釈迦如来（バク）を表す種子、下部には霊月妙龍、妙訓の名が刻まれています。碑文の銘文には「天文十九年（1550）四月十六日に山出神社の神宮寺である大應寺住職の節山善忠が無縫塔一基を建立した」由縁を述べています。また板碑の横には無縫塔の一部があります。

231. 魚住源次兵衛碑（所在　山出区）

山出神社の約 300㍍北東の山裾にあります。

本名を勤（いそし）といい、文化 14 年（1817）生まれの熊本藩士です。弘化 4 年（1847）鉄砲頭となり、嘉永 6 年（1853）アメリカ東インド艦隊司令長官ペリーが軍艦四隻を率いて浦賀に来航した際に、藩命により浦賀の警備についています。

肥後勤王党の穏健派の中心人物で藩論を勤王に統一しようとした建白書を藩主に提出しています。

明治 13 年（1880）9 月 16 日に 64 歳で死去しました。

232. 園田神社（古神社）（所在　山出区）

山出区にある園田神社は、民家の敷地に建っています。

切妻造瓦葺妻入のお堂には、室町時代前期と伝えられる男神像と女神像が祀られています。

園田神社は通称「こがみさん」と呼ばれ、天正（1573 ～ 1592）の頃、薩摩島津氏への内通者と疑われた井芹一族七十余人が討たれた歴史を忘れないため、昭和 9 年（1934）に建立されました。また、七十余人の霊魂を慰める記念碑も山出区にあり、毎年 2 月 15 日に供養が行われています。

233. 山出薬師堂（所在　山出区）

山出神社から約 400㍍北東にあります。

入母屋造瓦葺平入のお堂は、間口 376㌢、奥行 284㌢で、格子扉の中の厨子には総高 70㌢、像高 58㌢、台座 12㌢の蓮華台に金彩色の木造薬師如来坐像が祀られています。

この地区は、古くは「薬師村」、「城村」と呼ばれ、村の守り仏として薬師如来を祀り、病や苦しみを癒やしたといいます。

祭日は 9 月 28 日です。

234. 芝原厳島神社（所在　芝原区）

芝原区のほぼ中央にあります。

切妻造瓦葺平入の拝殿正面には、梅の紋があります。本殿内には３つの厨子があり、中央の厨子は間口 73㌢、奥行 60㌢、高さ 129㌢の両扉で、中央に総高 35㌢、幅 35㌢の木造男神坐像、右に総高 24㌢の木造女神坐像、左に総高 17㌢の随神坐像が祀られています。右の厨子は間口 49㌢、奥行 50㌢、高さ 100㌢で、左に総高 15㌢の女神像、右には総高 15㌢の男神像が祀られています。左の厨子は右側と同じ大きさで、左は総高 18㌢の男神坐像、右は総高 21㌢の女神坐像で彩色してあります。

神社敷地隅には三体のお面があり、赤は火の神、白は風の神、青は水の神といわれています。

平成 28 年（2016）熊本地震により被災しましたが、地元の方々によって修復されています。

235. 芝原のキリーク種子板碑（所在　芝原区）

芝原厳島神社の約 70㍍南の墓地内にあります。

高さ 97㌢、幅 80㌢、最大厚 27㌢の安山岩製で下部左側は抉（えぐ）れています。上部の月輪内に阿弥陀如来を表す種子「キリーク」の文字が薬研彫りされ、その下に蓮座を刻み、月輪の下に花弁の一部がはみ出しています。その下には「預修」や「頓證（土中）」、「宿植徳本 / 善苗秀水 / 月弧妙圓」、「旹永禄元年（1558）十（土中）」の銘文があります。

このことから、宿植徳本らによる逆修供養を行ったものと思われます。

236. 芝原のウン種子板碑（所在　芝原区）

芝原のキリーク種子板碑から約 40㍍南東の個人宅にあります。

高さ 70㌢、幅 60㌢、最大厚 20㌢、直径 190㌢の砂岩製でブロックで円形に囲まれています。上部の月輪内に愛染明王や軍荼利明王などの種子「ウン」の文字が刻まれています。その下には「道休禅門／□休禅尼」とあり、更に文字が記されてますが、判読できません。また、板碑の右側には２行の銘文があり、左側には紀年銘が刻まれているが、どちらも摩滅して判読できません。

この板碑の戒名から、夫婦による逆修供養を行ったものと思われます。この板碑は、種子にやや力強さが欠けることから、16 世紀半ば頃の建立と思われます。

237. 吉田神社（所在　吉田区）

吉田区集落の南側にあります。

本殿は切妻造銅板葺平入、拝殿は入母屋造瓦葺平入です。

厨子は三つあり、正面の厨子は間口 79㌢、奥行 38㌢、高さ 112㌢です。中には二体の木造坐像が祀られており、左は総高 56㌢の男神像、右は総高 45㌢女神像です。

右の厨子は間口 62.5㌢、奥行 39㌢、高さ 97㌢です。中には左に高さ 23㌢の木造男神像、右は高さ 24㌢の木造女神像で、二体とも梅模様の衣を着ています。左の厨子も右と同じ大きさです。中には木造男神像が二体祀られています。左は高さ 40㌢、上が青色、下は濃い緑の衣を着ています。右は高さ 40㌢、桐と菊の紋が入った桃色の衣を着ています。

吉田区は加藤清正の河川改修の後、新しい地域として誕生しました。その際、新しく神社も創建され、ご神体に菅原道真を祀り、年 1 回（12 月 10 日前後）衣替えが行われます。

平成 28 年（2016）熊本地震により被災しましたが、地元の方々によって修復されています。

種類別指定文化財一覧表　令和７年３月 31 日現在

区分	国指定	町指定	合計
天然記念物	1		1
史跡	1	4	5
建造物		3	3
彫刻		3	3
古文書		1	1
歴史資料		5	5
合計	2	16	18

指定文化財一覧表　令和７年３月 31 日現在

国　指　定

種　別	名　称	指定年月日
天然記念物	麻生原のキンモクセイ	昭和　9.12.28 昭和 53.12.27（追加指定）
史跡	陣ノ内城跡	令和　3.10.11

町　指　定

種　別	名　称	指定年月日
建造物	早川六地蔵	昭和 55. 2.23
建造物	鵜ノ瀬堰	昭和 56. 3.22
建造物	簗の樋門	平成 14. 4.25
彫刻	円福寺跡阿弥陀如来坐像	昭和 56. 3.22
彫刻	目野薬師如来及び十二神将像	昭和 56. 3.22
彫刻	木造如来形坐像	昭和 58. 3.10
古文書	緒方家文書	平成 14. 4.25
歴史資料	緑川上流通漕碑	平成 22. 1. 1
歴史資料	下豊内の逆修碑	平成 22. 1. 1
歴史資料	薬王寺の宝篋印塔	平成 22. 1. 1
歴史資料	津志田の逆修碑	平成 22. 1. 1
歴史資料	豪淳の碑	令和　1.11. 1
史跡	陣ノ内城跡	昭和 55. 2.23
史跡	船津東前横穴群	昭和 55. 2.23
史跡	早川城	昭和 55. 2.23
史跡	松尾城跡	昭和 58. 3.10

【テーマ別索引】

テーマ	文化財名称	番号	地区	行 政 区	ページ
古墳	船津東前横穴群	町 2	乙女	船津	9
	下豊内横穴群	57	甲佐	下豊内	50
	麻生原塔ノ木さん古墳（旧：麻生原塔ノ古墳）	147	乙女	麻生原	86
	中山横穴群	166	乙女	中山	92
遺跡	大峯遺跡	108	竜野	上早川２区	69
	船津支石墓（ドルメン）	132	乙女	船津	81
	世持・石佛遺跡と世持・道免遺跡	148	乙女	世持	86
	中山錦川遺跡	167	乙女	中山	92
城郭	史跡 陣ノ内城跡	国 2	甲佐	下豊内	4
	陣ノ内城跡（旧：陣内館跡）	町 1	甲佐	下豊内	9
	早川城跡	町 3	白旗	早川	10
	松尾城跡	町 8	甲佐	上豊内	15
石塔	薬王寺の宝篋印塔	町 14	白旗	早川	21
	西原の宝塔	10	宮内	西原	30
	四方仏（旧：上豊内四方仏）	49	甲佐	上豊内	47
	八角塔（旧：清正公供養塔）	74	甲佐	横田	55
	迫の大乗妙典一部石塔	130	乙女	船津	80
	虚空蔵菩薩（こくんぞさん）	152	乙女	世持	87
	長興寺跡の宝塔群	174	乙女	津志田	95
	早川の宝篋印塔（旧：早川宝篋印塔）	202	白旗	早川	108
	四堂崎庚申搭	209	白旗	糸田	110
板碑	下豊内の逆修碑（旧：供養塔（逆修碑））	町 13	甲佐	下豊内	20
	津志田の逆修碑（旧：津志田板碑）	町 15	乙女	津志田	22
	豪淳の碑	町 16	宮内	上揚	23
	上揚の板碑	24	宮内	上揚	36
	神宮寺住職の板碑	29	宮内	上揚	38
	白石板碑	35	甲佐	東寒野	42
	法念寺跡の板碑	52	甲佐	上豊内	48
	大町の板碑	70	甲佐	大町	54
	目野の石造物	82	竜野	中横田	61
	下横田の石造物	92	竜野	下横田	64
	城平板碑	113	竜野	上早川２区	71
	船津磨崖五輪塔と磨崖板碑	126	乙女	船津	79
	中山の板碑	162	乙女	中山	91
	田原板碑	185	乙女	田原	98
	四堂崎の経塚	210	白旗	糸田	111
	四堂崎の三尊板碑	211	白旗	糸田	111
	四堂崎逆修碑（旧：四堂崎経塚）	212	白旗	糸田	111
	糸田の板碑	215	白旗	糸田	112
	八丁十一面観音堂の石造物群	226	白旗	八丁	116

テーマ	文化財名称	番号	地区	行 政 区	ページ
板碑	八丁の板碑	227	白旗	八丁	116
	山出板碑	230	白旗	山出	117
	芝原のキリーク種子板碑	235	白旗	芝原	119
	芝原のウン種子板碑	236	白旗	芝原	119
墓塔等	井芹経平先生生誕の地記念碑	62	甲佐	岩下１区	51
	田上氏里の碑	72	甲佐	横田	55
	木原寿八郎の碑（旧：木原寿八郎碑）	87	竜野	中横田	62
	伝承阿蘇惟前墓	122	竜野	上早川４区	74
	麻生原金八（水神）	146	乙女	麻生原	85
	中山むさしさん	164	乙女	中山	91
	山伏塚	189	乙女	和田内	100
	府領首塚	192	乙女	府領	101
	養寿院跡の石造物群	196	白旗	早川	106
	古閑の墓碑	222	白旗	古閑	115
	魚住源次兵衛碑	231	白旗	山出	118
古文書	緒方家文書	町 10	白旗	糸田	17
六地蔵	早川六地蔵	町 4	白旗	早川	11
	小川島六地蔵	43	甲佐	西寒野	45
	とくどうさん	59	甲佐	下豊内	50
	下横田六地蔵	96	竜野	下横田	65
	船津六地蔵	131	乙女	船津	80
	南三箇六地蔵	159	乙女	南三箇	90
	下田口六地蔵	184	乙女	下田口	98
	山出六地蔵	228	白旗	山出	117
猿田彦大神	井戸江の猿田彦大神	14	宮内	井戸江	31
	安平の猿田彦大神	21	宮内	安平	33
	上揚の猿田彦大神	27	宮内	上揚	37
	尾北の猿田彦大神	30	甲佐	東寒野	41
	千才丸の猿田彦大神	40	甲佐	西寒野	44
	西の猿田彦大神	42	甲佐	西寒野	45
	小川島の猿田彦大神	44	甲佐	西寒野	45
	上豊内の猿田彦大神	46	甲佐	上豊内	46
	仁田子の猿田彦大神	68	甲佐	仁田子	53
	横田の猿田彦大神	78	甲佐	横田	57
	有安の猿田彦大神	80	甲佐	有安	57
	宇佐園の猿田彦大神と明治 45 年洪水記念碑	91	竜野	下横田	64
	田代の猿田彦大神	103	竜野	上早川１区	68
	下知行の猿田彦大神	116	竜野	上早川３区	72
	山口の猿田彦大神	134	乙女	船津	81
	船津の猿田彦大神	136	乙女	船津	82

テーマ	文化財名称	番号	地区	行 政 区	ページ
猿田彦大神	麻生原の猿田彦大神	142	乙女	麻生原	84
	早川の猿田彦大神	205	白旗	早川	109
	北早川の猿田彦大神	207	白旗	北早川	110
	糸田の猿田彦大神	216	白旗	糸田	113
石橋	広瀬旧道眼鏡橋	1	宮内	広瀬	27
	御手洗橋	19	宮内	安平	33
	尾北眼鏡橋	31	甲佐	東寒野	41
	堂迫眼鏡橋	36	甲佐	東寒野	43
	大祇眼鏡橋	38	甲佐	西寒野	43
土木遺産	鵜ノ瀬堰	町 5	甲佐	上豊内	12
	簗の樋門	町 11	甲佐	上豊内	18
	緑川上流通漕碑	町 12	宮内	上揚	19
	小鹿の堤	12	宮内	小鹿	30
	やな場（旧：上豊内やな）	47	甲佐	上豊内	46
	下豊内新井手隧道	58	甲佐	下豊内	50
	甲佐井手（大井手）	66	甲佐	緑町	53
	新井手（上井手）と清正公山地蔵尊	75	甲佐	横田	56
産業遺産	トロッコ林道の鉄橋	2	宮内	広瀬	27
	金山	6	宮内	本坂谷	28
	緑川製糸場跡記念碑	48	甲佐	上豊内	47
祠	上揚弁財天	23	宮内	上揚	36
	稲荷大明神	53	甲佐	下豊内	48
	田代歳神	101	竜野	上早川１区	67
	大谷歳神	105	竜野	上早川１区	68
	上知行の天神社	114	竜野	上早川３区	71
	小原山ノ神	120	竜野	上早川４区	73
	世持沢水池	149	乙女	世持	86
	南三箇水天宮	156	乙女	南三箇	89
	津志田のなまず塚	175	乙女	津志田	95
	田口彌城天神	176	乙女	上田口	95
神社	本坂谷天満宮	5	宮内	本坂谷	28
	西原荒神	11	宮内	西原	30
	大王神社	13	宮内	小鹿	31
	甲佐大明神降坐之碑	17	宮内	安平	32
	石の間臥（旧：石ノ間伏）	18	宮内	安平	32
	御手洗神社	20	宮内	安平	33
	甲佐神社	22	宮内	上揚	34
	日枝神社（山の神）	26	宮内	上揚	37
	大祇神社	37	甲佐	西寒野	43
	玉造神社（旧：西宮八幡宮）	50	甲佐	上豊内	47

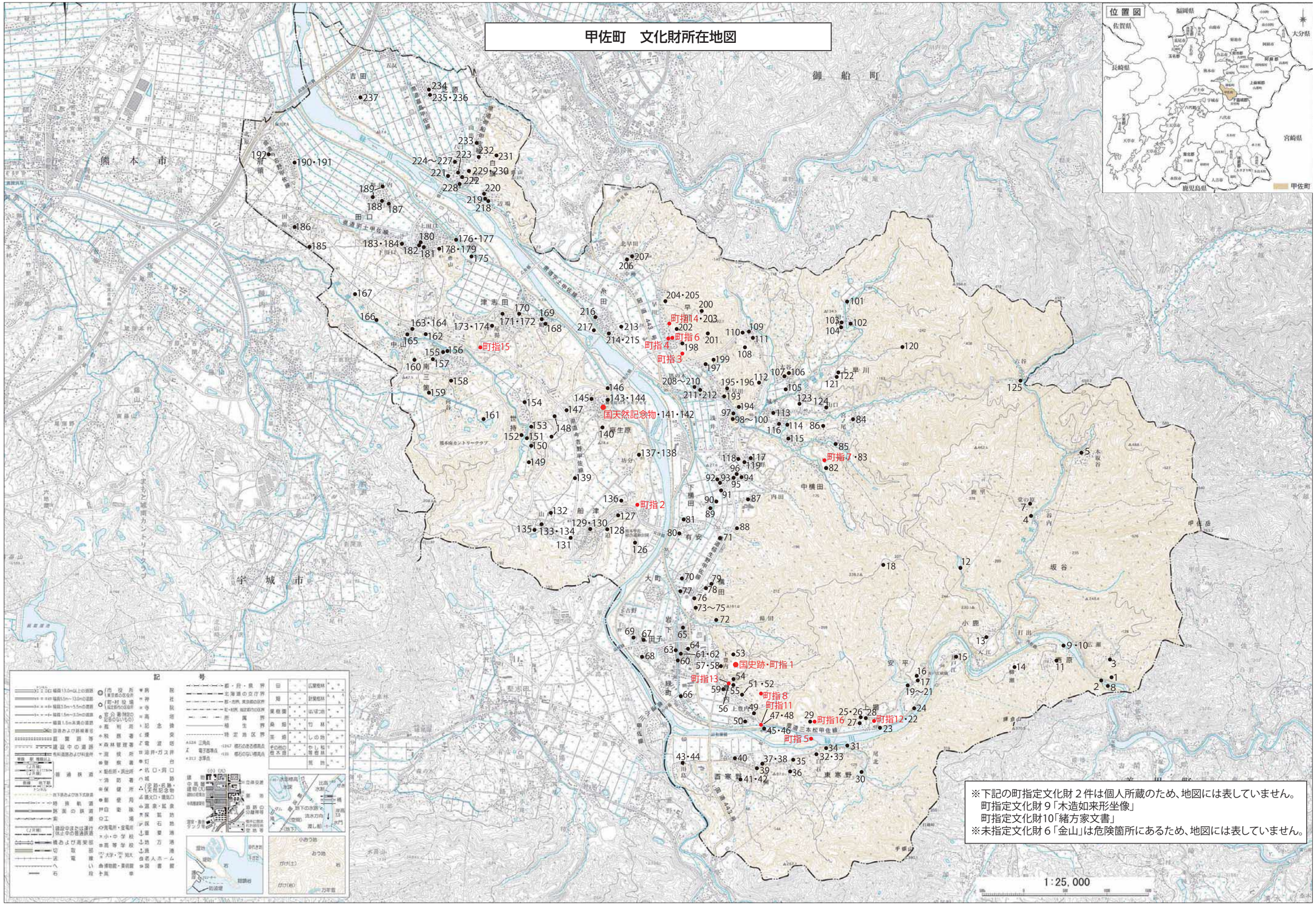
テーマ	文化財名称	番号	地区	行 政 区	ページ
神社	恵比寿神社	61	甲佐	岩下１区	51
	仁田子菅原神社	69	甲佐	仁田子	54
	立岩神社	71	甲佐	大町	54
	岩鼻神社	73	甲佐	横田	55
	若一王神社	86	竜野	中横田	62
	下横田天神社	89	竜野	下横田	63
	御崎大明神	93	竜野	下横田	64
	祇園社	94	竜野	下横田	65
	若宮神社	98	竜野	浅井	66
	日吉神社（将軍堂）	99	竜野	浅井	66
	浅井猿王権現堂	100	竜野	浅井	67
	大峯菅原神社（旧：大峰菅原神社）	109	竜野	上早川２区	70
	海陸大明神	118	竜野	上早川３区	73
	山上神社	135	乙女	船津	82
	船津阿蘇神社	137	乙女	船津	82
	麻生原菅原神社	140	乙女	麻生原	83
	麻生原伊勢堂	144	乙女	麻生原	85
	麻生原天神社	145	乙女	麻生原	85
	世持妙見社	151	乙女	世持	87
	世持天神社	153	乙女	世持	88
	荒人神社（旧：三箇神社）	155	乙女	南三箇	88
	明神堂	160	乙女	南三箇	90
	中山菅原神社	163	乙女	中山	91
	津志田菅原神社	168	乙女	津志田	93
	津志田八幡宮	171	乙女	津志田	94
	田口菅原神社	178	乙女	上田口	96
	田口小一領神社	182	乙女	下田口	97
	和田内天神社	187	乙女	和田内	99
	府領若宮社	191	乙女	府領	100
	辛崎神社	193	白旗	中早川	105
	宮地獄神社	199	白旗	早川	107
	早川菅原神社（早川三社）（旧：菅原神社）と早川天神像	200	白旗	早川	107
	早川熊野座神社（早川三社）（旧：熊野座神社）	201	白旗	早川	107
	早川厳島神社（早川三社）	204	白旗	早川	109
	北早川菅原神社	206	白旗	北早川	109
	植木阿蘇神社	213	白旗	糸田	112
	古閑菅原神社	221	白旗	古閑	114
	八丁神社	224	白旗	八丁	115
	山出神社（大武宮）	229	白旗	山出	117

テーマ	文化財名称	番号	地区	行 政 区	ページ
神社	園田神社（古神社）	232	白旗	山出	118
	芝原厳島神社	234	白旗	芝原	119
	吉田神社	237	白旗	吉田	120
水神	糸田水神	217	白旗	糸田	113
	垣原水神（柿原水神）	218	白旗	辺場	113
	金戸水神（火の神）	220	白旗	辺場	114
仏堂	広瀬阿弥陀堂	3	宮内	広瀬	27
	谷内阿弥陀如来像	4	宮内	谷内	28
	堂ノ原観音堂	7	宮内	堂ノ原	29
	西原薬師堂	9	宮内	西原	29
	井戸江地蔵堂	15	宮内	井戸江	31
	安平阿弥陀堂	16	宮内	安平	32
	上揚仁王堂	25	宮内	上揚	36
	上揚観音堂（旧：上揚阿弥陀堂）	28	宮内	上揚	37
	永明寺阿弥陀堂	33	甲佐	東寒野	42
	東寒野地蔵尊	34	甲佐	東寒野	42
	宮園地蔵尊	39	甲佐	西寒野	44
	西の観音菩薩	41	甲佐	西寒野	44
	鵜ノ瀬堰観音菩薩	45	甲佐	上豊内	46
	上豊内阿弥陀堂	51	甲佐	上豊内	48
	下豊内薬師堂	54	甲佐	下豊内	49
	下豊内釈迦堂	55	甲佐	下豊内	49
	下豊内阿弥陀堂	56	甲佐	下豊内	49
	甲南橋地蔵（旧：岩下地蔵尊）	60	甲佐	岩下１区	51
	岩下地蔵堂	65	甲佐	岩下２区	52
	仁田子地蔵尊	67	甲佐	仁田子	53
	横田観世音堂	76	甲佐	横田	56
	横田地蔵堂	79	甲佐	横田	57
	宮野観音堂	84	竜野	中横田	61
	中尾釈迦堂	85	竜野	中横田	62
	中横田阿弥陀堂	88	竜野	中横田	63
	九折阿弥陀堂	95	竜野	下横田	65
	浅井観音堂	97	竜野	浅井	66
	田代阿弥陀堂	102	竜野	上早川１区	67
	田代地蔵	104	竜野	上早川１区	68
	大谷観音堂	106	竜野	上早川１区	69
	大峯地蔵尊	110	竜野	上早川２区	70
	大峯馬頭観音（旧：大峰馬頭観音）	111	竜野	上早川２区	70
	下大峯の観音堂（四方仏）	112	竜野	上早川２区	71
	上知行薬師堂	115	竜野	上早川３区	72

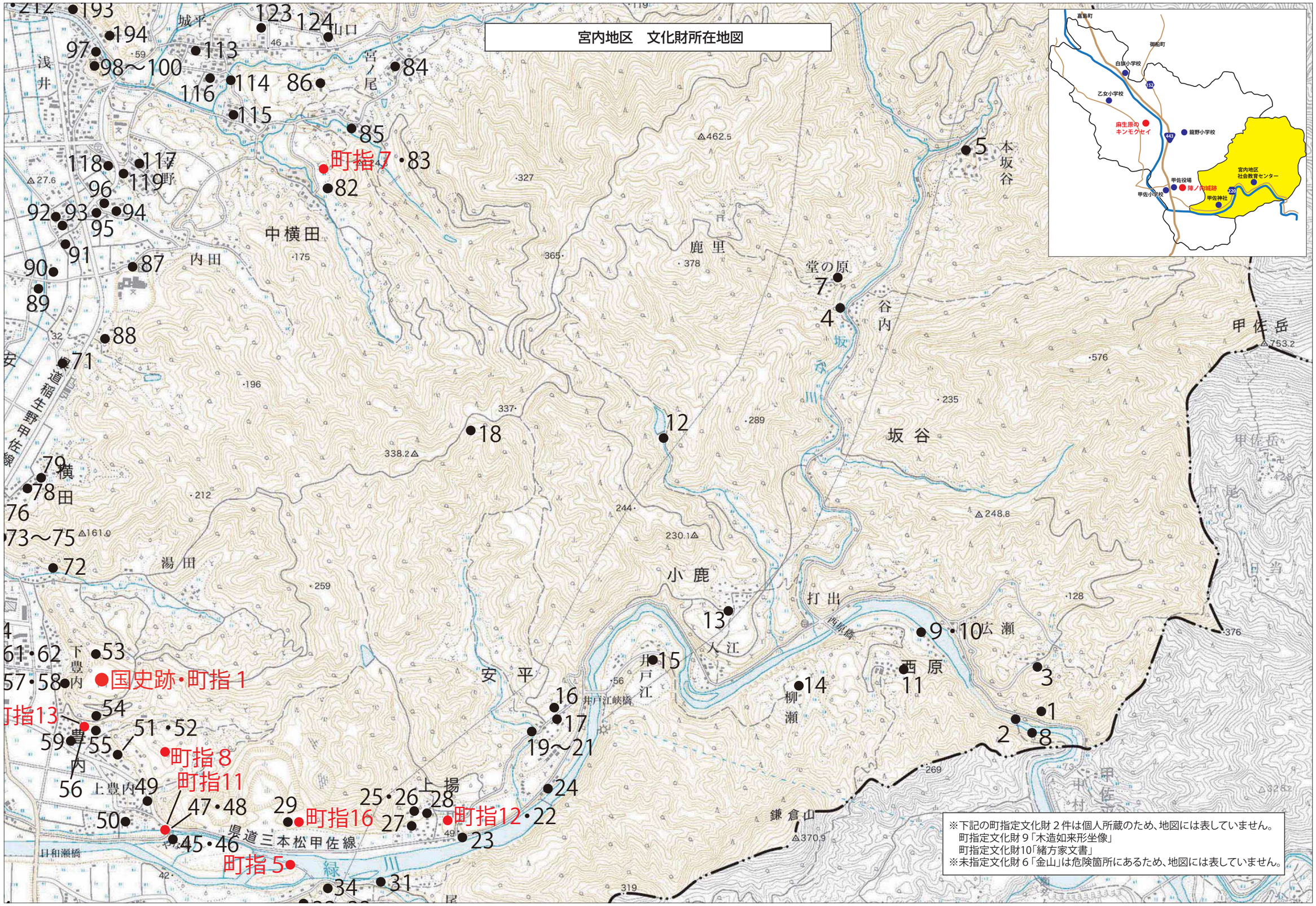
テーマ	文化財名称	番号	地区	行 政 区	ページ
仏堂	幸野の地蔵堂	117	竜野	上早川３区	72
	小原観音堂	121	竜野	上早川４区	74
	大原地蔵堂	123	竜野	上早川４区	74
	山口観音堂	124	竜野	上早川４区	75
	六谷地蔵尊	125	竜野	上早川５区	75
	谷の観音堂	127	乙女	船津	79
	船津地蔵堂	128	乙女	船津	79
	船津観音堂	129	乙女	船津	80
	山口薬師堂	133	乙女	船津	81
	船津仏像堂	138	乙女	船津	83
	桜地蔵	139	乙女	船津	83
	麻生原観音堂	141	乙女	麻生原	84
	世持地蔵堂	150	乙女	世持	87
	世持地蔵尊	154	乙女	世持	88
	南三箇観音堂	157	乙女	南三箇	89
	南三箇阿弥陀堂	158	乙女	南三箇	89
	南三箇大平観音、水神	161	乙女	南三箇	90
	中山地蔵堂	165	乙女	中山	92
	津志田地蔵尊	169	乙女	津志田	93
	津志田地蔵尊（宮坂地蔵）	172	乙女	津志田	94
	長興寺薬師堂と熊野座神社	173	乙女	津志田	94
	上田口不動尊堂	177	乙女	上田口	96
	上田口薬師堂	179	乙女	上田口	96
	下田口地蔵堂	181	乙女	下田口	97
	下田口観音堂	183	乙女	下田口	98
	田原観音堂	186	乙女	田原	99
	和田内阿弥陀堂	188	乙女	和田内	99
	府領観音堂（旧：府領毘沙門堂）	190	乙女	府領	100
	養寿院	195	白旗	早川	105
	四堂崎阿弥陀堂	208	白旗	糸田	110
	観音堂	214	白旗	糸田	112
	辺場阿弥陀堂	219	白旗	辺場	114
	八丁十一面観音堂（旧：八丁観音堂）	225	白旗	八丁	116
	山出薬師堂	233	白旗	山出	118
寺院	白象山 永明寺（旧：永明寺）	32	甲佐	東寒野	41
	天理教熊明分教会	63	甲佐	岩下１区	52
	光縁山 教栄寺	64	甲佐	岩下１区	52
	長楽山 正宗寺	77	甲佐	横田	56
	有水山 正法寺	81	甲佐	有安	58
	清涼山 寿専寺（旧：清涼山寿専寺）	90	竜野	下横田	63

テーマ	文化財名称	番号	地区	行 政 区	ページ
寺院	光明山 皓月寺	107	竜野	上早川１区	69
	光明山 青蓮寺	143	乙女	麻生原	84
	乙女山 光現寺	170	乙女	津志田	93
	法性山 聞得寺（旧：法陛山聞得寺）	180	乙女	下田口	97
	照月山 浄林寺	194	白旗	早川	105
	玉堂山 玉祥寺	197	白旗	早川	106
	承陽山 西福寺（旧：浄陽山西福寺）	198	白旗	早川	106
	長石山 薬王寺（虚鐸山薬王寺）（旧:薬王寺長石山）	203	白旗	早川	108
	宝珠山 光西寺	223	白旗	古閑	115
仏像	円福寺跡阿弥陀如来坐像	町６	白旗	早川	13
	目野薬師如来及び十二神将像（旧:目野薬師堂）	町７	竜野	中横田	14
	木造如来形坐像	町９	宮内	上揚	16
天然記念物	天然記念物 麻生原のキンモクセイ	国１	乙女	麻生原	2
	ミグマタイト	8	宮内	西原	29
	カワベニマダラ	83	竜野	中横田	61
	清水の遊水池	119	竜野	上早川３区	73

甲佐町　文化財所在地図

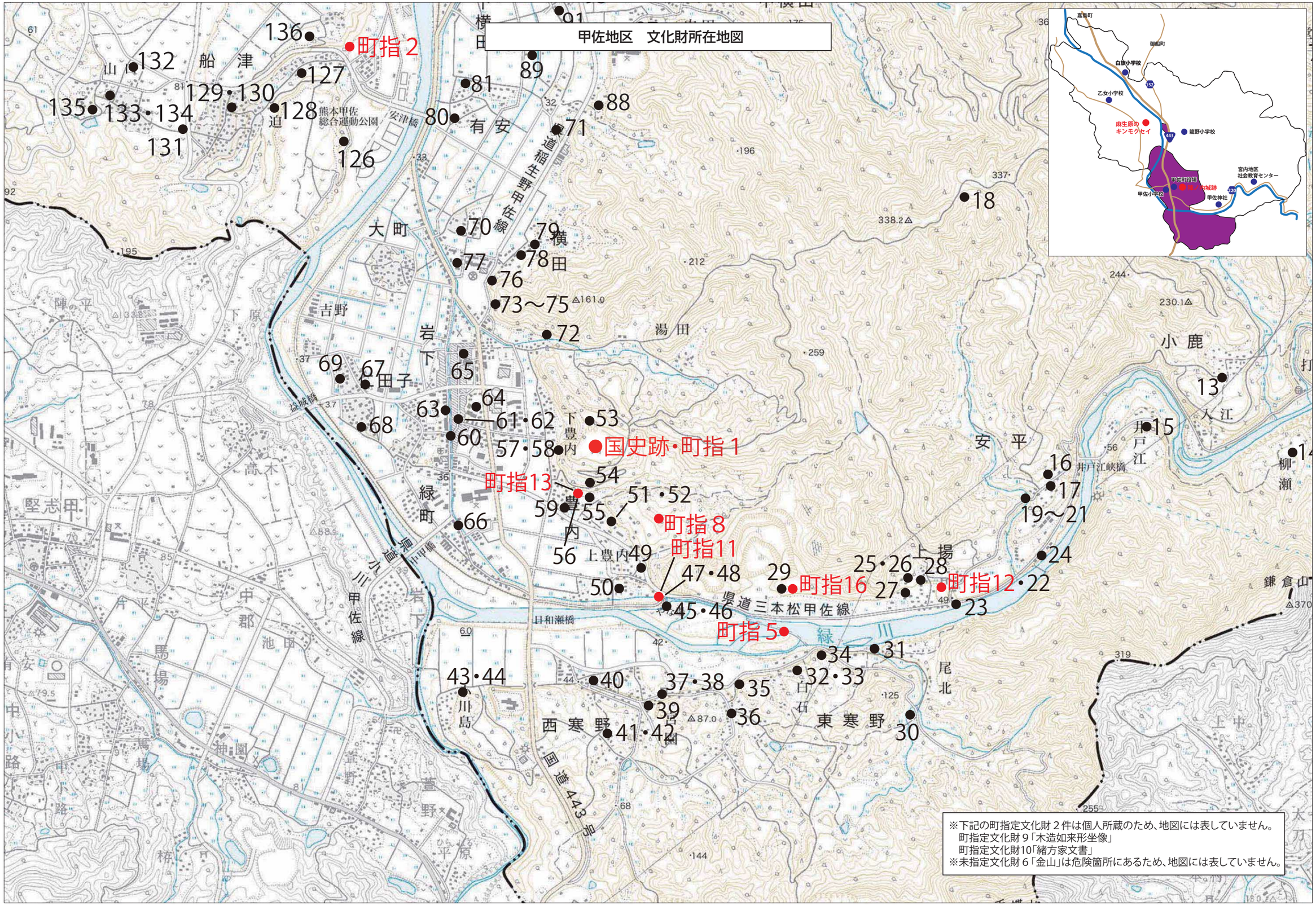

位置図
福岡県
佐賀県
長崎県
大分県
宮崎県
鹿児島県
甲佐町
熊本市
宇城市
御船町
国史跡・町指1
国天然記念物・141・142
町指2
町指3
町指4
町指6
町指7・83
町指13
町指14・203
町指15
町指16
町指11
町指8
町指12・22
町指5
※下記の町指定文化財２件は個人所蔵のため、地図には表していません。
町指定文化財９「木造如来形坐像」
町指定文化財10「緒方家文書」
※未指定文化財６「金山」は危険箇所にあるため、地図には表していません。
1:25,000

宮内地区　文化財所在地図

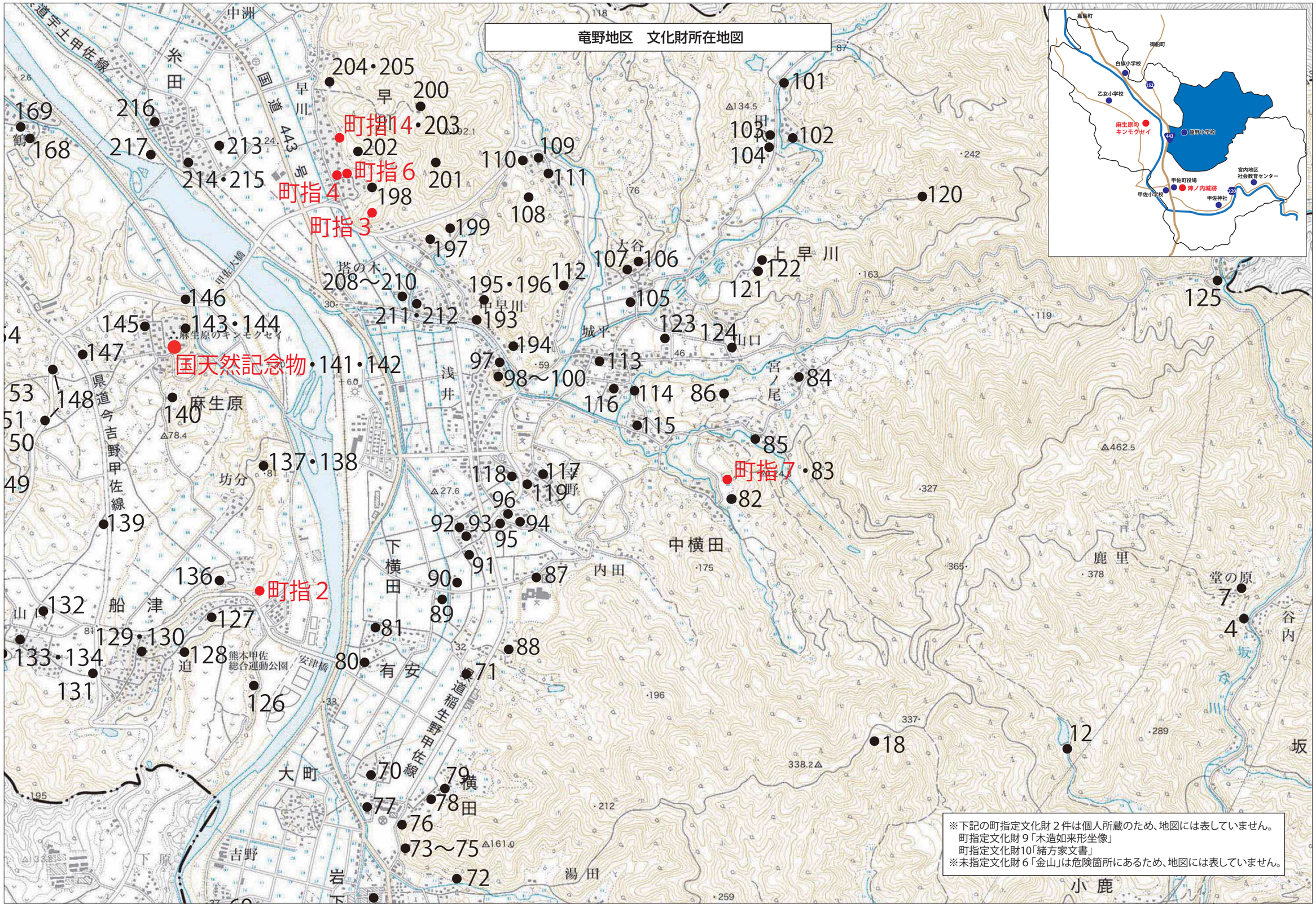


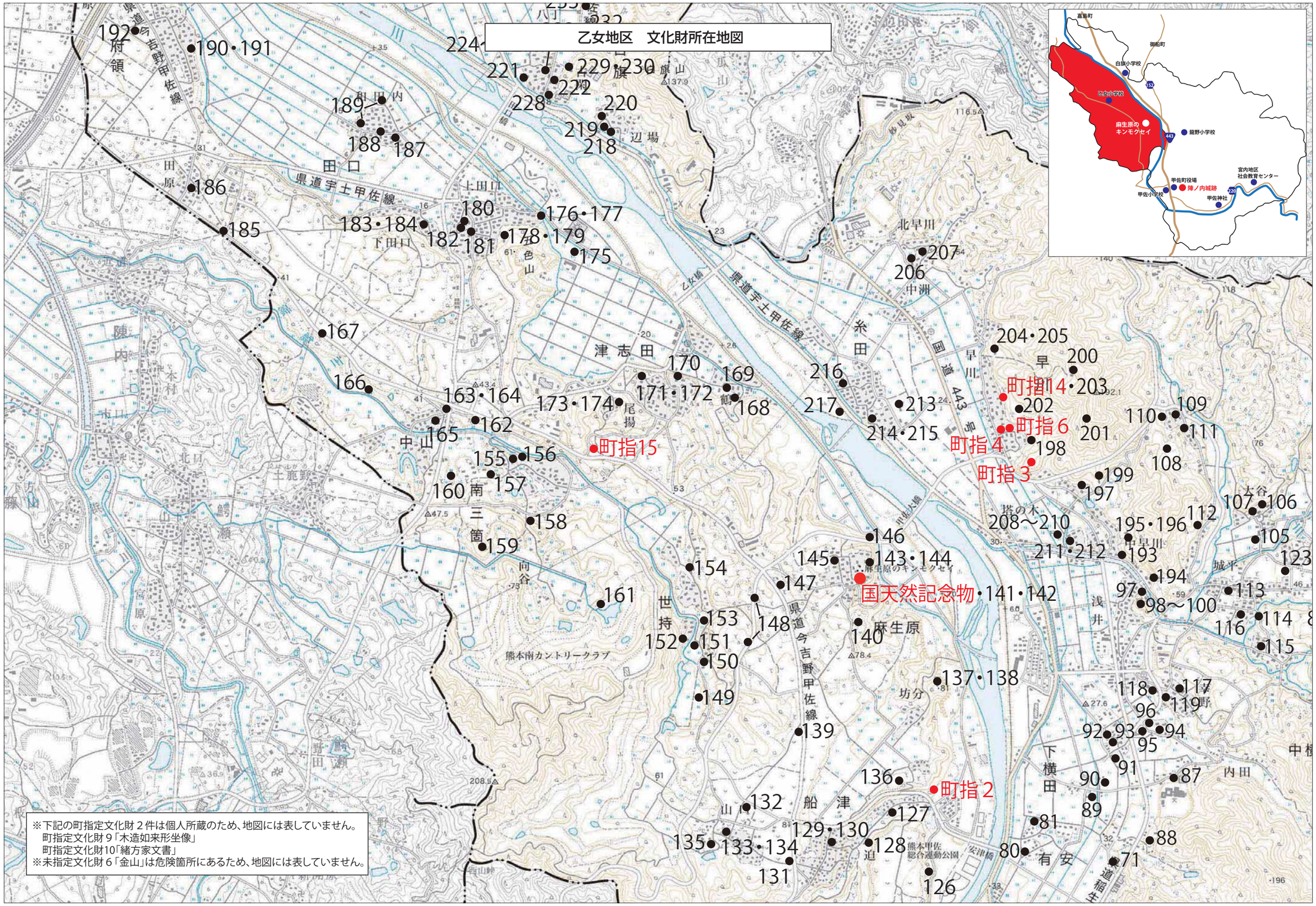
※下記の町指定文化財２件は個人所蔵のため、地図には表していません。
町指定文化財９「木造如来形坐像」
町指定文化財10「緒方家文書」
※未指定文化財６「金山」は危険箇所にあるため、地図には表していません。

甲佐地区　文化財所在地図

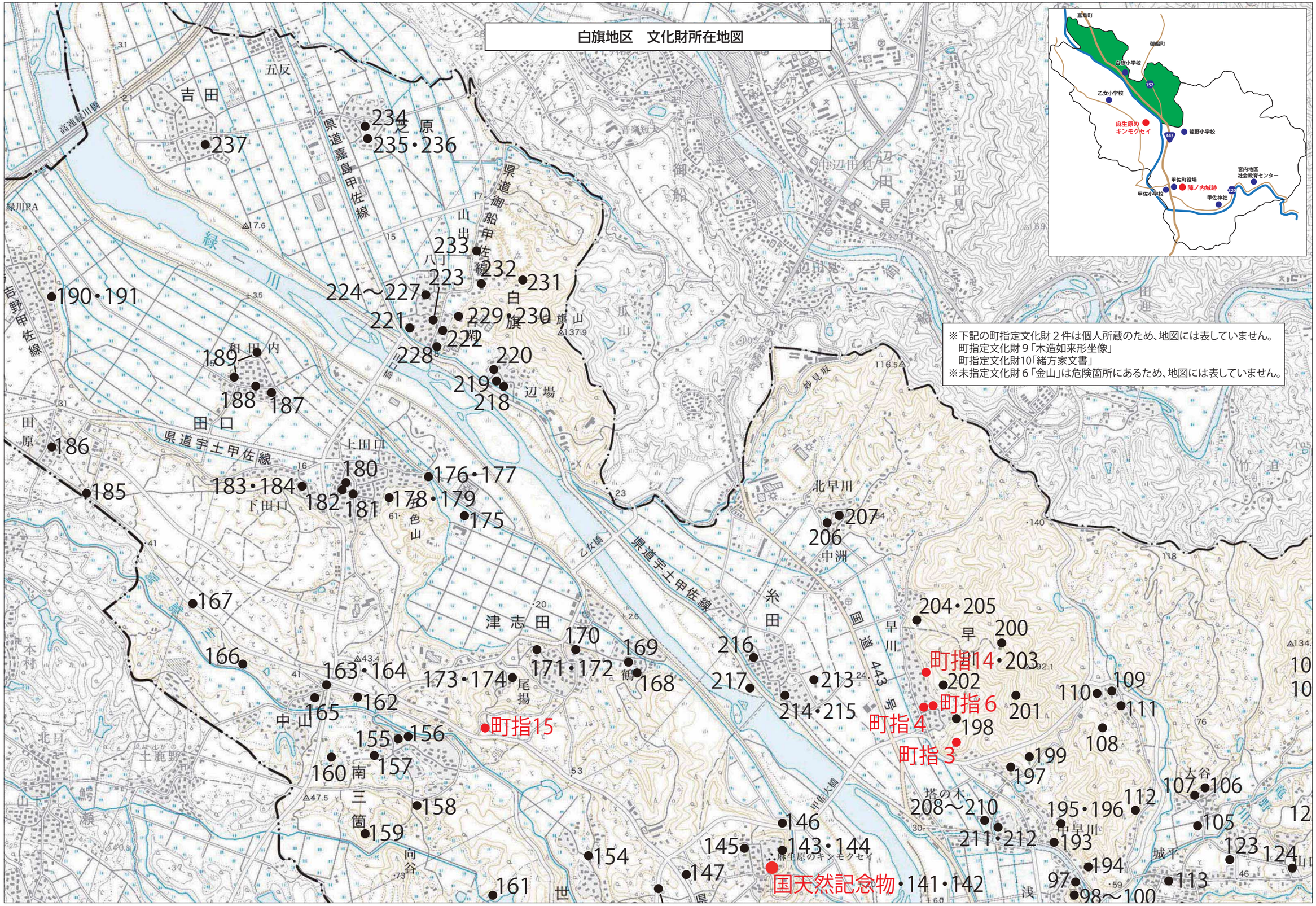


※下記の町指定文化財２件は個人所蔵のため、地図には表していません。
町指定文化財９「木造如来形坐像」
町指定文化財10「緒方家文書」
※未指定文化財６「金山」は危険箇所にあるため、地図には表していません。


竜野地区　文化財所在地図
町指14・203
町指6
町指4
町指3
国天然記念物・141・142
麻生原のキンモクセイ
町指7・83
町指2
169
168
216
217
213
214・215
204・205
200
202
198
201
199
197
110
109
111
108
101
102
103
104
120
125
107
106
105
112
122
121
123
124
113
114
116
115
86
84
85
82
87
88
89
90
91
92
93
94
95
96
97
98～100
117
118
119
146
145
143・144
147
148
140
137・138
139
136
132
133・134
131
129・130
127
128
126
208～210
211・212
195・196
193
194
81
80
71
70
77
76
73～75
72
79
78
18
12
7
4
麻生原
中洲
糸田
早川
中早川
上早川
塔の木
大谷
城平
山口
宮ノ尾
浅井
坊分
船津
有安
大町
古野
岩下
下横田
中横田
内田
鹿里
堂の原
谷内
坂
小鹿
湯田
下原
国道443号
県道今吉野甲佐線
熊本甲佐総合運動公園
安津橋
甲佐大橋
※下記の町指定文化財２件は個人所蔵のため、地図には表していません。
町指定文化財９「木造如来形坐像」
町指定文化財10「緒方家文書」
※未指定文化財６「金山」は危険箇所にあるため、地図には表していません。



※下記の町指定文化財２件は個人所蔵のため、地図には表しています。
町指定文化財９「木造如来形坐像」
町指定文化財10「緒方家文書」
※未指定文化財６「金山」は危険箇所にあるため、地図には表していません。


白旗地区　文化財所在地図
※下記の町指定文化財２件は個人所蔵のため、地図には表していません。
町指定文化財９「木造如来形坐像」
町指定文化財10「緒方家文書」
※未指定文化財６「金山」は危険箇所にあるため、地図には表していません。
嘉島町
御船町
白旗小学校
乙女小学校
麻生原のキンモクセイ
龍野小学校
宮内地区社会教育センター
甲佐町役場
陣ノ内城跡
甲佐小学校
甲佐神社
152
443
220
高速緑川橋
緑川PA
緑川
県道嘉島甲佐線
県道御船甲佐線
県道宇土甲佐線
吉野甲佐線
国道443号
五反
吉田
芝原
山出
八丁
白旗
白旗山
辺場
和田内
田口
上田口
下田口
色山
津志田
尾揚
中山
南三箇
向谷
世
田原
本村
北早川
中洲
糸田
早川
中早川
塔の木
城平
大谷
浅
麻生原のキンモクセイ
234
235・236
237
190・191
224～227
221
229・230
222
228
233
232
231
223
220
219
218
189
188
187
186
185
180
183・184
182
181
178・179
176・177
175
167
166
163・164
165
162
173・174
171・172
170
169
168
155
156
157
160
158
159
161
154
146
145
143・144
147
国天然記念物・141・142
207
206
204・205
200
町指14・203
202
町指６
201
町指４
198
町指３
町指15
199
197
208～210
211・212
195・196
193
194
97
98～100
113
112
110
109
111
108
107
106
105
123
124
216
217
213
214・215

主な引用・参考文献

稲葉継陽 2016「熊本地震と「緒方家文書」」『古文書学実習調査報告書』ⅩⅡ熊本大学文学部日本史学研究室

稲葉継陽 2017「被災史料レスキュー活動と本実習の意義」『古文書学実習調査報告書』ⅩⅢ熊本大学文学部日本史学研究室

稲葉継陽 2018「「緒方家文書」の近世地域行政関係書状群について」『古文書学実習調査報告書』ⅩⅣ熊本大学文学部日本史学研究室

稲葉継陽 2022「記念講演　地域史のなかの陣ノ内城」『記録集「陣ノ内城跡」国史跡記念シンポジウム　甲佐の財の魅力を探る』甲佐町教育委員会

植木町教育委員会 2010『粕道遺跡　鬼迫横穴群』植木町文化財調査報告書第 22 集

上早川区自治会 2019『歩いて発見　上早川の歴史』

菊池市教育委員会 2014『菊池市の文化財』

熊本県教育委員会 1975『熊本県文化財ハンドブック』

熊本県教育委員会 1978『熊本県の中世城跡』熊本県文化財調査報告第 30 集

熊本県教育委員会 1989『熊本県歴史の道調査－緑川水運－』熊本県文化財調査報告第 107 集

甲佐町教育委員会 2012『鵜ノ瀬堰　上揚往還遺跡』

甲佐町教育委員会 2015『陣ノ内館跡』

甲佐町教育委員会 2020『陣ノ内城跡－総括報告書－』甲佐町文化財報告第５集

甲佐町・甲佐町教育委員会・甲佐町文化財保護委員会 1990『甲佐町の文化財』第一集

甲佐町・甲佐町教育委員会・甲佐町文化財保護委員会 1993『甲佐町の文化財』第二集

甲佐町長荒瀬芳松 1966『甲佐町史』

甲佐町史編纂委員会 2013『新甲佐町史』

鶴嶋俊彦 2002「衮衆考」『ひとよし歴史研究』第５号人吉市教育委員会・人吉市文化財保護委員会

錦町教育委員会 2016『錦町合併 60 周年記念　錦町の文化財』

肥後金石研究会・荒尾市教育委員会 1994『荒尾の石造物』

廣嶋秀一 2005「本調査の経緯・概要」『古文書学実習調査報告書』Ⅰ熊本大学文学部日本史学研究室

山鹿市教育委員会 2011『山鹿市の文化財（改訂版）－ふるさとの文化遺産－』

吉村豊雄 2005「はじめに」『古文書学実習調査報告書』Ⅰ熊本大学文学部日本史学研究室

執筆後記

本町は一級河川緑川が町の中央部を貫流しています。その緑川の両岸一帯の文化財・遺跡はミグマタイトそして大峯遺跡にはじまる悠久なる歴史を持つ豊かな自然と歴史的文化資源にあふれた地域です。

令和４年度より３年間にわたって文化財･遺跡を現地で「見て、触れて、聞き取る」調査検証を行ってきました。また今回の第三集において改めて諸先生方の労作である『甲佐町の文化財 第一集』（平成２年刊）及び『甲佐町の文化財 第二集』（平成５年刊）を熟読し参考にしています。

ただ、旧石器時代から古代までの遺跡等は残っていますが数が少なく、十分な検証ができず、中世･近世の文化財や遺跡を中心とした取り組みになりました。今回の実地調査や資料にもれたもの、または分類に検討を要するものなど、これらの不備な点は他日を期したいと思います。

本町には、今回中心的に取り組みました中世・近世の文化財や遺物が、なお多く埋もれていることを付記します。この第三集がさらに町の文化財の発掘整備に役立つことを祈ります。

最後にご協力の方々に深く感謝いたします。

甲佐町文化財保護委員会
赤星眞照　石坂妙　北里義友　成松和夫

甲佐町合併 70 周年記念

甲佐町の文化財　第三集

令和７年３月　発行

編　　集　甲佐町教育委員会
発　　行　甲佐町
執　　筆　甲佐町文化財保護委員会・甲佐町教育委員会
〒 861-4696
熊本県上益城郡甲佐町大字豊内 719-4
ＴＥＬ：096-234-2447
ＦＡＸ：096-234-2957
ＭＡＩＬ：shakai03@kosa.kumamoto.jp
印　　刷　株式会社　協和印刷
熊本市東区保田窪本町 15-20
ＴＥＬ：096-273-9511